

奇譚カラス

1954-4



大の風俗雑誌



田中 四郎

4

奇譚クラブ臨時増刊号ノ

【原名 THE GLOOMY EXPERIENCE】

吾妻氏の麗姿により心にくき遠軌物に描寫された
サディズム文学の決定版
美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く
サディ・ブラツケイズ○吾妻 新訳

アリスの人生学校 (価目) 100円
堂々五百枚に垂んとする長篇サディズム小説
口絵(色刷・単色)カッパ・挿絵多数挿入
第一部 純潔教育 第二部 貞操教育
書店にてお買得れの方は直接発行所へお申込み下さい
送料共

縛られた女ばかりの16態

豪華アルバム 美しき縛しめ 第一集
(各葉解説文句入・美術コロタイプ印刷)

美濃村晃構成・塚本鉄三撮映

工足麗李 風く滑床紅荒目情麗嬌
手小 嬌さ草 との性癖
質物手打虫 質り吊物急白細縫台目わ

【全部未発表】
四人のモデルを使つて完成した
縛られた女の集大成、優美さと
緊縛感の秀れた代表的な責め
真実、解れるような妖しい雰囲
気は素晴らしい反響を呼んで瞬
間に限定部数を突破、これは同
好者のために若干増刷した分
です。
何卒売切にならぬ中にコレク
ションの一端へお加え下さい。
曙書房代理部
(頒価一部 500円 送料60円)

月 刊 **KK通信** 定価 20円 半年100円

(既に第十六号迄毎月
休みなしに発行)

奇譚クラブの誇る特別會員の機関誌
本誌愛読者を中心に楽しいグループ
B6判十六頁に新聞用縮小活字にて記事満載
挿絵、写真等毎号多数掲載、本誌愛読者の欠
かすことの出来ない伴侶です。一般市販せず
予約者のみに送付、目下以下の全員を擁し毎
日増加の一途を辿っています。本誌を知らな
く下された方は是非KK通信も併せて御愛読下
さい。絶対他誌の真似の出来ぬ内容を誇つてお
ります。旧号は第六号より第十五号迄在庫し
ております。【六回分送共百円にて急送】
僅か百円の会費で半年分送料当方負担
毎月B6判十六頁の機関誌をお送り
いたします。○見本は切手二十円にて急送します

本誌6,7,8月号の3回に
亘り連載大好評を博し
たクリスティーヌの受難
の全譯遂に成る！

再版出来！

クリスティーヌの受難全訳
キドロドシュトツク 被虐の家
吾妻 新・訳
B6判、二二六頁、上製、函入
ボイル表紙、挿絵 十五葉入
可憐なる美女クリスティーヌに対する緊縛と彼
ぐつわは汚辱と鞭打と凌辱の地獄図絵サディ
ズムの粋をつくしたクリスティーヌの全訳、画
壇の一方の雄、某氏のアブノーマル挿絵相俟
つてここに完全なるサディズム文学の金字塔
が打ち樹てられた。
定価 三二〇円(送料四〇円)
申込所 曙書房代理部

9人のモデルを駆使して得た未発表の秘作

縛られた女ばかりの三十二態
豪華アルバム

美しき縛しめ 第二集

辻村隆構成・塚本鉄三撮映

頒価 一冊 五百円 (送料五十円)

(モデル嬢)

一本田雅子嬢・村田那美子嬢・高瀬
美津子嬢・川端多美子嬢・厚狭存江嬢
杉本美穂嬢・坂口利子嬢・中富綾子嬢

◆責め写真に欲しいが印刷紙に焼付けたのは高くて困
るとおっしゃる方は是非この傑作集をお求め下さい
印刷紙と変らぬ鮮明なる高級印刷により絶対他誌の追
随を許さぬ低廉な値段で堂々三十二態のあらゆる姿態
の責め写真がお手元に届くのです。市販はいたしません
から直接代理部へお申込み下さい、厳重荷造の上急送
申し上げます。

責めのアルバム 第二集 完成

この一冊を買えば皆さまは他を必要としない位満足
されることでしょう

本誌が「機」に他の諸々の責め写真に例へて半年間より企画
周到なる準備の結果ここに驚嘆に値する超絶級版の完成を見
ました

【豪華な責めの色刷画帖が極めて安価に皆様のお手許へ届きます】

極彩色美術オフセット
多色印刷特アート使用
絵の大きさ B6版
画帖の大きさ B5版

図装釘、縦6寸横8横5分
横トシ豪華美本

三条春彦・画

画帖 時代物責絵巻

内	客
一、山法師と 二、静御前 三、岡引き 四、淀吉と千 五、侍女 六、犬公方と 七、八百屋お 八、芸妓 九、新撰組と 十、門と腰元 十一、小紫と悪 旗本連	一、山法師と 二、静御前 三、岡引き 四、淀吉と千 五、侍女 六、犬公方と 七、八百屋お 八、芸妓 九、新撰組と 十、門と腰元 十一、小紫と悪 旗本連

特價 三百円
(送料五十円)

〇〇各葉説明文句入り
絶対市販致しません〇〇

緊縛寫眞の分譲

断然卓絶した特写
群を抜く素晴しき傑作
類例のない犠牲的安価

◆女体悦虐寫眞集◆

光沢面焼付 手札型
印画紙焼付
五枚一組（一集分）二百円
第六篇（五十一—六十）十集
第七篇（六十一—七十）十集
第八篇（八十一—九十）十集
第九篇（八十一—九十）十集
本誌九月号口絵参照の上御
好みの姿態をお選び下さい
【一集単位】
第十篇（九十一—百）十集
本誌十一月号口絵参照下さ
い。御指定の集をお送りい
たします。

★写真は同好者本位の迅速・確実で信用のある曙書房代理部へ！ すべて送料共

◇野外全裸の縛り

キヤビネ版 三枚一組 三百円

灼熱の夏の陽の下にびち／＼とはねる白魚の如き
肢態にからみつく縄、野
外の傑作中より選り出し
た快心の作品揃い

◇制服の女学生

キヤビネ版 三枚一組 三百円

碟 2 態

キヤビネ版 二枚一組 三百円
一女正面のハリツケ、と三女の中二女
が横面一女が正面のハリツケ、何れも
一糸もまといぬ全裸の縛りである

高手小手 三態

キヤビネ版 三枚一組 三百円

新人モデル木田雅子嬢による豊麗なる
女性に掛けた物凄い緊縛感、縄に悶え
る処女体の美しさ！

◎川端多奈子嬢◎

悦虐姿態集

手札型 七枚一組 三百円

典型的マゾ女性多奈子
嬢の好みに従つて、敢
行した強烈な縛り、そ
してこゝに美しい悦虐
の姿態を得た

◇ナイロンに包

まれた女体◇

キヤビネ版 三枚一組 三百円

〔急襲〕連続十五枚続き

手札型 十五枚 一組 五百円

女が縛られる迄の過程を十五枚の連続写
真にしたもので、狼ぐつわをされ完全に
自由を奪われるに至る経路が如実に活写
された興味溢れる作品、どこにも負けな
い安い値段で鮮明にして恰かも自ら手を
下す如き写真を提供

女が女を責める

第一集 オール・ヌード

一女対一女

第二集 オール・ヌード

一女対二女

何れもキビネ版

三枚一組 三百円

責めの雰囲気を出させ
るために、全裸の責手
の女の出演を求めた。
女が女を責めるところ
に妖しい倒錯的な耽美
の世界が描き出されて
いる。

吊り 5態特集

第1組 第2組 第3組 第4組
キヤビネ版 各組3枚1組 500円
トリック本責めは様々
ないし吊姿や了し

灸責めの 3態

キヤビネ版 3枚1組300円
熱さにのたう
つ女体のエロ
チシズム

鞭打ちの 3態

キヤビネ版 3枚1組300円
鞭打たれて肌
についた斑

碁盤責め

キヤビネ版 三枚一組三百円

基盤の重さにひし
やけた女体の白さ
に見るサシズム

溪流の飛魚

◇女性切腹姿態◇ 第一集

手札型 9枚1組 300円

熱烈な要望により、川合伊都子さんから送られた写真を参考にして新に撮映したものを加えてこゝに第一集を発表した。切腹マニアの一見を希望する。

申込所 大阪府堺区菅原通4ノ30
曙書房代理部
振替大阪34956番



奇譚クラブ ☆ 四月号 目次

あぶの一まる・ふおと・せくしよん

目次	サイカス責め	澤 麗子・画
四月の貴族	新吉原さらし	伊藤晴雨・画
美しい小馬の囀(せり)売り		外国誌より
鞭(むち) (ラゲラチオン)・腰を下す女		
外国の縛り写真(如何ですかこの縛の掛け方は)		
ベツトに縛られる・これでいい? (マゾヒスティック)		
鞭打つ女と馬になる男		
鉄路に散る二輪の花		
蝶 殺		
時草数久・画		
麗子画集		
美容体操・鯉責め・松葉責め		
奇麗なる曲芸師		
高手小手二態		
さるぐつわの掛け方		
柱しぱり・引廻し		
残虐なる女性達		
捕物の舞台寫真アルバム		
麗 巴里舞臺に於ける捕物の國		
久留木 栄		

論稿

細をめぐる随想

久留木 栄 (30)

告白

被虐少年期
艶書通信

三根 耕二 (44)
由利 瑞江 (45)
古川 裕子 (52)

告白

慟哭の記
海外サディズム雑誌

吾妻 新 (67)
松井 籟子 (74)

手記

私の求めた男
長煙管へのノスタルジア

西 貞雄 (86)
田谷 敬生 (88)
小田 雅春 (92)

告白

あるマゾヒストの手帖から
或る同性愛者の告白

沼 正三 (97)

悪の部屋

私は切腹した

二俣志津子 (100)

告白

變態讚美論
闇雲博士の回想

岸田 映子 (110)
鬼山 絢策 (112)
辻村 隆 (122)

非小説

性液

伊藤晴雨 (130)

蜘蛛と蝶々(完結篇)

残虐なる女性達

飛田良二 (126)

体験

切腹研究夜話(三)
ドレイ・ボーイ

森本愛造 (132)
長谷川 洋 (135)
中康弘通 (138)

感情教育(六)

マゾヒスティックな心理に
ついて語る第五回讀者座談会

吾妻 新 (146)
栗原伸・畫 (146)

特別寄稿

責繪は藝術品なり
アブニ痴迷(ちめい)

伊藤晴雨 (178)
鬼山 絢策 (182)

手記

初めて縛られて
痛いと感じた時

村田那美子 (109)
川端多奈子 (191)

体験

收容所脱出
(流浪八年より)

前野恵美子 (192)

スカタロジ

高橋敏氏に問う

川合伊都子 (198)
沼 正三 (211)

サーカス責め

瀧 麗子



逆海老 水平吊



逆吊り



逆海老



片足柱縛り



子



柱背負い海老



竹利用
足枷

新吉原さらし

伊藤晴雨画

「検査場は水道尻の突き当り」吉原のつき当りを水道の尻といふ。昔し紀文大尽が吉原廊内に良水の無きを見て大金を投じて水道を布設したと伝えられる処で秋葉山の常夜燈があつた。明治時代になつて検査場になつたが昔し馳け落ちした花魁が追手に捕われた場合に此処で晒しの私刑を受けたという事である。昔しの三月が桜の期節であるが現代人の感覚から四月の部に入れる事にしました。



美しき小馬のセリ賣り





むち
鞭

うち
撻

(Flagellation)



“腰を下す女”

クラウ社より



外国の縛り写真

(如何ですか、この縄の掛け方は)



高 手 小 手

杉 原 虹 児 ・ 構 成



後 手 首 繩 背 十 文 字 縛 り



後手首縄胸大字縛り

モデル・坂口利子嬢

捕物の舞台写真



愛読者 某氏提供

轢

れ
き

殺

さ
つ

〔鐵路に散る二輪の花〕

畔亭数久画











松葉賣め

ベットに縛られる

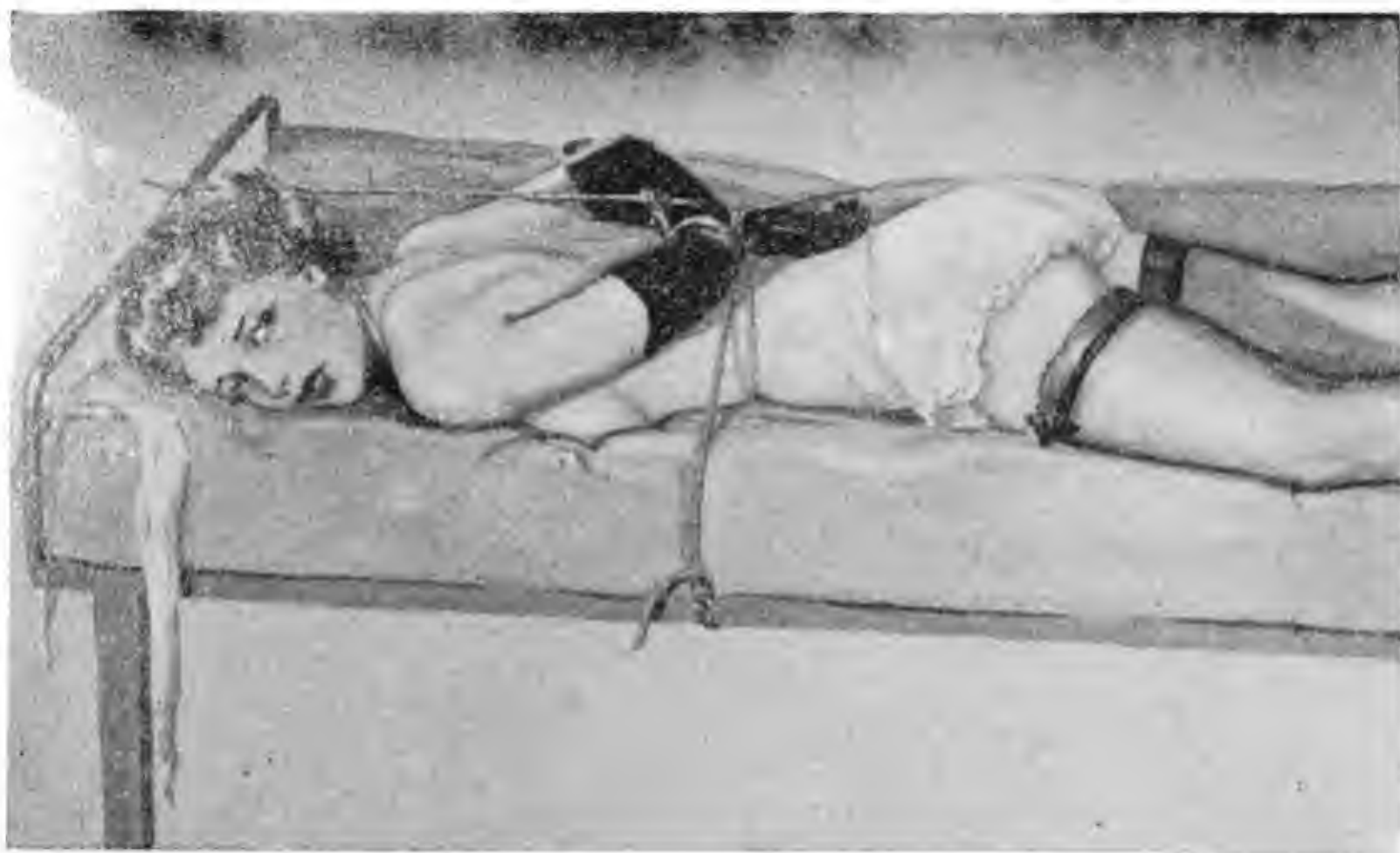
枕元に置かれた白い布、愁いに満ちた涙にうるんだ瞳、これはベットへ伏臥させられた理想的な尻打ちのポーズである。しかし、対象や鞭がないのでより空想を仿かすことの出来る味合深い絵となっている。



「これていゝの？」

黒のハイヒールにぐつと踏みつけられた男の手首、このクローズ・アップだけで勝誇った女の高漫な表情と意気地なしの男の満足しきつた顔が見えるようである。





鞭打つ女と馬になる男

—天泥盛英氏提供—

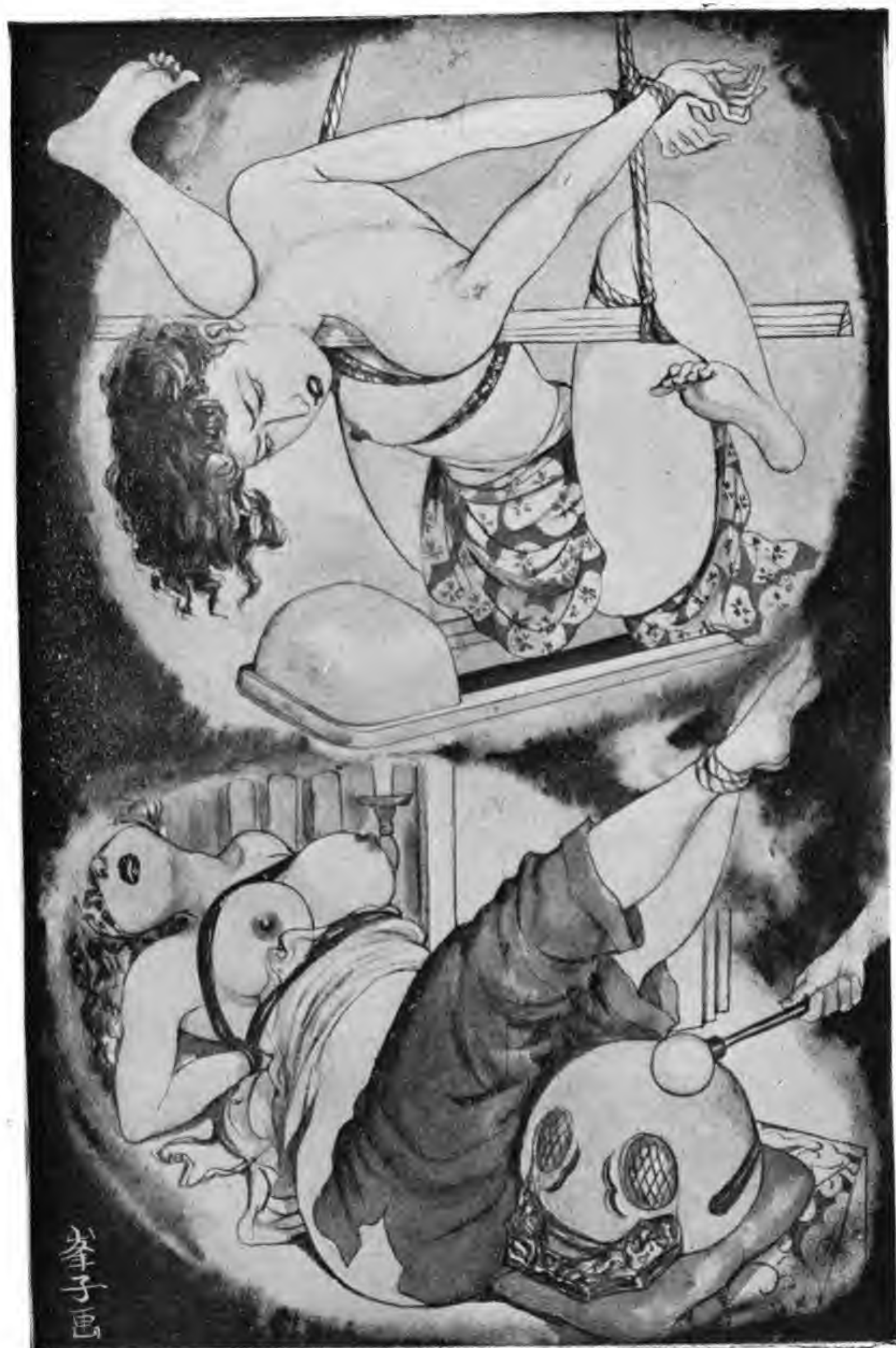
女の右手と靴のボケ、代表的なサジスチンの演ずる鞭打は激しい迫力を持った動きのあるマゾヒスト垂涎の写真となつている。



奇妙曲芸師



小室子
画



孝子画

さるぐつわの掛け方



中富綾子
村田那美子嬢



桂 し ば り

坂 口 利 子 嬢

女性は自分が美しくなるためには、どんな肉体的な苦痛でも甘受するものである。
「貴女が美しくなるため」そして片足拇指吊りの曲芸も演じさせることが出来る。



美 容 体 操

滝 麗 子 画

柔と軟の着想より

鰻 責 め



人間は蛇とか鰻とかいう長いものには本能的な恐怖を感じる、蛇はいささか使い古されているので、美しい娘を着衣のまゝ鰻入りのざるの中へ投げ入れてみた。魚ぎらいの人には？――

残虐なる女性達

解説
森本愛造



Das Grausame Weib の挿絵

「或る幻想的な一場面」という表題の付された Von A.Z. 氏の作品、古典的マゾヒストの好む全ゆる要素が綜合されている。

ロシア風の馬ソリに付けられた遅ましい男、鈴馬車用の長い鞭、毛皮の外套、残忍な女の笑顔、男達の肢体につけられた烈しい鞭痕、強烈な色彩等が迫力をもつて描かれている

調教師 表情とコントラクションのよさ (フアラ・モロ作の挿絵)



「懲戒室にて」 ドイツ本の挿絵

白人女への懲戒が行われる所、刑を受けを女の穿いている長靴は私にはとてもエロテックであるが……





奴隷小説の挿絵 説明不詳

女主人の手に持てるは奴隷懲戒専用の寸法に作られた Cow hide (牛追い鞭の一種) 幻想的マゾヒズムの対象になる十分な資格あり



“Grausame Weib” の挿絵

＜Pantherkatze＞ 南米産の山猫という表題の vala moro (フアーラ、モロ) の作品、手に持てる鞭は Scrouge と称せられて罪人鞭打に多く用いられる。筆力誠に雄渾、此の種作品中白眉であろう。



懲戒用の「九本の尾を持つた猫」の異名のある革鞭を振う女生徒の残忍なよろこび、マゾヒストの歓喜であろう。

女生徒に女生徒を打たせる女教師

“或る種の悪戯”

ミュンヘン版 DaS Leben 誌、1934年5月号所載の挿絵、上記の題名以外、詳しい説明はないが、男のサジズムを扱った漫画、性的遊戯に用いる人間用のくつわの構造が微細に描かれており、「畜化狂」諸氏の参考となると思われる。



TACK (タック) の作小説挿絵

し 廻 引

嬢 美 芙 杉

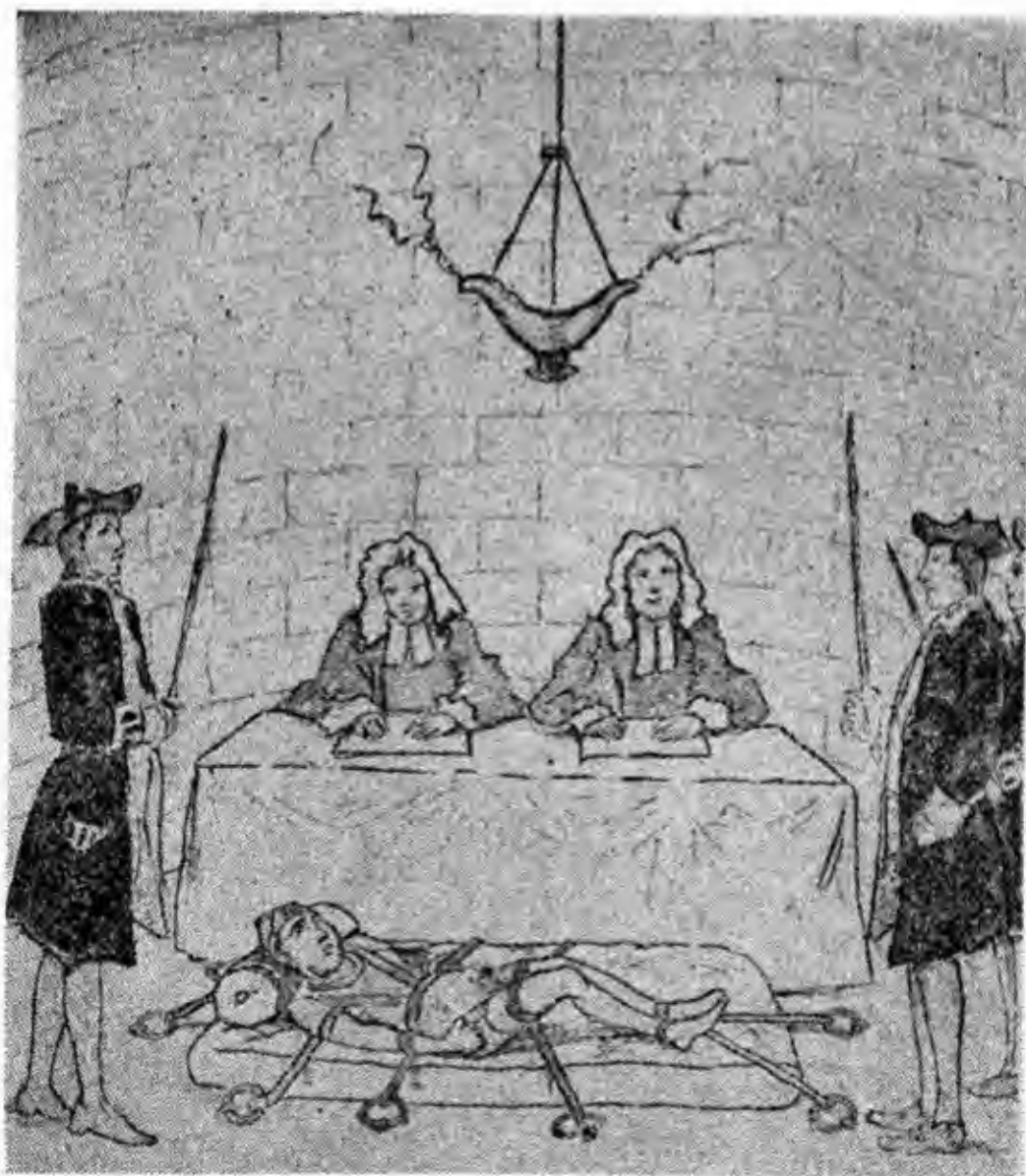


新時代の風俗雑誌

奇譚クラブ

1954年 4月号

(第八巻 第四号 通刊第六十七号)



巴里監獄に於ける拷問の図

Prison de Paris に依る

繩をめぐる随想

久留木 栄

——我が妻を縛る——縛りの魅力——

○
人が美しさを感じるのは、その美しさに酔いしれた瞬間である。

それと同じように繩の効果に感謝するのは責につかれた瞬間である。たしか私が責についてそれほど深い関心も興味も持たなかった頃のことと思う。蓄膿症をわずらつて耳鼻科に入院した私は或る夜、すゝり泣く女の声を聞いて外に抜け出した。うす暗い月光の影にかすんだ廊下を抜けて庭に出ると、松の木枝に一人の女が縛られていた。女はまだ十七、八とみえ恐さに口もきけぬ程であつた。それが看護婦であるか院長の娘であるか、或は又車夫の妹であつたか——ついに私は判別することはできなかったが、夜目にも白い夜着の上から肌にくいこんだ二本の太い繩の逞しさだけはしつかりみとどけることができた。

後年になつて私が責につかれ、女房にはじめて繩をふるつた時、私が思ひうかべたのはただこの光景だけであつた。まだ処女性を失わぬ妻の乳房に食いこんだ麻繩の逞しさを、私は生涯忘れることはできない。それだけに強固な二人の愛情だと思つてゐる。女性の肌

に食いこんだ繩の逞しさをとりもなおさず愛情の深さ、固さになぞらえることは、サジストとして夫の独断であらうか。

○
女を縛つた瞬間の喜びは女の羞恥を縛つた喜びである。女の羞恥心の中には必ず愛情がふくまれており、その愛情を縛りあげることが最大の喜びである。

私は妻を縛りあげると必ず両手で顔をはさみ、妻の額にキスを送ることになっている。その時、妻は目を細くして（或はつむつてゐるのかもしれない）必ず答礼する。さあ今からたんと責めますよ、ことによつたら泣かすかも、殺すかもしれませんよ、そういう私の意思表示なのである。それにたいし妻の答礼は完全な服従を意味している。

今にして思うと妻の答礼がなかつたなら私は本当に妻を殺してしまつていたかもしれない。私はこの妻の表情を單なる責に対する反応とばかり考えることはできない。それが証拠にはキッスをしたあとでじつと妻の顔をみつめてゐると、妻はやがて、目をみひらく



が、その視線が自分を凝視する夫の視線とあつたさい、妻はたとえようもない羞恥に全身真紅となるのだから。

○

女は縛られることを欲する。目に見えぬ繩と目に見える繩の差こそあれ、どの女も縛られることを欲する。その証拠には縛られた女は声には出さねど決まつて「私は貴方を愛していますわ」と胸の中でたえず叫びつづけているのだから。

いつもいうようだが私が妻と結婚した時、妻はなかなか愛していませんわ、と言わぬ女だった。今でもそうである。それで私は妻にこの言葉を吐かせたいと思つた時だけ妻を縛ることにしている。

縛られた妻と、縛つた夫がさしむかいになり、愛という言葉をめぐつて無言の行をしているなんて——考えただけでも身内にぞくぞくと幸福感がうまれてくるではないか。無言の責というものは時には雄弁の責に、数倍もまさるものである。

○

「若い人たちのいづく愛の觀念はまだ實際の人間にあてはめてみたことのないものである。ところが或る人間を愛するすべは、その人の現實を通して学ぶほかはない。これすなわちあらゆる新婚の家庭に一時風波をおこさせる一経験なのである。」

夫婦愛の作家として知られるフランスの巨匠 ジャック・シャルドンは、その著「愛をめぐる随想」の中でこう語っている。なるほど愛にはそのような性質の一面があるのかもしれない。だがこの言葉はサジスムスを受する世の多くの殿方にも絶対に忘れてもらいたくない言葉である。

「若いサジストたちの抱く繩の觀念はまだ實際の人間に当てはめてみたことのないものである。ところが或る人間を責める術は、その人の現實をとおして学ぶよりほかはない。これすなわち、あらゆる新婚の家庭に一時風波をひきおこす一経験なのである。」

さて私は昨年の十月号に「現代のサジスム」なる小論をかゝげ、その中で「サジスム」——いや変態性欲の社会的必然性という問題

にちよつとふれたが、真実、夏目漱石のいうように「情に竿させば流され、理に逆えばかどが立つ」というすみにくい世の中なら、そのすみにくさに抑圧された性慾が歪曲されてくるのもまた多少やむをえまい。そこで多かれ少かれ、人は男なら若い頃から想像的サジズムの第一歩を踏み出すようにできている。私ももちろんそうであった。小心翼翼々として暮すものの常として秘かにつかみえたパラダイスを死守するように空想を走らせ、天使のようなみえうるわしい女性を沢山まぶたに描いて、それを無残にも縛りあげ、幾たびか自慰にふけたものだ。それが妻をめとり、家庭生活をもつようになるとしずかに現実の社会にむかつて、頭をもたげてくる。かくれていた美德が世にあらわれるように、夫婦生活の中に実現される可能性をもつてくる。純真な青年の多くが夢に描いた天使というものはつまるところ妻でいえば、まだ処女性を失わぬ純粹無垢なものなのだ。その処女妻を突然縛りあげ、天使というペールをひっぱいでみたくなるのは人間たるもの誰しも経験したところであろう。

ちようど六年前のことであつた。新婚間もない私は、まだ処女の妻を伴つて新婚旅行に出発した。夕暮の有明海にゆられ、島原に泊、翌日は雲仙の地獄に足をとどめ、下つて小浜温泉に一泊した。その小浜温泉で私ははじめて妻を縛つたのだ。

むせるような湯の香にひたり、打ちよせる東支那海の波の音をきき、月光の宿屋に息をこらしめて、妻とさしむかいになつた時、突然降つてきた雷のように妻を縛りたい欲望があれ狂うのを知つた。

はやる心を押えつけ押えつけ。今夜は何をしてもかまわぬかと言つた時の私の気持は、今もつて思い出しても胸のしんがしびれる程の興奮にとらわれていた。それから厭がる妻を押えつけてというこ

とになるのだが——実際はあまり興奮しすぎて、どのようにして縛つたかよく覚えていないくらいであつた。妻はとくに厭がる様子で



もなかつたらしいが、それすら記憶にない。ただふるえのとまらぬ手で妻のやわらかい、むつちりとして色白く、肉付きのよい手をうしろにねじまげ赤いしごきを力一杯まきつけたことを覚えている。

痛い！

とかすかに妻がいつたようだった。だがそれから聞きのがした私は、ただ妻の体をだきしめておろおろするばかりで、一緒に山の坂をころげまわりたい程の感動であつた。私だけでなく、もちろん妻もふるえていたし、もちろん上の空であつたとみえて後に何度聞いてもただ「素晴しかつたわ」というだけで今もつてそれ以上何も語ろうともしない。しかし私は妻がその時の情景をつぶさに記憶していることを知っている。妻は私とちがつてそういう折には、逆に平静になる性質なのだ。だが妻がしやべりたくない理由は私もよくわかつている積りだ。妻はしやべることによつてその日の感動を失いたくないからだ。なぜなら妻はその日はじめて処女を失つたのだし私はまたはじめて夫としての機能を完全に自覚したのであつた。その後、妻にたいする縛りは、しばしば行われ、妻も喜々として従い時には花恥かしい目に出合い、時には痛い、苦しい責にあい、お互に研鑽を深めていったが——こういう楽しみの門戸を開放してくれたのは実にこの時の突発的な発作——狂気のせいであつた。

元来私はサジストであるが決して正常な行為を排斥するものではない。いや真の夫婦生活はあくまで正常な行為の中にふくまれ、お互の歡喜涕泣のオルガスムスの中にあることを知っている。サジズムはこれを助ける一部分にしかすぎないのだ。結婚六年間、何回、何百回となく妻を縛ってきたことだろう。そのたびごとに妻から手痛い抗議をうけたことは身にしみる程有難かつた。今もよく妻を責

めたあとで妻から何度となく抗議をうける。だが妻は私のサジズムを良く理解し、私が責める時は決して私の感情を害そごおうとしないのだ。これがなかつたら私の家庭は破壊していただであらう。私がサジストでありながら健全な社会生活を送ることができるのは実に妻のおかげだ。素裸にむかれ繩の下にうめきながら、夫の愛情を忘れず更に夫の愛情を深めてくれた妻に私は今更ながら感謝している。長い歳月のあとで私の家もどうやら住みよくなつたようだ。結局私の縛りもジャック・シャルドンヌのいうようにある時期に於て「一時風波をもたらず経験」であつたのだ。今では妻が「貴女の縛る姿をみていると興奮してきて」と告白するまでになつた。

私はサジズムのために、まだ妻の肉体を損傷したことはないが——それに近い経験は何度かあり、泣かせた経験は比較的多い。妻は怒りつぽく私のサジズムに深い理解をもちながら、縛られるとすぐブーツと腹立て、しまう。いまではこの立腹も愛嬌にすらなつた。妻の大らかな愛情や、温健な思考力に救われ、妻の内助の功におぼれて生活している私は幸福というよりほかはない。サジズムに徹しサジズムに生きたい私だが、その限界を愛妻のためにも認めぬわけにはいけないであらう。まことに「人を責めるすべは、その人の現実をとおして学ぶよりほかはない」のである。

○

奇クをよんでいると、岡田咲子さんのお話して「私の想い出」というのがみつかった。その中で、

「私、貴女の体がみたいの。縛られて全裸体なんて考えただけでも素敵なことよ。私、貴女を思うとおりにしてみせるから」というのがある。

また南川和子さんの「羞恥のヴェールをぬいで」という文章の中にも

「和子さん、貴女はわたしの身体をすっかりごらんになつたのだから、わたしも貴女のお身体を見せて頂くわ」

「可愛いベツトさん。これからわたしの言うとおりにするんですよ」(KK通信より)

という言葉がある。

前者は女学校時代の水泳部の合宿時の出来事を描いたもので、後者はお姉さんと称する或る建築技師の奥さんとの交歓の物語で、いわばいずれも同性愛的な行いだ——この言葉の中に不思議なほどサジストとしての女性ならぬ男性の跳梁をみるのは私だけであるまい。

男にとつて女の、とくにけがれを知らぬ美しい裸体は何ものにもかえがたい魅力なのだが、それ以上に魅力のあるのは、そういう汚れを知らぬ天使を思うまゝにできるといふことなのだ。

縛りあげたからといつて、真人間が人間を思うとおりにできるものではないが、少くとも正常な状態よりも幾分自由にできる状態に近づいているといつてよからう。縛りの魅力はそこにある。

どのようにキツチリ、まるで荷造りするように手、足、顔、胴、頭を縛りあげたとしても、なおかつ少し自由がのこっている。マゾヒストにいわすれば、その自由にたえがたい喜びを感じるであらうしサジストだつて同じことだ。サジズムとマゾヒズムが表裏一体といわれるのはそういうところにあり、私が妻を突然縛つたのも、妻の自由を奪いたいという魂胆からに相違なからう。いくら縛つても縛られても自由はあるということを直観的に把握したからであらう。

私は必ず妻を縛るときは、「思うとおりにしてみせるよ」と胸の中で叫ぶことにしている。思うとおりにしてみせると思わずして人を縛り、それでその人に愛情を感じたと思う人があつたら、私に知らせてもらいたい。私はその人を思うさま軽蔑し、あざわらつてやりたいものだ。

そこでこういう言葉が生れてくる。

「女は思うようにされると思つて縛られ、男は思うようにできると思つて縛るところにサジズムは完成する。そして一度完成したサジズムの愛は二度とこわれぬものである。このことは破局を意味しない。だがこのこと自身破局になることはあるであらう。なぜならこれ以上に甘美な感動はほかにみつかりそうにもないからである」

○

このところ新聞や、小説をにぎわしているのにフランク・カフカの文学がある。「審判」「城」「変身」などをかいたカフカは実存主義文学の先駆といわれた人で、ドイツのある小さな町の小役人であつた。彼に関する文学論争をこゝであげつらうのは愚の骨頂だからやめにし、このカフカを、サジズム、マゾヒズムの立場から少し散歩してみよう。

彼の作品の中で最もサジズム臭の強いのは何といつても「流刑地にて」であらう。寝台と録写機と馬鋏うしづなという名の三つの部分からなる刑具を考え出した「前司令官」は実はカフカなのであらう。この機械は囚人を寝台の上にうつぶせに縛りつけ、その背に馬鋏で、「汝の上官を敬え」と彫りこむのだという。小説の筋は免に角として、この機械の精能を微に入り細にわたり描写し、屈辱におのゝく受刑者心理を描写しつくしあます所のないあたり、とうてい飛田

氏の「罪の椅子」の及ぶべきところでないであろう。

「本人は自分の判決を知っているのですか。自分の判決をすら知らないのですか」

と質問する探検家（実は見物人）にたいし士官（実は刑執行者）は

「伝えてやるまでもないでしょう。どうせ自分の体ではつきりと、思い知るわけですから」

と答えている。さしずめ

私と貴方がさしむかいで、

芸妓をあげて遊んでいるとしよう。私が彼女を縛つてみせると貴方に約束をした時、貴方はきつと「え、縛るつて本当ですか」とお聞きになるにちがいあるまい。そこで二、三言葉のやりとりがあつて、貴方が

「彼女は縛られるということを知っているのですか、自分の運命すら知らないのですか」

と聞いた場合、

私がニヤツとうすら笑いを浮べ

「わざわざ知らせるまでもないでしょう。どうせ自分の体ではつき



りと思い知るわけですから」

と答えたらどうだろう。貴方はきつと気の遠くなるようなサジズム的な妖氣にけおされることでしょうか。

カフカとはそんな男なのです。事のついでに飛田氏の「蜘蛛と蝶々」とカフカの「変身」とを比較してみると面白い相似を発見する。もちろん、筋もストーリーも全くちがう物語なので比較の対象になるべき筋合のものではないが、私が比較して面白いというのは、虫に変わったグレゴールが天井からさがるくだりで、ちよつとそのあたりの情景を抜き書きしてみよう。

「その日は一日じゆう、いつ父や母が入ってくるかもしれぬとグレゴールは気をくばり例の窓のところへは行かないようにして、ほんの二、三平方メートル

の床の上を這うだけだった。彼はもう夜間だけでもじつと横たわっているのが苦痛になった。食事さえちつとも楽しみではなくなっている。仕方なしの気晴しに壁や天井を盲滅法に這いまわる癖がつい

た。天井へ這いあがつて宙にぶらさがるのが面白かつた。床の上に横たわっているのと全然ちがつた感じがする。呼吸まで楽にできた身体じゆうな軽快な振動が走る。上の方でうつとりと愉しい放心状態に陥つて、つい身体が離れて床へぼつたり落つこち自分でびつくり仰天することもあつた。」

これだけではちよつとわからぬだろうから少し補足すると、グレゴールというのは一夜のうちに大の男から等身大の虫にかわつた人間である。「蜘蛛と蝶々」でいささしずつめテントの袋に入れられた里枝というところであろう。たゞ少しちがうのは体が不自由ではあるが這うことができるという点でこの点も床に放り出された限りにおいて相似しているといえる。グレゴールは人間の言葉が話せずこの点も里枝と似ている。最もちがうのは、天井からぶらさがるのはグレゴールにとつては最大の自由であり遊びであるのだが、里枝にとつてはそれが責苦であるという点である。里枝がやがて自ら進んでズダ袋に入り、天井から釣りさげてもらうようになったとしたらどうだろう。里枝のマゾヒズムに敬意を表するのは私だけではあるまい。

もし徹底したマゾヒストがいて、いま私の目の前で私の手で天井から吊りさげてもらうのを願つたとしたらどうだろう。

「君はカフカ張りの小説が書けますか。」

そりやもうカフカ以上の珍文ができるでしょう。珍文はできなくともその女に最大の幸福をもたらす程度の責めはできるつもりである。

○

でも、でも、あゝ誰か来て下さい。さあ早く私を裸にして

ギリギリつと縛りあげて、口には呼吸もとまるほどの猿ぐつわを嵌めてしまつて！ そしてお望みなら、その上何とでもして！ あゝ誰もそうしてくれる男のかたは居ないのでしょうか。今、ここで私はこんなにもだえているのに――

私はこの古川裕子さんの叫びを聞いていると、体がむず／＼してきて仕方がない。なんという切ない叫びだろう。

勿論この言葉は昨年九月号の「長期刑」から引用したものだ。

古川女史はこのような痛烈な言葉を吐かれる反面、実に温健な人生觀をもつていられて「もし私に、お目をかけてくださる方がありました時は、どうか私の出現のために、その方の周囲に不幸な人ができないように」（十二月号 凌辱の幻想と期待）とおつしやるのだ。サジストといわれマゾヒストと呼ばれる人にはたいいこのような二傾向があるようにみうけられる。私などもその良い典型だ。昼は社交界に活歩し、新聞記者として一線に活躍し、夜はアブノーマルな情痴の涯に沈む。そういう生活が身体を損うかもしれないが現在私はそのいずれをもする気がない。紳士と野獣とその二つが私の体を蝕んでいるような気もする。私はこういう二重の生活を解釈して現在私たちが常にいだいている精神生活を豊かにすること、或は知識を愛し、社会人として立派にくらして行くこと。こういうのは人間の美点を極端に守ろうとする態度であり、今一つのものは全くそういう美にとらわれた虜囚の態度であると。とらわれたものは奴隸であり、奴隸の胸の中には野獣の遠吠えがたえずわきおこってくるのである。昔から私は人間にこの二つの傾向が併立していることについて疑問をもち、悩み抜いて来た。今もそうである。ところで私達の生活というものは常にそういう二つの弱点をむきだしに

しているものであつて、松井籟子女史が「淫火」の中で描きたかつたのも白百合夫人の中にあるそういった霊肉の斗争であつたらしい女史はその作品の動機にケツセルの「昼顔」をよんでといつてられる。むべなるかなとでもいおうか――。

さていま一步考えをすすめて、ではこのような矛盾や狂気じみた愛情がどこから湧いてくるか調べてみよう。古川女史の作品を掲載順にずつと熟読翫味してみると私はこの根底に根強い人間愛の主流が首をたてて流れているのを発見しないわけにはいかなかった。私が古川女史の作品に愛著を感じたのは、そういう人の人間愛の豊かさ、特異な経験や心境描写を通じて測々と人の心を打つからで、それだけで充分だと思う。ではそういう人間愛はいつたい通常いわれる結婚の前提をなすと考えられる愛情とどれだけ異なるものであろうか。残念ながら私は明確な区分をつけることができない。ただ私は人間愛はそうした一般の愛情が純化され永遠の生命を付与されたもの、つまりは永くかわることのない愛なのだと思う。私なぞ、古川女史のような人にめぐりあえたらと、心秘かに何度思つたことであらう。

ところが世の中というものはなかなかうまくできていないものであつて、そういう人達は会おうとお互に思つていても中々知る機会すらもないものである。また会つて話したところでたいがいガツカリして相別れるがオチというのが常識だ。

そこで私は再びジャック・シャルドンヌの言葉を思い出したのである。

「愛し合うべく運命づけられた二人が行き合う。などということとはとても信じられない。そんな実例は滅多になく、したがつてそんな

話は御免を蒙つた方がいいたろう。ところが社会でいわれることはどれもこれもまるで例外の方をかえつて常道とみているようなもので結婚の前提をなすものもやはり愛し愛されること、そして永く変ることなき愛なのである。つまり一切は世にも妙な例外をめぐりに、組みたてられているのだ」

ところでこの論法からいえば、古川女史の夫婦生活なぞというのは、まあいわば世にも妙な例外となるわけで、そんな話は御免を蒙つた方がいいたろうというわけだが、真実それを目あてに世の中が組み立てられているというのだから、サジズム党の輩又快哉を叫ばざるべけんやだ。古川女史としても、たとえ残された財産が重荷にすぎてもそのマソヒズムの重荷に喘ぎうるだけにたぐい珍なる幸福者といえよう。うらやましきかな。うらやましきかな。

「一人の女性に於て人はまさしく生をこそ愛する。一本の縄に縛られて女性^{メス}はまたまさに生をこそ知る」というのはまたまさにこのことであらう。

(三条春彦画)

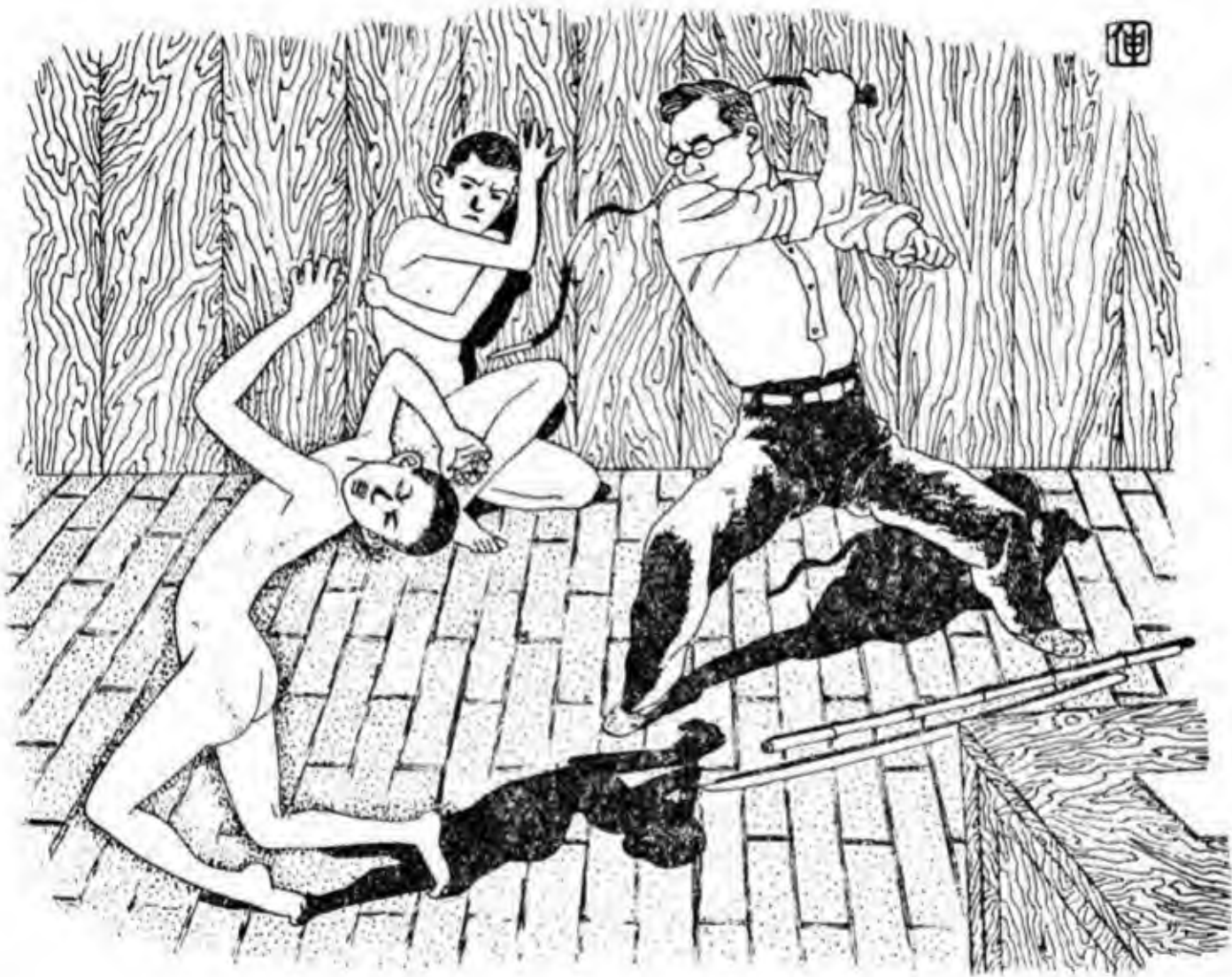
【募めるアイデアを】

本誌に発表する口絵の責め写真や縛り絵、或は代理部の分譲写真について、こういつた構図やポーズ、或は趣向で作成してほしいといった御希望がございましたら何卒御遠慮なく編集部宛御申出下さい。万難を排して御希望のもので誌上を飾りたいと思います。採用の分並に優秀なる企画に対しましては画稿又は写真^{写真}を差し上げます。説明以外になるべく略画又は説明図を添えて下さるようお願い致します

(編集部)

被虐少年期

二 耕 根 三



昭和十五年六月×日。いよく少年放火囚として、私はなつかしい故郷から引離されて恐ろしい少年刑務所に送られる事となりました。その朝いつもより早く起きた私は、少年囚への心尽しの常の倍の麦飯、なみなみと注がれた味噌汁と山盛の沢庵の朝食をすまし、看守に伴われて三月振りに表の事務所へ連れてゆかれ、青い囚衣を脱ぎ自分の衣服に着替え、そこで課長から云渡しを受けました。それは、「検事の執行命令に依り、これより姫路少年刑務所に押送する」と云つたものでした。私は思い出の鉄門を潜りました。外には黒塗のセダンが待つていました。あゝ自由の身として解放されるのであつたなら、どんなに嬉しいことか……しかし現実の私は年少の身に恐ろしい放火犯人とし腰縄手錠の浅間しい姿で天日の下に晒されているのです。

二人の護送看守に促されてセダンに乗込み車は一路京都駅へと走りました。駅で下りてからの私は羞恥と屈辱の塊りでした。六大都市京都の玄関口で幾百幾千の人々の好奇の眼に包まれた

十四才の少年としては、当然であると思ひます。殊に同年輩の少年達にしろ／＼と眺められる苦痛は想像以上で、顔をかくそうにも両手は冷たく光る手錠にいましめられているのです。ホームに出ても多勢の人の視線が身体の間々迄喰入ります。

やつと到着した列車に乘込み片隅の席を与えられて、やつと幾らか楽になりました。姫路迄の車窓は美しい瀬戸内海の風光なのですが私はそれ所ではなく、やがて放り込まれる筈の少年刑務所での苦難の年月を考えて不覚の涙を落しました。午後二時頃、目的の姫路へ到着し、駅前の待合所で大阪から送られてきた二十名程の少年囚達と一緒に迎えにきた護送車で少年刑務所のある郊外に向いました。そしてこのコースは最初で最後の眺めとなつたのですが、それは後のお話で二十何人の少年達はそれ／＼の感慨を抱いて四十分程の道を揺られて赤煉瓦塀の少年刑務所に到着しました。

此処には近畿地方各府県の少年犯罪者が収容されていまして、大体七百五十名程の少年がそれ／＼の罪を償うべく服役していました。いろ／＼の事務上の調べが終り、私共は第四舎の独房へ収容されることになり、それ迄着

ていた衣服を脱ぎ、素裸になり今度は柿色の半袖シャツとズボンに着替え看守に導かれて四舎へ向いました。鉄門を潜つた所に戒護課と札がかつた事務室やら看守達の休憩所がありそこには大きい柳の木があつて、その前に池がありました。此の戒護課が所内の風紀を取締り反則者を処罰する警察と検事局に当る所であり、所内受刑少年達の恐怖の的であることを、そして此の柳と池が所内で歌に迄歌われている恐ろしい責の道具であることを知つたのは大分後のことでした。

又、姫路少年刑務所は昔姫路藩時代からの牢獄があつた所で木造の建物が並んで人外境を形作つていたのです。

独房は四十室位が半分づゝ赤煉瓦の敷石の廊下を挟んであり、新人の者や反則者（規則を破つて懲罰を受ける者）などが入れられていたのです。入れられてから一週間程は色々の上調査が行われます。智能や体力のテスト、性格や家庭の事情などの調査もあります。此の四舎のある建物は放射状になつていて一舎から四舎まであり、一舎より三舎はもう工場に出て仿らしている少年達の居室で夜だけ帰つてくる訳です。その他に別区劃に五、六七舎があるので、それについては後に書き

ます。

さて四舎の受持看守は野村と云う三十五六の人でした。女性的な声で一見優しそうですが、今考えると野村看守程冷酷無情の役人はいなかつたと思えます。

此の野村看守の鞭を一ヶ月程の四舎生活で幾度受けたことか……

こゝへきて四日目でした。二十一名の新入少年は二列に野村看守の机の前に並べられて苛責の第一歩を受けたのです。

「お前達は態度がよくない、こゝは社会とは違ふんだ、刑務所の味を見せてやる」

何と云うことでしよう、新入りである私達は廊下を通る足音にもビクツとし正座して足の痛みを耐え、夜寝てからも青い粗末な木綿布団の中で蚤に責められ、なつかしい故郷のいろ／＼の事を思い起して泣いているのです。言葉遣いも卑屈な程に氣をつけているのに一体どこが態度が悪いのでしょうか、しかし此の赤煉瓦の高い塀の中で普通の理窟の通る筈はなかつたのです、机の横には色々の責道具がこれみよがしに私共に無言の威圧を与えていました。青竹のつや／＼した光り、檜の木刀の黒光り、何にもまして私を慄え上らせたのは幅五センチ長さ二メートル近い革のバンドで

した。今迄に幾十人の肌にまつわりつき悲鳴をあげさせたかと思うとガク／＼と私の身体は慄えるのでした。始めに十五・六人は木刀の喰りの前に浅間しくも悲鳴をあげ打倒れてしまつて身にしみて刑務所の恐しさを味わさせられました。一寸申上げておきますが二十一名の内殆んどは満十七、八才の準少年で残る私と他に三名が純然たる意味の少年で満十六才以下の年少者なので刑期は一年以上三年が最も多く、これらの少年は窃盗詐欺横領などの犯罪者でこゝに送られてくる迄には何度も警察の御厄介になつて少年感化院などは何度も出たり入つたりしているのです。しかしこゝはそれら少年犯罪者の終点なのでした。さて木刀を離した野村看守はニヤ／＼と冷たい笑みを浮べて恐怖ですくんでいる残りの四人の所にやつてきました。

「おいッよく見たか、さあ今度はお前達だ裸になれッ」

私共は止むなく半袖シャツとズボンを脱ぎ禪一つの恰好で気をつけの姿勢で立つていました。野村看守も上衣を取りＹシャツ一枚になつて袖口を捲くり上げるのです、人に懲戒を与えると云う態度ではなく鞭を振り、悲鳴をあげさせ苦痛に身をよじらせることに快

感を感じているに違ひないのです。眼鏡の奥でその細い目はキラ／＼と妖しく光り、そのキン／＼した声は歓喜に上ずつていようです。今から思えば野村看守こそはサディストであつたに相違ありません。今度は青竹で二人十二、三づゝ尻を打たれて倒れました。

そこで何を思つたか野村看守は私とやはり十五才の小野寺少年の二人丈を残して他の少年を房内に入れてしまいました。

私共の心理として一人で責められるよりも二人、二人よりも五人と仲間が大勢いる程受ける責苦が楽なのです。それを二人丈残されしまつては恐れはたかまる許りでした、野村看守は今度は二人に最後のものを脱れと命じました。女性程ではないにしても全裸ということの羞しさは体験のない方には一寸想像出来ないと思います。殊に思春期近い私達にとつては堪えきれぬ屈辱感と羞恥で顔丈でなく長い拘禁生活で白い身体の間々までを真赤に染めてしまうのです。そういう私共の羞らしい姿を野村看守は意地悪くジロジロと眺めまわしニヤ／＼していました。野村看守は今度は例の革バンドを取上げて私達の前で二、三度振つてみせました。あゝ私が一番恐れのでみていた革バンドの対象に選ばれてしまつ

たのです。

その時、そばに立つて慄えていた小野寺は手を合せて野村看守に謝り始めました。何の為に謝らうというのか、私は別に何の規則に反いたという覚えがないので、呆氣にとられていました。しかし野村看守はいきなり持つていた革バンドを小野寺の尻へ振り下ろしました。ビュ、ビシツと異様な音がして小野寺は「アツ」と悲鳴をあげてそこへ座り込んでしまいました。色白の小野寺の背から臀部あたりに赤くバンドの跡がハッキリとついて、その皮膚がビリ／＼と小さくけいれんしているのです。うづくまつてしまつた小野寺少年の姿、しかし悪魔のような野村看守の目にはその姿こそ、益々嗜虐の欲望を唆られるのでしよう。つづいて第二、第三のバンドが振下ろされて小野寺の身体にビシツ／＼と巻きつくのです、小野寺の顔は苦痛にゆがんで洩らすまいとしても喰きが口を洩れるのです。そうして十五、六回も血を吸つた革バンドは執拗に小野寺にまといつき、そり反り身を悶える若々しい肉体を妖しい情熱にかられた野村看守は飽くことなく苛みつづけました。小野寺少年の苦しみにも増してそれを次の犠牲者として見ていなければならぬ私の気持は

もう既に失心の一步
手前迄に追い詰めら
れていたのです。

こうして小野寺少
年はやつとのことで
許され居房に帰され
ました。泣きながら
よるめきつつ居房に
入る彼の姿は次に来
るべき私の姿なので
す。私はもう歯の根
も合わぬ程の恐怖に
ガタ／＼震えていま
した。サデイスト野
村看守の妖しく光る
眼は次の犠牲者たる
べき私の全裸の姿を
さも楽しげに舐める
ように見るのです。

恐怖と羞恥に立すく

む私の目の前で今度は捕縄を取出して、それ
を私に見せつけるのです。

「オイッ、よく見たか恐いかい、エ、どうだ
面白いだろう。お前も早くやつて頂きたくて
ムズムズしているんだらう、ヨシ／＼これか



らタツブリと味を見せてやるよ」

何と云うことを云うのでしょう。恐怖と羞
恥に打ち震える年少の獲物を前にして、舌舐
ずりをしているような冷たい言葉なのです。

野村看守は捕縄を手にしてツカ／＼と私の

じらすのでした。

自分のことで恐縮ですが私は少年時代は眉
目秀麗の美少年であつたらしく、学校時代に
も上級生に追掛け廻された経験も多かったの
です。今こうして野村看守の前に自由を奪わ

そばにやつてきまし
た。そして私の手を
後に捻上げると後手
に縛上げてしまいま
した。そして余つた
縄で私の太股を股下
二寸位の所で縛つて
しまつたのです。こ
うされると逃げよう
にも太股の縄で走れ
ないのです。自由を奪
つておいてたつぷり
と楽しもうと云う野
村看守の計画なので
す、私を縛つておい
て私の身体を撫で廻
す野村看守の手は蛇
のように脂つぽい変
に冷たい奇妙な感じ
で私は思わず身をよ

れて全裸の姿で羞恥に打震えている私の姿は彼にとつて垂涎おく能わざる獲物であつたことでしょう。

野村看守は細い鞭を手にして私に走れと命じるのです、走ろうとしても、先にも書きました通り太股を縛つていて、どうして走れるでしょう。不可能を命じて苛責の種にしうと云うのです。いや野村看守は私の苦悩を楽しもうと云うのです。ビシツと鋭い鞭の唸りをさせて私を威嚇するのです。私は一生懸命に走ろうと試みました、しかし足は私の意志に反してヨチ／＼としか歩けません。忽ち臀部へ鞭が飛びました。「ア、ツ」と私は思わず呻きます。つゞけて右の脇腹へ左の肩へと細い鞭は鋭く喰ひ込むのです。

八島佐和子様

突然この様なお手紙を差上げる失礼をお許し下さいませ。本来ならば予め御都合を伺つてからお目ものじの上申上げなければならないのでございますが、気の弱い私にはどうしてもその機会が作れませんので……。又名前や住所や身分についても伏せた儘で申し訳なく存じます。どうか私が唯貴女の美の渴仰者であるとのみ御承知置き下さいませ。

私は喘ぎました、此の苦痛から脱れるには走らねばなりません。そしてそれは絶対不可能なのです、振り下ろされる鞭をさけようとして私は不自由な身体でそこに転りました。しかしそれは野村に取つては待ち兼ねていたことだつたのです。忽ち倒れた私の盛り上つた二つの丘、丸々とした臀部に狙いはつけられ乱打されました。余りの苦痛に私の眼には涙が浮びました。あゝ私はこれから四年間こうして苛責の鞭の下に泣かねばならないのでしょうか、そう思うと今更に故郷の誰彼の顔が脳裡にちらついて猛烈なホーム・シツクに襲われるのです。

臀部はみる／＼真赤に腫れ上つて痛みは焼火箸を当てられるようでした。私は冷たい赤

煉瓦の敷石の上をころげまわっていました。涙と汗で頬は濡れべと／＼しています、全裸の肉体は脂汗とうすく滲んだ血で塗れて私は泣き声さえも出なくなつてしまいました。そうしてやつと私は許されて居房に帰されました。そつと手を見ると手首には縄の跡が赤くすりむけてヒリ／＼します。私は恐る／＼自分の臀部に目をやりました、そして顔を掩いました。私の臀部の二つの白い丘は暗紫色の肉塊と化していました。ドス黒いような赤いような紫色のあとは残虐極りなき野村看守に對する忘れ難き怨みをいつ迄も私の胸に残して震えていました。

(未完)

さて、丁度今その言葉が出ましたから始めに「美」という事について私の考えを少し聞いて戴こうと存じます。私はこう思うのでございます。「美」とは人間の官能が良しとするもので、その探究が人間の最高使命でありその獲得が人間の生甲斐であるもの。具体的には、目にする整つた形、あでやかな色、耳に訴える快よい楽音、嗅覚に及ぼすかくわしい香り、舌で味わうとろけるような甘さ、そ

して柔らかな弾力のある触感、その他の官能に訴える気の遠くなるような刺激。これこそ古来の芸術がその完全な表現を試み又将来も尽し得ない対象ではないでしょうか。誠に美に憧れる事こそ人生の価値にほかならないと思うのでございます。それではそれらのあらゆる「美」を兼ね備えた最高のものは何でしょうか。もうお分りの事でしようからクドクドとは申しませんが、それこそ女性美にほか

ならないのでございます。文章、絵画、音楽と記録に留められた事実が何よりも雄弁にこの間の消息を物語っております。その姿、声、香、更に味わい、触感、何という素晴らしいものを神様は人間界に下されたものでしょう。ですから信仰も又女性美から発達したものと云つて過言ではないのでございます。麗わしい女性が世に珍重される所以でございます。

あゝその美を自己の所有とされる貴女のような方は何という幸福な方でしょう。私が貴女の崇拜者である事がよくお分りの事と存じます。ところがその女性美の内何が最も優れたものであるかと云う事はまだお若い貴女にはよくお分りにならないのではないのでしょうか。それを御説明申上げる事とその実に御協力をお願いする事がこの手紙の目的であり、美の追求者としての私の使命であると考えるのでございます。女性の最高の美と

艶 書 通 信

(八島佐和子様へ)

え 江 瑞 利 由
み ず り
ゆ 由 利 瑞 利



は晴やかなほゝえみを浮べ嬉々として躍動する姿でしようか、初恋に胸をときめかせている時の燃えるような面ざしでしようか、はたまた物思いに時のたつのも忘れている静寂の内にあるものなのでしようか。いゝえ、それらも美しいには違いありませんが首位にあるものではないのです。

ではいかなる場合にその極値が発揮されるのでしょうか。これを手近な芸術作品の中から選び求めて申し上げます。貴女は「クオ・ヴァディス」をお読みになりましたか、あの小説の中の庄巻は何処でしようか、ほかに

もありません。あのヒロインが事もあろうに雪花石膏のような裸身の儘牛の角にくゝられて斗技場に牽き出され衆目に曝される処です。又貴女は映画「征服された人々」を御覧になりましたか。こゝでもあの少女が戦の首途の血祭に半裸の姿で立木に縛りつけられて泣き悶える場面がクライマックスなのです。これらはほんの一例でロマン的な文

芸大作の中心が悉く気品高い女性の迫害される姿に限られている事は寧ろ文学芸術に御造詣の深い貴女の方がお詳しい筈です。ともかくもはや賢明な貴女がお悟りになつた通り最も強く現われる女性の美とは被虐の姿にあるのでございます。そして私の願とは貴女のおやかな肉体を拝借して存分にこの美を追求させて載き不朽の芸術品を醸成させて戴く事なのです。

驚愕、恐怖、羞恥、苦悶に打ちひしがれて蠢く貴女の御様子を想像して同封のような習作を試みました。勿論不出来で貴女の魅力的

な御容姿の十分の一も写せてはいないのですが、これを基にしてやがて貴女の御来訪を願った折にフィルム上に永久に焼付けさせて戴く所存でございます。突然のことでは貴女には今このような事は唯恐ろしくいまわしく到底うべなえないと存じますが、やがてはそれがどんなに晴がましい事であり、嬉しい事であるかが分つて戴けると御期待申上げる次第でございます。そしてどうか貴重な物は秘宝であつてはならない、公表することこそその所有者の義務である道理をお考え下さいませ。又花の盛りの面影を何時までも留めるといふこの企画の意義に御賛同下さいませよう。

八島佐和子様

私は幼時から美しい同姓に対して深い憧れを持ち、とりわけ優しく淑やかな人に接する時は、女神を崇めるような気持ちだつたことはつきり覚えております。女学校の高学年になつてから、愈々思慕の情が激しく女性の美しさというものがこの世の最善のものに思われ偶々道で会う可憐な年下の女学生の事が忘れられず毎日一目見たさに廻り道をして学校に遅刻を重ねたりしたものでございます。同時に女性美を讀み描写した絵画、小説、映画の類を探し求め、殊に前に書いたように美し

い女性が虐げられる場面の出てくるものは殆んどむさぼるようにして読み喰ひ入るように見たものでございます。そしてそれが私に決定的な影響を与えたのは乱歩先生の初期の怪奇探偵小説だつたのです。あの「妖虫」「黒蜥蜴」「人間豹」に出てくるヒロイン達が若く美しいが故に誘拐され、あらゆる辱しめによつて苛なまれるのを息もつかず興奮の冷汗を流しつつ読みふけり又その場面を何度空想に画いて感激したことでしょう。

そしてやがてこの花のような令嬢達の遭遇した外見的には陰惨な運命の中にこそ、本当の美がある事が分つて来たのでございます。それ以後の私は唯もう一途に嗜虐的なものを求めて放浪を続けました。ところがあの戦争

に禍されて次第にこういう作品は影を潜めてしまつたのです。私はこの意味から最も激しく戦争を憎みました。しかしこの「美の追求」という自然の理がいつまでも抑しつづされてゐる筈がありません。終戦と共に再び否暫時の抑圧を一度に吹き飛ばす物凄い勢で私の望ましいものが氾濫しました。ところが喜んだのも束の間それらの大部分は実は低劣で到底美の追求の参考になるに堪えませんでした。あゝなんと云う事か私の欲望は遂に満足されないのかしらと数年間私は道の遠いことを唯歎くばかりだつたのでございます。

然し突如として昨年私は救われました。云う迄もなくそれは本誌の発見だつたのです。卓越した格調を持ち典雅な香りの高い作品を



巧みに編集したその体裁は誠に渴者への甘露でした。しかも嬉しい事には同好の士が雲のようにいらつしやるのです。私は再び勇を奮つて起ち上つたのです。それにしても東京という遠隔の地からは関西の方々に親しくして戴くに由がありません、とつおいつしていた時あゝそこに現れたのが実に貴女だったのです。

八島佐和子様

貴女に始めてお目にかかつたのは西武電車の中でした。一目惚れというのでしょうか、端正なプロフィールとすんなりとした姿態に忽ち魅せられて一度にフアンになつてしまつたのでした。それで失礼ですけどそつと跡をお慕いして荻窪のあたりにお住いのこと、あの電車の沿線のお役所にお勤めの事を承知致しました。しかもお名前まで、「やしまさわこ」まあなんて美しいお名前でしょう。淑やかな内に僅かばかりの憂愁を含んだ貴女をその儘象徴するかのような語韻。もう毎日お会いしなければ居られなくなつて朝、駅でお待ちする為随分無理に時間を繰り合わせて参りました。でもこの方に私の仕事の主人公になつて戴くのだと決心する迄にはあまり時間をかけませんでした。でも一度御相談しよう

かと思ひ煩つたのですが、始めに書きましたように勇気が無かつたのと、もし貴女が聞き入れて下さらなかつたら再び私の畢生の仕事に頼坐してしまふわけで、それが恐ろしく止むを得ずお断わりなしにいきなり貴女に来て戴く方法を思い巡らしたのでございます。そしてその後懸命に計画を練つたおかげで大抵成功の目やすがつきましたので、この様なお手紙を差上げたのでございます。

八島佐和子様

その間にも私は日々貴女のお姿に接してしまひにはあのブラウスとスカートの下には何を召していらつしやるのかしら。貴女の肌を守つているジューミーズのデザインや生地の色貴女のふくよかなももに纏いつてはちきれんばかりに張つている薄地のストッキング、そしてそこにガーターが豊かな肉づきにキツシリと喰ひ入つている様子等を想像するのでございます。そして電車の中でドキ／＼して居ても立つても居られなくなるようになつてしまひました。中でもこんもりと丸い二つの半球と処女の神秘的なデルタ地帯を柔らかく包みながらピツタリと密着してあなたの統のよるな肌の香を思ひの儘吸つているパンティの事を考えるとたまらなくなります。色はピン

クかしら、いゝえ、清純な貴女を代表するような純白でしょう。そして縁に薑色の泡のよるなレースがついていゝのではないかしら、横寄りに真紅の刺繍でSとイニシャルが入れてあつたら……、エス本当に貴女は私のヤンガースターよ。貴女が私のものになつて御一緒に遊ぶ時、そういう肌着の類がどんなにか素晴らしいアクセサリーになる事でしようまるで蟬の羽のような柔らかなヴェールを次々に剥ぎ取つていく時の快感、そして貴女のむき出された肉の上に加えられる数々のいたぶりは針先ほどの傷もつけなくて、しかも効果の大きいものでなければならぬ。こうしてそれからそれへとおこる空想を実現するための計画も着々と進んで来ております。貴女は自由を奪われた全裸の姿を人目に曝された事がありますか？ 今こそ貴女は私の手によつてその素晴らしい境地に踏み込む事が出来るのです。そこでは目に写るあらゆる悶えの姿、耳にはたまぎる美女の悲鳴、むせかえるような乙女の体臭、指に反撥する若々しいゴムの弾力、そして他の官能を恍惚とさせる刺激、全宇宙が表現し得る最大の美が惜しげもなくそれをむさぼる者に公開されるべく記録れされてゆくのです。

告

コ ク ハ ク

白



慟^{どう} 哭^{こく} の 記^き

古 川 裕 子

私は昨夜二十日間にわたる放浪の旅から、住みなれた義兄の家の離れに帰つて来ました。

こゝ二ケ年間、夜毎悶え、窓に星々を眺め、さまざまな感慨にふけつたこの部屋も、主人の私の居ない間、ひっそりと静まりかえつていたことでしょう。御覧下さい。ペン皿のペン先は静かに冷え切

り小机も花瓶ももとの位置を少しも動いてはいません。義姉の規帳面さを、まざまざと示すように、この部屋の調度には少しのほこりもついてはいないのです。すべてはもとのまま。私の居ない間もこの部屋は私の習慣を少しも変えてはいなかつたのです。

あゝ私は、生きてこの部屋に帰つてきました。二十日前にこの部

屋のふすまを最後に閉じた時は、おそらくは再びこゝに帰ることはあるまいと自ら信じていましたのに。

でも、私はやつぱり生きていたのです。いゝえ、死ぬことも出来なかつたような弱虫だつたのです。今、この部屋の畳に座つて、赤い少しすり切れた私の座布団に座つて、ラヂオのスイツチを入れました。久し振りで、しみじみ聴く「世の中の声」です。

音楽が私の部屋に流れ始めました。思い乱れた感情が音たてて流れ、死の予感と、生への甘い執着が、くるはしく絃と管との呻きの中にひびき渡つて来ます。荒々しいホルンの序奏に導入されて、「金盃に酒は満されている。飲みほす前に一つの歌を君のために歌おう」

思いつめたように激しくテノールが絶叫します。

「忍びよる悲しみに魂の庭は荒び、喜びも歌も萎みはてる……」

ハーブのゆるやかなグリサンドを加えて、限りない絶望をこめて歌声はつづきます。

「生は暗く、死もまた暗い！」

あゝ、この曲は私のために創られたのでしょうか。死への憧憬と生への執着、絶望と忘却と狂ほしい享樂とが渦巻いています。

音楽は酔夢と死の翳との間を、不安げにゆれうごくのです。

「生も暗く、死もまた暗い」と。

そうです。私の生は暗く、そして私の死もまた暗い！ 絶望は胸を噛み、私の心は黄昏の暗さにいつぱいです。

「人間よ、何程生きられるのか、天地は悠久に春は花が咲き匂う。人間よ、何程生きられるのか！」

「友よ、いざ盃をもて、今こそ飲みほす時だ」そして音楽は限りない絶望と倦怠とをこめて、再びつぶやくのです。「生も暗く、死もまた暗い……」

窓の外にも夕暮が迫っています。北国の冬の黄昏の寂しさを、皆様は御存じでしょうか。身も心も冷えて、ものみなが身をふるわせて運命をまつようなこの一刻、この部屋に座つて私はまだ生きています。しかし今の私にとつては、生も暗く死もまた暗い！ 私はこれからどうして生きていつたらよいのでしょうか。私は一度決心しました。自分の性癖についてはあきらめよう。私はこのまゝでこの異常のまゝで、つましく生きていこう。私自身この性癖については二度と思ひわづらうまい。このまゝの私で、そしてこのまゝの私が何かのお役に立つならば、ただそれだけを生きがいとして生きてゆこう。私は恥しげもなく「いいえ、いいえ、果てしない悩みと渾身の勇氣とをもつて「凌辱の幻想と期待」（この題名は編集部のかたがつけて下さつたもののなのですが）」という愚かしい「告白」を書きました。この「告白」は全くくだらぬものですが、私にとつては身も世もない叫びだつたのです。哀れな私をお喰ひ下さい。

恥知らずの私は、我が身を虐むようにドギつい「猿ぐつわと私」「裕子とお仕置」なる雑文をものしました。この二つに現れている私の、何というざらついた心。ほこりだらけの畳を踏むような、風の日に口の中に吹き入ってくるほこりを噛むような粗雑な心！ きのめの荒い、白粉やけの娼婦の肌のようにすさびたみにくい心！、私は手もとに送られてきたこの奇譚クラブを歯を喰いしばつて、我が身を葬るつもりで青森の岸壁から海の中に放りこんでしまつたのです。

雪まじりの烈風の吹きすさぶあの時も、丁度今のような黄昏でした。北海の海の色は青黒く、白く浪立っていました。もう昏れかけて沖もよく見えぬ海は、私の心のように冷たく荒び、函館へゆく連絡船が船室の灯もあざやかに、大きくゆれながら港を出てゆきました。

私は外套の襟を立て、大きな厚いマスクをして風の中の岸壁に立つていました。何のために？死ぬために？いいえその時の私には何のためにそんな所に立つていなければならないのか、自分にもわからなかつたのです。もう真暗になつて、浪は足もとの岸壁の裾をすさまじく噛み、しぶきは私の足をじとじとに濡らし、いや、時には肩にまで飛び散つてきました。びようびようと風が私の髪を乱し、耳をかすめてふきすぎてゆきます。身体ごと海へふき落されそうな強い風。まともに身体に叩きつけるようにふくこの風！私は必死に風に堪えながら、海に向つて気狂のように何をか叫んでいました。何を叫んだのか、私は憶えてはいません。あの時には私は本当に気がちがつていたのです。胸の苦しみをしほり出すように、ただ声を出してわめかすにはいられなかつたのです。何でもいい、力の限り泣きわめきたかつたのです。でも私はこのことだけは、はつきりと憶えています。私の頭の中には、あざやかに、全裸で括られた私が転つていました。後手に縛られ股を拡げられ、口には無惨な狼ぐつわが嵌つていたのです。そして数人の男が、そんな私をとりかこんで次々と私を犯していたのです。しかも——あゝしかも、頭の中その私が「わらつて」いるのです。目を閉じ恍惚としているのです！。ふりはらつても、ふりはらつてもこの幻影は消えません。むしろますます鮮かさを加え、幻影の私はますます満足し、猿ぐつ

わの上の目は淫らに燃え、床の上を殊更のようにもだえ廻つて男たちに媚態を示しているのです！ 心とは全く無関心なこの幻影！

真暗な骨も凍る岸壁の上で私は狂い廻りました。何とかして、この映画のように鮮かに幻影を忘れよう。何とかしてこの恥すべき自分の姿をかき消そう。私はわめかすには居られなかつたのです。でもそのわめきも、すさまじい烈風の中では逆に悦虐の呻きのように耳に帰つてくるのです。皆様、このように追いつめられた女の心が御想像が出来ますでしょうか。もがいても、わめいても逃れられないのです。のみならず、男の顔は、ますます大きく拡げられた私の股の間に近づき、唇がグロテスクにクローズアツプされ、男の指が私の乳を握み、鞭打たれて転げ廻る私の顔には限りない性の満足が浮び……。あゝこれを自身がまざまざと見ていなければならないのです！皆様は私にマソヒスムの悖徳性を力強く否定してください「マソヒスムは決して『道徳的悪』ではない」と。

でも現実の私——まづばだか後手に括られ、**女の肉にあらゆる**凌辱を受け、鞭打たれ——それに恍惚として嬉しがっているこの私が、本当に悖徳者ではないのでしょうか？神様は人間の性をこうはお創りにならなかつた筈です。男と女とは、おだやかに美しく愛し合い、心と心が結び、正常の交渉によつて可愛い子供たちをもうける。それが普通の人々です。神の赦し給うた男女の間です。私はそうになりたい。男女の交渉に於ても、叩かれたり、いじめられたりすることが是非必要だ。それがなかつたら全く心の結びつきさえ感じ得ないこの私が罪人でないとはどうしても私には信じられないのでございます。多くの皆様のお怒りの顔が目に見えます。しかし私は本当を云わなくてはならない。この気持があるために、私はい

つも精神的にさいなまれ、劣等感を背負って歩いているのです。何をお前はそんなに悩むのだ。

お前は罪人ではない。もつと大手を振り胸を張り、マソヒストたることを自ら誇るお前を私は期待している。そういうお便りをいくつも私は頂戴致しました。そうなれたらどんなにいいだろう。是非そうなるう。そのはかない努力が「凌辱の幻想と期待」であり、「猿ぐつわと私」

「裕子とお仕置」だったのです。でも結局は駄目でした。「告白」は意外な結果を生み、私は心ならずも家を出て、あてどない放浪の旅に出なければならぬハメになったのです。しかもその上、自ら罪人である意識はますます強く、今はびようびようたる風の中に、うめき泣き叫ばねばならない自分を見出したただだったのです。

もう何も見えません。ただ風の音とすさまじい浪の音だけ。



私は岸壁の上によるめきよるめき、涙をぼろぼろ流しながら「凌辱の幻想と期待」及び「猿ぐつわと私」の載っている奇譚クラブを引き裂き、噛み破り、烈風の海へ葬つたのでした。私の肉体よ。さようなら。私は身も心も凍えはてました。腑抜けのように、よるめき転び、私は燈火の懐しい魚臭い街まで帰つたのです。その日は私が生れてから一番疲れはてた晩でした。

「……心は疲れ、灯は消え、眠りが襲う。休息が必要だ。憩いの場所に行こう。孤独の中で心ゆくまで泣こう。わが心の秋は長すぎる。私が傷ましい涙を乾かすために、愛の太陽はもう輝かないのか……」

音楽は萎みゆく大地を歌う哀傷におゝわれて、アルトの歌声が流れます。私は燈もつけず、だまつて座っています。歌声は心に沁み突然私の眼は涙に溢れ

てきました。

私は一人の人間としても三十二年間生きてきました。三十二年と云えば、人間の生涯の半ばに当たります。そして決して短い時間ではございません。女の一生ははかなく、この半世のうちに一体何をしたのでしようか。

「花のいのちは短かくて、苦しきことのみ多かりき」ある閑秀作家は、四十余年の生涯の感慨をこの詩の中にこめて死んでゆきました。しかしこの「苦しき時のみ多かつた」あのかたの生涯にも、立派な芸術家としての業績が残されたのでした。人間が何のために生れてきたのか、人間が何をなすべきか、そのようなむづかしいことが愚かな私に分るわけがありません。でも私は素朴に信じているのです。私は何とか人様のお役に立ちたいと。そして出来るなら善を行います。美を創造してこの世に残してゆきたいと。何が「善」で何が「美」か。これはむづかしいことです。私の考える善や美が実はそれというはらかなものかも知れません。本当は「悪」であり「醜」であるかも知れません。しかし私は自ら信じ得られる限りで「善」でありたく「美」を創りたい。それをはかない女の想いとして、この世に残して死んでゆきたい。女の髪が指に巻きついて離れないように、どれ程ささやかなものであるにしろ、それによつて私という女の心の想いが残るように。私はあの閑秀作家の才能が羨ましい。すべて美を創り得る芸術家たちに限りない羨望と嫉妬を感じる。何故私にそれが出来ないのだらう！と。

心を静めて現実の自分をふりかえつた時、私の心の灯は消え、絶望が氷のように心をひたしてくるのです。

私がこの私が美だらうか。善だらうか。正直に申します。私は一

日―二十四時間のうち、性につながる意識から全く解放されて生き生きとした真面目な女である時間が、何時間あるでしようか？。

おそらくは（あゝこれを申すには「勇気」がいります）その三分の一にも足りません。その他の時は―実は殆どいつも―「性欲」が私をしつかりとらえているのです！ しかもその「性欲」―それは私に於ては「被虐の妄想」以外には何もものでもないのです。はつきり申しあげます。一日のうち殆ど二十時間は、多かれ少くなかれ「被虐の妄想」を―縛られ、鞭打たれ、猿ぐつわをされ、吊るされ、呻き悶えさせられ、すべての恥しさを露出されることを「望んでいる」のです！

私は今泣いています。泣かないでどうしてこんなことが書けましよう。

何故私だけがこうなくてはならないのでしよう。私はなぜこんな罰を受けなければならないのでしよう。私はクリスチャンでも仏教徒でもありません。しかし私には解りません。何故私だけが、こんなひどいめに会わなければならないのでしよう。自分の中に二人の女がいて、永久に一人が一人を責めさいなむ。私はこれが何かの罰であるとは思えないのです。仏教には「前世」という觀念が、又「因果応報」の考えがあるそうです。私のお友達は、仏教を研究して「前世の因縁」と「六道輪廻」の思想こそ東洋の最も美しい幻想だと私に話してきかせました。でも現実の私は、そんなのんきなことを云つてはいられません。それなら私はどんな「前世の因縁」で今こうして苦しんでいなければならないのでしようか。

キリスト教には「原罪」の思想があるそうです。私もその十字架を背負っているでしようか。クリスチャンのお友達は、私の真の

姿を知る事なしに信仰をすすめて下さいます。その御好意は有難いと思ひます。うれしく思ひます。でも私がクリスチャンになつたら私は今よりもつと自分に対して（そして他人に対して）嘘つきになりそうな気がします。私はせめて今以上に嘘つきでありたくない。クリスチャンとしての信仰の戒律には弱い私は屈しつづされてしまひそうな気がするのです。私はとてもそれには堪えられません。「正常の性欲」でさえ「悪」ならば、私のそれは、いつたい何と云われるでしょう。

すべての不幸は自分だけがそうであると思ひこむところにあると申します。世の中には不幸な人が、いっぱいおられます。私は癪にかかられたかたを知つています。原爆で焼けただれ、しかもまだ生きてゐるかたを知つています。結核で全く恢復の望みもなく十年もベットに縛りつけられてゐるかたを知つています。日々の糧のために健康も人間としての誇りも何もかも捨てて働かなければならなかつたかたのあることもよく存じています。私の悩みがそのかたたち以上であるなどとは決して決して申してゐるのではございません。しかしマソヒスムの囚獄に閉じこめられ、一生手錠足枷で括られてゐる女の悩みは、それが抜き難い人間の本能に根ざすものだけに、正常の皆様が御想像下さる以上の苦しみなのだ、とくらは私にもつづやかせて下さいませ。

私の頭の中には始終全裸の縛られた女が転つてゐます。私の下半身は一日の大半この幻想に憑かれて荒れ狂つてゐるのです！

私の心の秋は永遠に去らないでしよう。孤独の中で存分に泣いてもそれが何になりましよう。泣いたら美しい心になれるのでしようか。熱い涙でマソヒスムの囚獄が春の太陽のものと氷のように溶け

去り消え失せるのでしようか。でも私は泣いてゐます。涙が溢れどどめるすべもありません。涙がかわけば、私はまたもとのままのマソヒストです。でも女は泣いてゐる間だけは、すこしは心がなごむのです。はかない、たつたひとときの慰めを、読者の皆様、どうか私にゆるして下さいませ。

今私の心にはあのゲーテの詩が浮んできました。「鑒琴師の歌」といつたでしようか。

頬つたう涙のごわず、パン喰みしわれにしあれば

歎きつつ、しとねに座して

夜を覚めて泣きし身なれば

汝が業を知るなり、あわれみちから……

苦渋と悔恨と反逆と諦念とが詩人の胸を喰み、冷たい牢獄の深淵から詩がつづきます。

罪人をなやみにゆだね汝がこころ

安けきはなんぞや

罪ありて罰あるべきは地のさだめ

汝が責にあらざる？

身も世もない呪咀の叫喚がこゝにもだえ廻つてゐます。詩はこゝで、ふとときれ、寂莫の中に罪人の悩みがこだまのようにひびいてくるのです。

「罪ありて罰あるべきは地のさだめ汝が責にあらざる？」私もその罰を受けてゐるでしようか。

空が弔旗のように曇つた朝、私は義兄の家を出ました。私は三人のならずものの手から、逃れるために家を出たのです。書いたもの

の載っている数冊の「奇譚クラブ」と、私を愛して下さった皆様からのお便りの束とそれから私の愛する亡夫の写真、もう一つ冬のことで実際には使うこともない真赤なゴム引のレインコート——云うまでもなく夫との夜毎の遊びに最高刑の囚衣として使った、あの燃えるように真紅なゴム引レインコート。手首や袖は縄ですれ、裾の方のゴム裏には夫や私の念の点々について跡をのこしています。他人が見ればただの汚れとしか見えないしみの一つ一つに、私たちの無量の思いがこもっているのです。

旅から帰つて、今の黄昏の部屋に座つて膝の上にこのレインコートをひろげ、ゴムのしみの一つ一つをなでていると、まざまざと昔の思い出がよみがえつて来ます。あゝその時こそ「わが青春」だったのです。

「人生が夢にすぎぬならば、何故あかくせく苦勞するのだ。私はいけなくなるまで終日酒をのむ……目が醒めて鳥の啼声をきく……」テノールの歌声がつづいています。鳥のさえずり、訪れてくる春。「もう春がきたのか、夢の様だ」「春がおとずれてきた、一夜のうちに」と名状しがたいやるせなさで歌声とオーケストラとがからみ合います。

私の春はあの夫との短かい結婚生活以外にはありません。終戦後私と夫とは運命のひき合せによつてめぐりあいました。そして「一夜のうちに春おとずれて来た」ように私にも幸福が来しました。夫との生活は被虐加虐の調和の上に立つたものでした。そこで私はあらゆる辱しめを受けました。あらゆる拷問の遊戯をしました。その姿は現在私の頭の中の幻想の姿と殆ど變つていません。しかし私にとつては、夫との生活は罪の意識を最低限に圧え得たひとときであつ

たのです。なるほどそれは浅ましいものでした。でも夫はその性癖以外は誠実な人でした。のろけも程々にしろとお怒り下さいます。あのひととの間には人間的な精神的な愛情が深くかよつていました。加虐被虐の行爲も、疑いもなく心の愛の上に行われたのです。つまり単に加虐被虐の行爲そのもののみを楽しんだのではなかったのです。それは異常なものでしたけれど二人の心からの愛情の表現だったのです。

これは私の「甘さ」かも知れません。

「思い出の美しさ」なのかも知れません。

又は要するに「性欲」が充分に満足された為の充足感にすぎないのかも知れません。現実をもつと「いやらしい」醜惡なものだったかも知れません。たとえそうであつても、どうかお願いですから私の「夢」を破らないで下さいませ。不幸な女のこれは「束の間の幸福」なのです。そこでは私の官能は限りなく満足しました。日はうららかに照り鳥はたのしく歌い。それこそ私の「春」だったのです。私同様、夫も自分の性癖には彼自身恥しがり嫌惡さえしていました。この二人のお互いの嫌惡を柔くなごめ、春の水が四沢をうるおすようなまどかな調和をもたらしたからこそ、私たちの善意と愛情だったのです。鼻もちならぬ云い草とおおこりにならないで下さい。終日私たちはこの美酒を盃の底まで飲みほしました。惨酷な運命が夫をうばい去らなかつたら、私たちは生涯の最後の日までこの酒を飲みつづけたことをごさいますよう。

しかし本当に「束の間」でした。春の日は目の前で消え去り、私には永遠の冬が来たのでした。それから私は何をしたらしよう。少しの精神的愛情もなく、ただ、被虐の行爲によつて「性慾」を満

足させることだけのために、あらゆる恥すべき行為をやつてのけました。見も知らぬ人にその晩から身をまかせ、はてはシヨウにまでひきだされて、三十人に近い男のかたちたちの^{不始物}文字通り肌を汚されました。ただ性欲を満足させることだけのために、生れてから一度も行つたことのない大阪へ行き、はては他人の秘め事の覗き見までやつてのけました。今の私は娼婦以外の何でしょう。

今度のあてのない旅の夜々、私は皆様からのお手紙をくりかえしくりかえし読みました。

「お前の首に首枷をつけてひきずり廻したいと思つている」「鋼線を入れた自分独得の鞭の味を、心ゆくまで味わせてあげよう」「貴女の口に永遠に金属の口枷を嵌ませたい。中世紀の女囚の様に永久に私のもとに檻禁してあげる」「お前にはお前以上のサディストが必要なのだ。何を悩むことがある。お前の悩みは性欲を加虐被虐の行為に依つて満足させてしまえば



忽ち消えてしまうのだ。ぐずぐずするな」このようなさまざまな言葉が、文面から飛び出して私の肉体をかきむしります。ひつそりと世界は滅入るように静かな雪にふりこめられた弘前郊外大鰐温泉の一夜でした。その夜は騒々しい温泉宿とは思えない静かな晩でした。私の幾千のくり言は、これらの数語の言葉に砂のとりでのようにもろくゆらぐのです。

何を考えている。早くこの中からお前に最もふさわしいパートナーを見つけたらいいだろう。幸福は積極的に行動するものにある。観念の空廻りはやらないのだ。遠慮なく選択しろ。この六十人に近い人々を一行にならべ、競馬馬のように毛なみを見、血統を調べ、走らせて一番良いのをとればいいのさ。良い相手——お前の亡夫の二代目を見つければお前のあのくだらぬくり言もおしまいさ。性欲は食欲と同じだということを忘れるな。いくら飢えていても、一度腹

いづばい食べれば簡単に食欲は満足してしまふ。お前もお前の方法で性欲を満足させろ。四の五の云つてゐるが問題はたゞそれだけだ自分で自分をいじめていても始まらない。尤もお前はそれを楽しんでゐるようだがね。そんな相手をさせられ、そんなく言を讀まされる読者こそいいつらの皮さね。それにお前は自分のマゾヒズムを売りものにして、あのくだらぬ「告白」なるものをデツチあげ、何がしかの原稿料をかせいでゐるのだらう。呆れた恥知らずだ。さつさと世迷言はやめてしまえ。それにはいいことを教えてやる。うんとひどいサディストを見つけたら。息も出来ぬように虐められる。いくらお前だつて苦しいだらう。本当の苦しさを味つて見る。人間に痛覚がある以上、一定限度を超えれば「性欲」なんぞは飛んでしまふさ。徹底的に虐めぬかれろ。二度ともうコリゴリという目に会つてみるがいい。その方が自他とともに有益だ。

私の中の女はこうわめき散し、狂い廻ります。

「殺される程の肉体的な苦痛を味つて見る。それが嫌なら適当な相手を見つけて、かつてお前が亡夫とやつたような生活を始める。今のお前の言うことなど何という贅沢な虫のよい云い草だ。お前の甘つた根性を叩き直さなければ他人の迷惑だ」と。

私の頭の中には、縛られて血だらけになつてゐる自分の姿がぐるぐる廻り始めました。ヒリヒリうごめいてゐる私の肉、細目で紫色に腫れあがつた手首のクローズアップ。身体中の鞭のあと。はずれた関節の骨を刺すような痛み。やり切れないことに幻想の中では半死半生の苦しみの私の姿が、ますます私をそりたてるばかりなのです。

「お前はヨタ者に身をまかせるなど死んでもいやだ」などと生意氣

な口をきいたが、俺ははつきり云つてやる。お前はあのナラズ者たちにおもちやにされてみたいと一遍も思つたことはないか。恐怖と嫌悪の中で彼らに責め虐められる自分に、おさえ切れない興味（はつきり云つてやる。そうされる「願望」）を持つて自ら身ぶるいをしたことはないか。嘘をつくな。お前の聖者ぶり偽善者ぶりは、お前の卑屈な劣等感よりも、まだ鼻持ちがならない。女というものはどこまでいつても自分には正直になれないものだ。尤もお前のインフエリオリテイ・コンプレックスはお前の性欲の変形さ。変態性欲ヘンタイセイヨクだよ！どうだ、ごまかしようもあるまい。お前の一番悪いことは善とか悪とか、道德とか不道德とか、有り合せのものさして正直な自分をごまかしてゐることだ。すこしでも自分を良し人に見てもらおうと他人に甘えてゐることだ。人間は嘘をつくことが一番悪い。お前に恥ずべきことがあるとすれば、それは変態性欲ではなくて嘘つきだということだ。素直な人間ではないということだ、あの不潔で高慢な偽善者ぶりだ。マゾヒズムが何が悪い。それが社会にどういう害悪を及ぼすというのだ。純粹に個人的な問題じやあないか。自分と相手の了解さえあれば、いつたいどこが不道德なのだ。どこが「善」ではないというのだ。お前は「美」だとは思わぬというが、「美」とは客観的なものだ。お前がそう思わなくてもこの姿に最高の人間的な——お前の好きな言葉で云えば「芸術的な」——美しさをこゝに見出す人がないとは云えない。何故ならそれは人間の生命が最も純粹に燃え立つ一瞬だからだ。人間が最も純粹に一筋の生命力を発揮してゐる時だからだ。芸術が——美が——人間の生命力の表現でないとしたら、いつたい何なのだ。単的に純粹に生命が燃え立つたこの一瞬に「美」がない筈はない。もしも美で

ないならば、芸術とは生命とは無縁のものだ。さあどうだ。何、余り動物的で高い精神がないつて、生意気云うな。マソヒスムも人工性から云えば正常の性交の方がはるかに動物的だ。むやみに善いとか悪いとか云つてはもらいたくない。それよりもお前の聖者ぶりのあさましさ、浅墓さ、高慢さ、くだらなさを胸に手をおいてよく考えてもらいたいものだ。

よく見る、お前の今の姿。何をあさましいと思う。お前の口には、お前の頬には自分で嵌めた猿轡が喰いこんでいるではないか。やわらかい乳房に、腹に、もゝに、足首に自分で括つた麻縄が喰い入っているではないか。そして（恥しがるな！）お前の股の肉には、**お前の股の肉の……**ついたゴムレインコートがはさみこまれ、**股の肉を**

縄でおさえられているではないか。そのゴムの感触にお前は身悶えしているではないか。それが正直な本当のお前だ。お前がわざわざひきよせた姿で、よく自分の姿をそのまゝ承認しろ。お前の枕もとに無数にひろげられた手紙をよく見る。そして新しい道をひらくがいい。もがけ、うめき、その姿以外に自分があると思うな。

私の中の声は情容赦なく、私をきめつけます。お前はそこがましくも死ぬつもりで家を出た。死んでみるがいい。胃酸カリはハンドバツクの中だ。自分を縛つた縄を解いて、あの白い薬を口の中に放りこんで見る。それがお前に出来るか、出来るか。

お前は自分の変態性欲の苦しみをめんめんと訴えた。こゝから何とか抜けだしたいとも云っている。死んでみるがいい。死ねばその囚獄から抜け出せる。死ね。なにをまごまごしている。お前は生きているじやあないか。お前は本当に自分の性癖から抜け出したいのか嘘を云え。お前は生きているじやあないか。お前の所謂聖い自分

が大事ならば、死ぬよりほかはない。さあ死んで見る。死ねないだろう。死ぬなんてことを考えるな。それより被虐の妄想を大手を振つて楽しめ。さあ、その姿のお前を俺が存分叩きのめしてやる。この鞭の甘美な味を心ゆくまで味え

私の頭の中には、数人の男が現われて芋虫のように転っている私を、無惨に打ちすえ始めました。私は寝床のシーツの上をもだえ廻りました。妄想の折檻と自縛の現実とが区別がつかなくなつて、私はうめき、ころがり、狂い、妄想は火花のように廻転し、私は喘ぎ、うめき……。**股の肉の**ゴムレインコートの感触は私を陶醉させ私は次第に情感の頂点にのぼりつめてゆきました。

やがて……、私に云いようもない索莫が襲つて来ました。情熱のさめたあとの、この寂しさ味けなさを、皆様は解つて下さいますでしょう。私は限らない不愉快さをもつて自分の縄を解きました。自分の猿ぐつわをとり、口の中の布片を吐き出しました。自分の**心物に汚れた**レインコートのゴムを叮嚀にふきとりたたみました。

沢山のお手紙を一つ一つ封筒におさめカバンにしまいました。疲れが胸にも背にも手足の関節にも鉛のように重く濃んでいました。乱れた髪を直し、全裸のからだに寝巻をまとい、私は鏡の中の自分の顔をみつめました。頭に金属のタガがかたく嵌っているようでした

顔は蒼く、目は死んだ魚のそのように濁っていました。生命のよろこびなどは、そのどこにもありませんでした。唇は愚者のように半開きになり、パーマネットのほつれ毛が目の上にかぶさり……。私はいきなり鏡の中の自分に枕を投げつけました。そして歯を喰いしばり、目をつりあげて自分の虚像をにらみつけました。私はそれに限りない憎悪を感じたのです。あいつを殺してしまおう。私はハ

ンドバツクの中から、ひそかに持ち出した青酸カリの包みをひらきました。

世は寂莫と静かで、四界は雪に閉ざれていました。まだこんこんと降りつゞけているのでしよう。私は身を静めて身の廻りを見まわしました。私の死んだ後、人に見られて醜いものはないかと。

そして一時間も掌の上の毒薬を見つめていました。悲しいのでもなく、苦しいのでもなく、たゞ時間は音もなく、私を通り過ぎてゆきました。この時の気持を私は何とお伝えしたら宜しいのでしよう。人間の心を表現するには、人間の言葉は余りに不完全です。その上人間の心は、あとから話され説明される程単純なものではないのです。それは丁度夢について話すのに似ています。夢は人に話される時はその真実の姿から遠く離れ去っているのです。

ともあれ、私はたゞ座っていました。正確な時間はわかりません。多分一時間位でしたらうか。もうすつかり寝静まった周囲の様子でした。私はフスマの外から呼びかける女中の声に驚かされました。慌てゝ手の上の薬をしまいました。まだ散らばっている縄を布団の下に押しこみ、女中を迎えました。大雪のために到着のひどく遅れた速達の手紙を持つて来てくれたのでした。義兄からの連絡でした。そこには三人のヨタ者を相手として私を護つてくれた義兄の、涙の出るような努力が記されてありました。世馴れているとは云え、おとなしい義兄にはさぞ大変なことだつたでしよう。さぞ必死なことだつたでしよう。それよりもさぞ迷惑なことだつたでしよう。こまごまとした経過報告の末、結局金で解決したことを結論として述べてありました。私は肩が抜けるような疲労を感じました。思わず溜息が出ました。「一時はこれでいい。なるべくあとくされのない

ように、うまく処理したつもりだが、或いは再びやってくるのではないとは云えない。しかしその時はその時のこと。お前の身を心配している。一刻も早く自分のもとに帰つて来てくれ」文面はこうつづいていました。そこには義兄の愛情がありました。亡夫の兄という親近感と天涯孤独の私を本当の兄のように彼になつかせました。私は「とにかく帰ろう」と心の中でつぶやきました。そしてゆつくり立ちあがり冷え切つた身体を温い温泉にひたすために下に降りてゆきました。死ぬことも忘れて。

夜更けの湯ぶねは静かでした。湯気のみ、もうもうと立ちこめて摺硝子の外には氷の花が咲いていました。誰一人居ない湯ぶねの中で私はゆつくり手脚を伸ばしました。腕や股や足首には赤く自縛の縄のあとがついていました。清らかな湯は、惜しげもなく、私の白い肌を流れおちました。湯ぶねのふちに腰をかけて、私はつくづく自分の肉休を見ました。悲しいことに、そこには、三十二歳という女盛りの生理がありました。肩や腕やももは、ぬめぬめと白く光り、きめのこまかい皮膚の下には溢れるような女の血が流れているのが目に見えるようでした。誰が見ても欲情的な肌。そうとしか云いようのないこの真白な張り切つた肌。私はまだ子供を生んだことがありません。将来とも生もうとは思いません。私の乳房は何かを待つように上をむいてピンと張り切つて二つならんでいるのです。私のこの胸、脂肪ののり切つたこの腰、私の惨めな心とは無関係に何と健康なこと！この真白い肌の何と弾力的なこと！自分で、ももをさすつて見れば私はいやでも今私が女の爛熟期に居ることを認めないわけにはゆきません。あたたかく重く湿つぽく、何で私はこんなに健康なのでしよう。私の肉休は今、なめらかな、いで湯に紅潮して

声をあげて異性を呼んでいるのです。

あゝ私のこの肉体。それは疑いもなく今、春なのです。もやと香気とが、ほのかに夕暮の中を漂うあのけだるさなのです。「ゆく春や重たき琵琶の抱きごころ」むかしの日本の詩人はこう歌いました。私の肉体も、ゆく春の夕暮の重い琵琶の抱きごころに溢れているのです。何という皮肉でしょう。心は晩秋の落莫たる大地を——いや凍てついた冬の荒野を、まる裸の魂がさまよっているというのに、私の肉体と心。どちらが本当の私なのでしょう。雪のふりつむ湯ぶねの窓の外に、ふと痩せ犬の影がうつり、一瞬消え去つてゆきました。夜更けの犬よ。お前はいつたいどこへゆくのか。

「月が空に輝き渡るまで私は歌う、歌ができれば又眠る。一体春が何であろう。あゝ酔わさしておくれ」

ラジオの音楽はまだつづいています。真暗な火の気のない私の部屋には、生の倦怠に溢れたモテイーフが流れ、私は仏像のように寂然と端座し——外には風が出て来たようです。月が空に輝きわたるまで、私は私の生理の美酒に酔い痴れようか。人生は長くはない。いつまで生きられるというのだ。不安とアイロニーと厭世——亡夫とのレインコートはいつか私の手にしつかりと握りしめられていました。

「陽は山の背にかくれ、谷には冷たい闇が忍びよる」音楽は暮れゆく大地、迫りくる冷やかな闇、梢をわたる風、愛する自然への訣別を歌っています。

「友のそばでこの美しい夕を味いたい。君は長く待たせる。私は琴をもつて歌い、草の道をさまよう。おゝ美よ！永遠の愛——生命——酔い痴れた世界よ」アルトの歌声は限りない空虚感をこめてこ

う歌つてゆきます。

「彼は馬からおりて別れの盃をさし出した。彼は問う。どこへ行くか、又何故にと。」「我が友よ。この世の幸は我に恵まず、何処に？ 私は山の中をさまよう。彼が孤独の心に休息を求める」そして美しいヴァイオリンのモテイーフにつれて「私は故郷を求めてゆく」音楽は切ない、抒情に身もだえしているのです。

今はもう何も言うこともありません。私は彫像のように座つて、このデカタンな音楽を聴いています。これは今の私のために創られたのではない。言葉もない程悲しく美しく、最も愛した現世から名残り惜しく訣別してゆく人間の最後の訴えであるこの音楽。涙となつてほとばしるには余りに切なく、静かに運命に堪えるには余りにいとおしく。音楽は死の翳と生への執着の間を思い乱れてゆれうごいています。あゝこの音楽は今の私のために創られたものではないか。

「春がくれば再び大地は到るところ花咲き緑なすであろう。到るところ、永遠に遠き涯までも青々と輝く。永遠に」

大地はかくわしく咲き乱れる春の花に満ち、到るところ緑が萌えはるか彼方青い丘まで見渡す限り自然は明るい陽光のもとに永遠に輝いている。この悲しい程さわやかな美しい自然であればこそ、訣別は一層切なく哀傷は一層深いのでありましょうか。白々とした云い難い空虚感と絶望。心に沁みるように不安な和絃の上に「永遠に永遠に」とくりかえされ、チェレスタが鳴り名状し難い感銘のうちに音楽が消え果ててゆきました。

グスターフ・マーラー作曲「大地の歌」

第一次世界大戦前の、暗い世紀末の息づまる不安感のうちに、こ

の曲が創られたのだそうです。「永遠に、永遠に」私の心の中には、あるやるせない絶望的なモテイーフが、複雑を極めた感情のうちにくりかえされています。

でも私の肉体の春は決して「永遠」ではありません。やがては秋がくるでしょう。しかしその前に私はこの世から訣別しなければならいのではないのでしょうか。あの曲が私の心に翳を落したためでしょうか。私の心にも抜き難い死の予感がみなぎっています。真暗な寒い部屋に座っている女一人、この女も間もなくこの美しい自然とお別れするのではないのでしょうか。

私にはむづかしいことはわかりません。然し私一個人のつまらぬ苦悩をぬきにして今の世は余りに息苦しすぎます。間もなく又あの人殺しが始まる。私の愛する父母を一瞬にして奪ったあの戦争、あれが再びやってくる。暗い予感が私の胸に溢れています。多くの愛情が、多くの運命が、ちりあぐたの様にその中で消えとんでゆくでしょう。木枯の吹きすさぶ夜の紙屑のように。戦争、その中では人間の生命が何と瑣末なこと！マラーは死の予感、死へのあこがれ、生への執着のあの「大地の歌」を書きました。今の私たちは、再び不安と厭世とそこはかかないデカタンを、いや応なしに味わわれているので



はないのでしょうか。生意気なことを申しあげて御免なさい。私は今自分の生への執着をはつきり認識しています。自分が死にも出来ない弱虫であることを、いやという程思い知らされています。裕子「死」がおそろしいのです。怖いのです。私は偽善者で変態性欲者です。唇をゆがめ吐きすてるように、こう申します。自分を甘やかし他人に甘えるのは、もうよします。私はこの旅への出発前に、おこがましくも「裕子の最後の言葉」なるものを皆様に贈りました。然し裕子は、まだこうして生きています。囁つて下さい。私は今

どうしていいかわかりません。運命が私をどこかにつれてゆくでしょう。雪の夜に、ふと私の前に影を見せたあの瘦せ犬のように。

お母様、私はあなたを公刊の誌上で私のマソヒスムの元兇として記しました。あの世というものが、もしあるならばお母様はこの不孝者を何と思つていらつしやるでしょう。お亡くなりになつてもう八年。この世は再び戦争という人殺しの不安に全世界がおびえています。私は今まであなたをおまつりしたことはありませんでした。お墓以外は仏壇さえも作りませんでした。宗教は心のうちにあるもの、形式などは、そも末だと私は思いあがつていたからです。お母様はたしかに私のマソヒスムのもとでございました。あえてもう一度申します。これは真実でございますから。あなたの折檻は私にマソヒスムを目醒めさせました。けれども私はあなたのお教え通り嘘つきにはなりたくない一心に努力して来ました。性格の弱さのため、性質の自堕落な為、心ならずも嘘をつくことはないとは申しません。でも私は一生懸命嘘つきにはなるまいと努力してきました。これはたしかにお母様のあの厳しい折檻のおかげでございます。裕子は今悩んでおります。こんな時に今までは思い出しても見なかつたお母様あなたのことを思い出しています。勝手な人ねと云われる声が耳に聞えるようです。そしてマソヒスム以外に（嫌な云いかたをお赦し下さい）もう一つ大事なものを、あなたは私に与えて下さつていたことを、たつた今私は思い出したのです。それはあの小さい仏様——可愛らしい観音菩薩立像のことです。嬌慢な私は今までこんなものを振りむいても見ませんでした。しかしこの一、二年私にはうちひしがれています。この時私があの観音様を思い出したことは、お母様、あなたのお導きでございましたようか。

私は今はつきり思い出しました。お母様が小さい私に教えて下さつた、この仏の願のこと、大分大きくなつてからも時々話して下さつたあの観世音菩薩の悲願のこと、かつての私が末香臭いこととして願ひても見なかつたあの願のこと。それはたしか「攝取不捨」と云うのでしたね。あなたは叮嚀にそれを説明して下さつた。観音様はどんな願いごとでも、全部ききとどけ、それを自分の願いとして仏にお願いして下さることを誓つておられるのだということ。「一切ヲ攝取シテ捨テズ」あゝ何で私はこの美しい悲願をあのように不遜に願ひなかつたのでしょうか。「一切ヲ攝取シテ捨テズ」この悲願の有難さは今の私の胸に沁みます。お母様私はこれをあなたの愛情の証しとして胸に抱きしめて生きてゆきたいと思います。お母様の観世音菩薩立像は、拇指程の小ささで、しかもそのお顔のあどけなさ、私には美術のことはわかりませんが、話にきく白鳳の名作をさえ思はせます。この唇の美しいこと、夢みる唇とはこのようなものをいうのでしょうか。「一切ヲ攝取シテ捨テズ」この可愛い仏様が、私のありのまゝの矛盾の姿をそのまま攝取され私の願いをききとどけて下さる誓願をなさつていらつしやるのでしょうか。

あの思い出しても恐しい空襲の夜、鉄と血と業火の中で一片の肉もなく飛び散つてしまわれたお母様、焼けあとの灰の中に不思議に面変わりもせず残つていたこの観音様を私が拾つたということは仏の導きでしょうか、お母様の願ひの果てでしょうか。

宗教は阿片だと云います「必要な嘘」だと云います。私には深いことはわかりません。そして今の私には、どつちでもいいことです。私は今の私の心に素直に従ひましょう。

相い変らずのくり言を長々と述べたてました。要するにこれは千

九百五十年代—二十世紀の後半の傾いた悪い世界の地球の片隅日本の、そのまた片田舎に住む、何の地位も才能も智慧も美しさも持ち合していない。しかもマソヒスムという宿命を負った屑のような一人の女の、弱々しい心の歩みを、正直にそのまゝ、たどたどしい筆に托した自慰の書にすぎないのです。これを最後までお読み下さった辛抱強い読者が、もしあるならば私はお詫び致します。こゝには皆様のお心を特にそるようなことは何一つありません。くだくだしい、いつも交らぬ愚痴に満ちています。これが何か価値があるとしたら、マソヒスムの女の生活心理がどんなものか判ることだけでございましょう。私の愚しさは御遠慮なく嘔つて下さいませ。私の生意気さが皆様のお気にさわつたら無学な女の云うこととお読みすて下さいませ。私の心におこつた思いを、たゞ慢然と書きつけただけなので、私の気の弱さは、書かでもこの言葉をつけ加えないでは筆が擱けないのでございます。

暗い部屋がほの白く白み始めました。氷のような冬の月がのぼつたのでございましょう。私は母親の観音像と、亡夫とのレインコートを左右の手に握りしめ、まだじつと座つています。

「書くということは発見することだ。書くとは今まで知らなかつた自分を、その中に発見する」西欧の偉い作家が申されています。

私もこの中に今まで知らなかつた自分を発見したでしょうか。

「生は暗く死もまた暗い」あの絶望的なモチーフが、まだ私の胸の中に、まざまざとくりかえされています。そうです。本当に「生も暗く死もまた暗い！」

隣のような月の光が窓から射しこんできました。観音の横顔に冷

たい冬の月光が注いでいます。この観音の悲願こそこれからの私の「救い」でしようか。それとも呪われた私の心は、今までと少しも交らぬ泥沼に悶え廻るのでしようか。それは私にも解りません。そして誰にもわかることではないのです。

月の光が翳つてきました。部屋はまた暗くなりレインコートのゴムの感触が冷え冷えと私を刺戟します。

私の唇は胸の思いに堪えかねて、またもこうつぶやきます。

「生は暗く、死もまた暗い！」と

(終)

〔読者通信〕

(投稿歓迎)

小生は昨年八月号から御誌を愛読させて戴いている者です。当地の店頭にもふと貴誌を見出し何気なくヒラヒラ頁をくつて、その内容に感激したものです。かねてより小生の夢に描いて実行出来なかつた事をその内容に見て嬉しく思いました。それ以来御誌のとりこになつたのです。口繪の女体責の写真や号を追うに従い充実してゆく内容に感謝しております。毎月貴誌の発売日が待遠しくて店頭で特徴のある表紙のデザインで新しい号を見つけた時の嬉しさは何にたとえたら良いでしょうか。「アリスの人生学校」も素直に思いました。滝屋子先生や都築峯子先生や又杉原虹児先生の繪はたまらなく又岡田咲子松井籟子両先生の読物も小生を感激させました。各先生に繪や文に今後共旧倍の御奮闘をお願いすると共に、貴社からも高知の田舎街にも先生方のフアンの居る事を御伝え願いたいと思ひます。編集部の方々も益々御元気で万難を排して奇巧の発展の為一層の御活躍を御祈り申し上げます。及ばず乍ら全国の愛読者の皆様の御協力を得て出来得るかぎり応援させて戴く所存です。では又後便にて皆様御機嫌よう。

(高知市 安岡生)

御激励有難うございます。○全国的皆様から温かいお便りを頂く度に、私達はせめて満足はして戴けなくとも遅刊だけはしたくないと懸命に頑張っております。どうか末永く御愛顧下さるようお願いいたします。

(編集部一同)



海外サデイズム雑誌

1

さ る ぐ つ わ

(上)

吾 妻

新

やりかたの相違

これから何回かにわたつて、外国のサデイズムやサデイズテイックな流行などを、取りとめなくご紹介したいと思いますが、まず最初は私の好きな猿ぐつわにしましょう。ただその前に、東西のサデイズムの一般的な相違と、その相違が今後どう変つてゆくかについて、私の意見をのべておきたいと思います。

まず誰もが気づくことは、アチラのやりかたは科学的、機械的、即物的だということだす。言いかえると、手段が機械化されています。これはルネサンスの異端審問所の拷問器具をしらべただけでもわかることで、一つ

一つの目的に応じて、もつとも確実に遂行されるような道具や機械が発明され、きわめて精巧な大掛りのものまでつくられています。

拷問ばかりでなく、現在のサデイズムが使用する責め具や拘束具にしても、科学的で合理的です。たとえば縛りつける支柱にしても、ヒルシユフエルトの蒐集した写真のように、開いた両脚をのせて固定させる踏台があつて胸や背中あたりの横木をそれだけ凹ませてあるような合理的なものがたくさん考えられています。からだを吊り上げるにも滑車をついてロープを通し、摩擦を少くする。こうしたことは有り合せの柱にぐるぐる巻きにしたり、家に附属している梁を利用して縄をひ

つかけ、力まかせにひつばるやりかた等は根本的にちがつています。例をあげれば限りもないでしょう。

私はこの相違を、食事のときの箸とフォークとの相違にもつてゆきます。つまり、その背景に横たわる文明の異質性、それが生産力のちがいでなく永い歴史の結果として生みだされた物質の精神にたいする考えかたの相違です。肉や魚を切り裂いたり突き刺したりするのに必要だから、ヨーロッパ人はそれにふさわしい道具をつくる。ところが中国人や日本人は、箸でつまみとることができるようになつてきた。煮たり焼いたりし、さらに手先きを熟練させます。合理的な器具をつくるかわ



りに、方法を合理化させます。

では、どちらがすぐれているだろうか。もちろん一長一短があつて、一方が他方を否定することはできないし、必要もないのですが、ことサディズムにかんするかぎり、絶対に私たちのほうがすぐれています。その方法の豊富で多岐な点や、心理的な深さや、洗練さにおいて、アメリカをふくめてのヨーロッパは中国をふくめてのアジアの敵ではありません。

手錠ひとつを例にとつてもわかります。この鉄製の器具は頑丈で、たやすく手首をとらえ、効果は適確です。おそらくこれ以上簡単で合理的なものはないでしょう。ところが日本にはそんな便利なものはなかつた、というより合理化の方向にエネルギーが向かなかつ

た。それよりは有り合せの縄や紐をつかつて確実に縛る方法と技術にたよつた。言いかえると、すぐれた道具の不足が、すぐれた方法や技術を発達させたのです。そしてこのことは、素早いとか巧みだとかいうことの外に、あらゆる場合を想定した縛り方、締めかた、からだの各部分との連結のしかた、というふうに、きわめて豊富な型を生みだしました。だから私たちがアチラの縛りかたをみてもほとんど教えられるところがありません。確実に専門家としらうとの差があります。

縛りかたばかりではない。あらゆる点でおなじことが言える。私たちは何十人も女の尻をならべて一度に鞭打するような機械を空想したりはしない。その代り、ひとつの尻をいかに巧みに、変化を加えて鞭うつかということを考える。猿ぐつわについて、本誌一月号の古川裕子氏が述べただけのことを、いかなるヨーロッパのサディストが知っているだろうか。只単に拘束の目的を達するための方法と、拘束それ自体がより深いサディズムの手段になるような方法との相違がここにあります。

ところで、このようにサディズムがデリケートに洗練されるにつれて——事実サディズ

ムはこれ以外に発展する道はないのですが——重大な結果が生れます。それは、ふるい単純な残酷さからサディズムが解放されて、犯罪の危険性のない人生の享楽に転化できる可能性が出てきたことです。つまり、肉体の殺傷は興味がなくなりました。それだけ犯罪の不安がなくなりました。重点が心理的凌辱に移つたことは、狂暴な発作から持続的な快楽に移行したことで、ここに見知らぬ第三者よりも永つづきのする人間関係を求める気持が起きてきます。そうなれば、もはや反社会的な危険すらありません。

これがサディズムの名に価するか、しないかは別箇の議論になりますから、やめましょう。ただ、ハツキリ言いたいのは、この無害なサディズムが特殊な地点に突然出現したのではなく、いわゆるサディズムと称する反社会的衝動の昇華として、近代化されたタイプとして、徐々にその中から脱け出てきたことです。サディズムにあくまで獣性を帯びさせておきたい人はそれでもいいでしょう。だがそれは空想的な自慰に終り、本当に私たちの生活をみたくれませんか。またその実行は破滅あるのみです。私たちの心に巢食つてい

だから、残るところはこれを手馴づけ、洗練し、自己をも他人をも破滅させないやりかたで平和な幸福な生活のなかに生かすしかありません。

これが我田引水でない、何よりの証拠は、単純殺伐なヨーロッパのサディズムが、徐々にこの方向に発展しはじめていることです。この雑記で私はそれを証明したいと思います。が、明らかにそのやりかたは複雑となり、デリケートとなり、拷問よりも凌辱の形をとつて、持続的な楽しみや豊かな性愛遊戯に転化しつつあります。これが歴史的なサディズムの動きの実体です。

歴史の流れとともに、定義の内容は変わります。フランス革命時代のブルジョワジイは今日のそれとはべつものです。同様に、サディ

2



ズムがサード侯の時代と本質的に変わってもいいではありませんか。嫌悪し恐れつつ夢想するよりも、無害な形で幸福に役立てたほうがずっと楽しいではありませんか。

以上のことを念頭においていただいて、サディズム海外版の雑記をはじめます。

原始的な型

まず、猿轡の原始的な型からはじめましょう。ここで原始的というのは「単純な品物」ではなく「単純な目的奉仕」の意味です。つまりあたらしいサディズムの立場から評価したので、器具の精巧さには関係ありません。だから私はタオルや手拭のほうを進歩的な型として扱います。また事実そのほうが年代的な変化にも一致します。

これらの原始的なタイプの猿ぐつわはすべてが頑丈な金属製で、ただ口から首にかける簡単な帯状のものから仮面様のものまで、形はさまざまですが、構造は大体似たりよつたりで、外せないように錠をおろし（これが日本とちがつて機械的に完全なところですが）、それにとりつけた防声具でしゃべれないようにします。

十五世紀の末からはじまった有名な魔女狩

りの時代には、魔女とみなされた女は捕えられていろいろの拷問をうけましたが、そのときには猿ぐつわをはめるのが絶対に必要だとみなされていました。さもないと魔女は呪文をとなくて変身したり、相手を猫だとかヒキガエルだとかに変身させると信じられていたからです。口に突っこまれる防声具は、大抵はなめらかな鉄や木で出来ていて、舌を押さえるだけですが、イングランドに残っているものの中には、そつとするような凄いのがあります。その防声具は二インチほどの長さですが、そのさきに丸い玉がついていて、上側に三本、下側に三本以上、側面に二本、するどい針が植わつていっているのです。だから犠牲者はこれをはめられたが最後、しゃべるところか、口じゆうを針で突き刺されて死の苦しみを味わわれます。言うまでもなくこれは猿ぐつわと拷問を兼ねています。

ここに掲げた図の1は簡単なものですが、口に当たるところはWの型をしていて、その中央の山型の部分が口にさし込まれ、外側の棒が両方の頬をはさみます。その棒の平たくなつた先端に、弾性のある鋼鉄の帯がとりつけてあつて、両側から首のうしろに廻し、ネジのある締金で留めるのです。なお図をみると



うしろで帯が交叉していますが、これは首の太さによつて調節するためで、一方の鉄帯の端をもうひとつの鉄帯の溝にはめこみ、十分締めつけておいてから、溝にたくさんついてゐる穴の適当なところへ南京錠を通してカギをかけるのです。これで絶対に弛むことも、外れることもありません。

第2図のものはもつと残酷で、口に当る部分の裏側に、みじかい鋭い釘を植えた鉄片がついてゐるのです。だからこの猿ぐつわをされたとたんに、口唇や口のまわりは縫いつけられてしまいます。しかしそれほど目の目に会わせたくないときは、ちがつた用法が行われました。それは鳥毛をいっばい詰めた革の袋をその部分に取りつけるのです。すると釘は革の袋に刺さるが、抜けてしまうことはありません。

ません。だがこれで強く締めつけられると、鋼鉄の帯とやわらかい口との隙間は完全にふさがり、強く圧迫する詰物からは釘の感触が伝わつて、きわめて効果的だと言われている。事実この猿轡は、直接に口を縫いつけるよりもこの詰物と併用した場合のほうが多かったようです。

3、4、5図はいづれも口のなかに防声具をさしこみません。その代り、3と4の顎を支える金具には釘がついていて、それが口の運動をゆるさないのです。

5図のものは全く特殊な人が特殊な目的のためにわざわざ作らせた豪華な銀製の、脱げぬように前面と背面をわけて鑄造させ、これをかぶらせてから鉄打ちして留めてしまいました。言い伝えによると、ある金持が妻にたいして激怒のあまり、死ぬまでこれをかぶらせておくと言言したのだそうです。図でわかるように口の部分に蓋を取りつけてあるので食事することはできるが、気に入らなければいつでも閉じてしまいます。純粹の猿ぐつわとは言えませんが、蓋をすれば明瞭な言葉にはならないので変型として掲げておきます。頭上の鉄環は鎖を通す穴で、これで壁にでもつないでおけば両手を縛らなくてもよいわけ

です。口うるさい妻や刑罰に値する女にこゝうした猿ぐつわをはめる習慣は二百年前まであり、あるところでは十九世紀まで行われていた。おしやべりの妻に猿ぐつわをはめて鎖でつなぎ、その傍で安楽椅子にかけた夫がノンビリと新聞をよんでいる画や、後ろ手に縛り猿ぐつわをはめて、頭上の環を通した鎖をもつて往来を曳き廻つてゐる絵画もあります。が、省略しましょう。

凌辱を加味したマスク

一六六九年または一六七〇年にロンドンでデザインされ、実際に使用された革製の仮面は興味があります。これはその後発達したさまざまな懲戒用の仮面などと共に、サディスティックな仮面史の一項に加えるべきかもしれませんが、実際に口をきけないようにできているので、猿ぐつわとしても扱うことができます。また、前述の機械的などぎつい構造でなくなると同時に、心理的な凌辱の面が強くなつてゐるので、是非紹介しておきたいのです。

そのころの英国では、上流の婦人が外出するときに覆面をするのはすこしも珍らしくありませんでした。特に劇場に出掛ける場合は



そうでした。その覆面はふつう薄い木の板が厚紙に黒い縹子を張つたもので、顔全体を掩い、眼のところだけ孔があいています。(穴といつてもグロテスクな丸い穴ではなく、眼の形になぞらえた細い袋目ですが)。これだけならば仮面舞踏会のマスクや日本の能面と変りはないのですが、面白いのはその裏側に木の突起があつて、それを口にくわえなければならなかつたことです。だからこの仮面をかむと、しゃべることができず、むりに声を出しても言葉にはならないのです。

4

ではなぜこんな奇妙な仮面がつくられたかという、当時の女の地位の低さと劇場との関係を考えねばなりません。共和制のころに廃止されていた劇場が復活してからも、男は公然とそれを楽しむことができたが、女はつづらに出掛けるわけにいきませんでした。これは法律上の禁止でなく、因習的な抑圧だつたので、ちやうど男が料理屋へいくのはなにともないが、女は理由もなくはしたないと見做されるようなものです。だが劇場は楽しいところだし、貴婦人たちにとつてはこの上もない魅力です。それで、こつそりと観劇できるように、こうしたマスクが利用されたのです。

重要なのは、この仮面がけつして女を男に見せなかつたことです。彼女はボンネットをかむり、裾のながいスカートをはいている。そして仮面そのものが女であることを広告しているようなものです。だからこの仮面は男装などとは全く意味がちがうので、ただ劣れる性としての女が「公然」と劇場に出入りしない意志表示であり、「慎しみ深さ」によつて黙認される性質のものです。そこで、女の口やかましさを、手ひどく批難された当時では、声を立てさせない木製突起物はふかい意味をもっています。一般にこの仮面は、顔が見えないことと発音が不明瞭なためにその女が誰だかわからない二重の効果をもつと説明されていますが、私に言わせればそれは結果からみた解釈で、發生的には女の地位の低さ

から生じた「みずからの戒め」であり、それによつて男の快楽に参加する許しをえようとする無意識的な努力のあらわれだつたと考えています。

ある雑誌に、このマスクにまつわるエピソードがのつています。筆者は登場人物を全部仮名にしたことを弁明して、この家系のものがまだ沢山生存しているためであり、このエピソードもその中の一人から聞いたのだとこゝとわつていますが、真偽のほどは保証できません。とにかく簡単に紹介してみましよう。

サミュエル・スチールという商人に、ジョアンナという十八才の美しい娘がいました。彼はこの娘を劇場にやるときにはかならず彼女つきの女中を附き添わせ、もちろん当時流行の仮面をかぶせました。

さて、スチールは有名なロンドンの大火で手ひどい財政上の傷を負つたので、それを挽回するためにはなんとかして娘をチモシイ・カークに嫁がせようと思つていました。このチモシイは老人で、痛風病みで、しかも非常に醜かつたが、大金持だつたのです。言うまでもなくジョアンナはそんな男と結婚する気は毛頭ない。彼女の惹かれてゐるのは、暮しこそ中流だが、若くて、健康で、美しいパ



ーチデイルという貴族です。彼女が彼と知つたのは劇場でしたが、あわれなジョアンナは顔を掩い猿ぐつわされているので、どうすることもできませんでした。

ジョアンナは父親の意志に従わないので、いろいろな罰を受けるのですが、ときにはその仮面をつけたまま、女中のエンマと一緒に町へ買物にやられます。すると物見高い群集のなかでエンマが用を足している間、囁のようになだまつて立つていなければならないのです。またあるときは、その仮面をつけ通して首を振つたりうなずいたりするだけの生活を強いられました。

だが、ジョアンナはパーチデイル卿がじぶ

んを救い出してくれることを夢み、信じていました。また、事実そうだったのです。彼は配下の者に命じて夜となく昼となくサミュエル家を見張らせていましたが、いよいよジョアンナが仮面をつけて劇場へいくという知らせを受け取るや否、さきまわりして眼立たぬところに席を占めました。

しかし、すぐに決行というわけにはいきません。それには準備が必要だったのです。なぜなら、パーチデイルは彼女を誘拐するつもりだったからです。

こうして、何回か劇場での逢瀬を経た後でしよう。ある日の午後、ひとりの男が彼女のボックスに近付いて、まず召使のエンマに、御主人が表の馬車で待っているからすぐ来て頂きたいと告げました。エンマはいそいで外に出ると、向うの町角に停まっている馬車を指さされ、一生懸命に駆けてゆきました。それから間もなく召使風の男がジョアンナの傍にきて、そつと顔を寄せ、いまの女の方が病気になるので、すぐあなたにお出でを願っていると言いました。

ジョアンナが、あとについて観覧席を出ると、その男はエンマとは反対の方向に彼女をつれてゆき、だれもいない控え室にひきずり

こみ、ドアをしめました。

ふたたびドアが開いてジョアンナが出てきたとき、彼女の外套は念入りに前を閉じ合せてありました。その下にかくされている両方の手首は前で縛られ、両腕は動かさぬように脰から背中にかけて縛り上げられているのです。彼女が叫ぼうとしたかどうかは猿ぐつわ式仮面のためにわからないが、縛られるとき抵抗しなかつたことは事実のようです。言い伝えによると、手首を縛られるときに両手を揃えて出したときと言われています。おそろく誘拐の目的を知っていたのでしよう。

だから彼女はいたつて柔順に、男のあとについて劇場を出、待たせてある馬車にのりました。すると男は彼女の足首と膝をかく縛り、身動きできぬようにしておいてから、馬車を走らせました。

無事にロンドンの町をはなれると、男は馬車をとめて、御車台から車のなかに入つてきました。そこで変装を解くと、紛うかたなきパーチデイル卿だったのです。

彼は、ジョアンナの足をすぐ解いてくれたが、両手はそのままにしておきました。永い旅行がやつと終るころになつて、はじめて両手も解いてくれましたが、パーチデイルの郷

里の家の閨をまたぐまで、帽子と仮面をとることはゆるしませんでした。

翌朝、ふたりは結婚式をあげましたが、それがすむや否や、ジョアンナはまたも猿ぐつわの仮面と婦人帽をかむせられ、お祝いの席に着かせられました。そこでは多勢の人々が集まつてどんちゃん騒ぎをやるのですが、彼女

は食べることも、話すこともできないのです。すると、いまは夫であり主君でもあるパーチデイルは客にむかつて自分のやり方を説明しました。

「沈黙と従順は女の徳だというのが俺の哲学なんだ。この女は一方の手から他方の手に移っただけさ」

ひとたび結婚式をあげてしまえば、サミュエル・スチールが憤慨

したところでどうにもなりません。それに、

パーチデイル郷は陽気な君主チャールズ二世のお気に入り、しばしばパーチデイル郷にもお出でになると言われているからです。そのとき王はかならずジョアンナに猿ぐつわ式仮面をつけさせるように命じたそうです。

パーチデイル家に伝わる伝説がもう一つあ

ります。それは最初の子供が産れるまで、毎年ジョアンナを誘拐した日を記念として仮装舞踏会が開かれましたが、その席上パーチデイル夫人はジョアンナ時代の服をつけ、呪わしい仮面をつけて、沈黙と従順のうちに宴会の司会をしなければならなかつたのです。

これでエピソードは終わりますが、誰にもわ



かることは、この話に凌辱の色彩が加わっていることです。父親や夫の態度には、明らかに心理的なサディズムがみられます。だがそれを成立させる条件として、猿ぐつわの構造の相違を見逃すわけにいきません。

原始的または古典的な猿ぐつわは、機械的に完全なために、女に抵抗の余地が全くあり

ません。たとえば針や釘で口を縫いつければ

声を立てさせない目的は完全に果しますが、あたえる苦痛は純粹に肉体的です。また鉄製の器具で錠をおろしてしまえば、手足がいかに自由でも絶対に取り外せないという点で完全であると同時に無味乾燥です。だがジョアンナの場合は錠もなく、猿ぐつわ自体は肉体を傷けず、それほど苦痛でもない。だから精神的にそれを認めねばならない苦悩が加わるのです。また男の立場からいえば、もしも相手が猿ぐつわを外そうとすれば手を縛らねばならない。機械的に不完全であればこそ、緊縛やその他の拘束とむすびついて、サディズムの効果は自己終結的な「部分」から、あらゆるテクニクを必要とする「全体」へと発展します。

この傾向はアメリカやヨーロッパでも強くなつて、現代は日本の猿ぐつわを頂点とする方向に動いています。今回はその実例を紹介しましょう。

次号は、 さるぐつわ(2)

器具から布への移行

「彼女は今映画に出ている」

これからどう変わるか

私の求めた男

〔松井籟子自伝的小説〕



(四)

松 井 籟 子

瀧 麗 子・画

一

少女から処女へと、体が順調に女として發育してくるにつれて、私はしばらく被虐の願望から開放された。私にとつて、被虐が性慾に漠然と結びつけられていたのは、本当の性慾の何であるかを知らない年令にあつたせいかと思えるほど性に目覚めはじめてくると、ただ男を求めるのに急だつた。という、まるで、私が次から次に肉体的に男を求めたようだが、そうではない。ただ被虐ということを全然頭におかずに、ただ男に惚れた。実に惚れつぽかつた。惚れつぽいからすぐ飽きた。肉体を汚すひまなさて、男に惚れ、男から離れ又、別の男に惚れるということを繰返えした。そしてそれはコントのような恋ばかりだつた。

十七の暮、私は友達の自転車屋の店員を好きになつた。いつも手拭できつちり頭を包んでいた。しかし時とすると、そ



の手拭を猿ぐつわのように口にかけて、店の掃除をしていることがあった。そんな時、手拭の上から出ている二重瞼の切れの長い目が私の顔を見てはにかむようにうるんだ。

私は今、被虐の願望はなしに人に惚れたと書いたが、その男の手拭はたしかに猿ぐつわに似ていたし、ものも言わずに、瞳だけに思いをこめて見られた印象は、今考えると、やつぱり私の奥底にあるそうした願望と何か通じるものがある。ただ、その時はそれを意識しなかった。その男を苛めてみたいとも、又、苛められたいとも思つたわけではない。その手拭すら、猿ぐつわのようだと思わなかつたような気がする。しかし、今、その男のことを書こうとすると、先ず手拭が目の前に浮かぶのだ。奥深い店の天井は、さかさに吊つた自転車がずらつと並び、外の光線は店の入口ぐらゐにしか届かない薄暗い店だつた。自転車店といつても、自転車を売るよりは、修理が目的のような家だつた。

友達をたずねて行くと、その男がいつも、頭の上に自転車を吊つた下で、青い菜つ葉服を油でよこして、手拭で口と鼻をおおうように顔半分をかくして、自転車の修理をしていた。油の匂いが厭なのだと、あとで聞いたことがある。

店先で友達の名をよぶと、手にスパナを持つたまゝ、その男が出てくる。私はその姿に妙に惹かれたのだ。

やがてお正月が来て、友達の自転車店も休みになつた。かるた会をするというので、私はその男に会ふのをたのしみにして行つた。しかし、ふだんの、油で汚れた菜つ葉服をぬいで、黒っぽい和服を着ている彼に、私は失望した。美しさを感じなかつたのだ。

友達にひやかされて、頬を赤らめている男の顔を、私は冷たい顔でじつと見ていた。何故此の男に惚れたのだろうと不思議に思ひながら、私の思いはもう再びその人に対して燃えてはくれなかつた。

それ以来、あんなに足繁く行つた友達の店へ行かなくなつてしまつた。友達に用があれば電話でことが足りたのだ。

しばらくして、私はその男からラブレターをもらつた。

「胸いぐられる思いすて、恋すたつて居りました」

そんな風な手紙だつた。

男の生れ故郷だという秋田の方言を、そのまゝ文字につゞるような男だつたのだ。

私は友達に電話をかける事さえ、躊躇するようになってしまつたそれつきり、その男からは二三通手紙が来たが、やがて郊外の方へ移つて、自動車の運転手になつたということだつた。私はその男の名を今でも覚えてゐる。

二

その次に好きになつたのは洋服屋の店員だつた。何しろ下町の商店街では、若い娘の恋の対象になるような大学生は少かつた。

洋服屋の店員の何に惹かれたかという、その人の髪だつた。

私が夜おそく勉強に疲れて二階の窓から、おもての通りを見てみると、はす向いの洋服屋では、店員達が頂度銭湯から帰えつてくる時間だつた。私の部屋の窓に灯がついていると、その人はきまつたように振り仰ぐ。その時、銭湯で洗つてきたのだろう、バラツと濡れて額にかゝる髪を、頭を軽く振つて上へあげるのが癖だつた。その濡れて乱れた髪を美しいと思つた。それは磨かれた男の姿を連想させるものがある。しかし、今でこそ、そう思うのであつて、その時私は濡れた髪の美しさを、被虐に結びつけて考えたわけでは決してない。むしろ、芝居の「島衛月白浪」の明石の島蔵のさんぎりの頭を連想したかもしれない。しかし、月の光のような青い光線の舞台で、松島千太と争う島蔵の細い腰と、白く白粉を塗つた脚は、あぶな絵を見るような官能的刺激があつた。島蔵の髪を洋服屋の店員の髪に結びつけていた私の恋心は、肉体的な慾望が底にひそんでいたのかもしれない。

夜更けた窓に、ただその男を一目見たいと思つて、冬でもあけて待つてゐるということは、純情そうにみえながら、純情な恋ではなかつたのかもしれない。

自転車屋の店員といふ、洋服屋の店員といふ、私の春の目覚めがそのまゝ恋心となつたような恋の動機で、そこには精神的な深さは何にもなかつた。精神的深さが何にもなかつたから、すぐに飽きた

のかもしれない。

やがて洋服屋の店員は胸をわずらつて故郷へ帰えつた。彼の故郷は諏訪湖の近くだつた。

夏になつて、洋服屋の主人が妻や子供をつれて信州の温泉場まわつてみようという計画に私を誘つてくれた。中学一年の子供のを英語の宿題が、その夫婦には難物だつたからだ。どうせ私を連れて行く費用を私の家でだまつているわけではない。無料で家庭教師をつれて歩くそろばんになるのだつた。

私は信州といわれて、先ず第一に胸をわずらつて故郷へ帰つてゐる店員に会う折があるのではないかと、心はずませた。もしかしたら、主人夫婦が信州へ行くという話を母から聞いて、無料家庭教師の話をそれとなく言い出したのは私なのかもしれない。人を恋すると、恋する人に会う為には、随分いろいろな智慧をしほり出したからだ。動物に電気がおこるように、私の体は恋をすると、体全体びりびりさせて機会をねらう。いつもは聞きのがしてしまうような小さな言葉から、まるで仮空の小説を筋立てするように、恋する人に会う手段をこしらえあげてゆく才能があつた。今でも多分あるのだろう。

洋服屋夫婦に子供が二人に私と、一行五人は先ず八ヶ岳の山麓に宿をとつた。

上諏訪の在にあるその店員の家へ見舞かたがた遊びに行くことになつたのは、一と月おくれの盆だつた、そのあたりは製糸工場の多い所で、盆の十六日は女工さんの休みで、諏訪の温泉が賑の匂いで満ちてしまふといわれた。

「俺のような年よりでも煩かぶりしていつたら手さとりれるだよ」

と出がけに宿屋の親爺が卑猥な笑いをした。そんな町で、私の好きな人はどうしているだろうと思つた。

毎晩のように、二階の窓と外で、ただ瞳を見交したただけだったが、その人が私を愛してくれているような気がした。たとえ性慾が因をなしているにしても、乙女の恋は清浄だつた。その人に会えるという期待は、私を落つかなくさせていた。

その町へつくと頂度昼だつたので、私達は駅の近くで昼御飯を食べてから店員の家へ行くことにした。「井出来ます」と書いたのれんを入ると、「どうぞお二階へ」と言われ、五人はそろそろと二階へ上つた。天井の低い二畳か三畳の小さな部屋がいくつあつた。他に客もないらしく、あけ放してある部屋を私はのぞいてみた。まるでそれはままごと遊びの時、箱を並べて絵葉書で区切つたような小さな部屋なので、私は興味をひかれたのだが、

「そんな所のぞくんじやないわよ」

と、洋服屋の細君にたしなめられた。何故か細君は赤い顔をしていた。

夫婦の会話に「だるま」という言葉が使われていたが、私にはその意味が解けなかつた。ただ何となく、深く訳を聞いてはいけない言葉のような気がしたし、そんなことよりも、早く井を食べて、一刻も早く、彼の家へ行きたかつた。私は彼の濡れた髪がしきりと思ひ出された。しかし私達を迎えたその人は、もう長い髪の毛をしていなかった。病氣は大分よくなつていらしかつたが、床についている間に、暑い折のことだし、うるさいので、すっかり刈つてしまつたのだということだつた。

彼の坊主頭にはところどころ小さな砂利禿があつた。

私の思いは風船玉がしぼむようにしぼんでいつてしまつた。

三

コントのような恋と私は前にことわつた。本当にコントのような恋だつたのだ。しかしその恋に心を燃している時、私は決して遊びの気持ではなかつた。一つ一つが真実の恋のつもりだつた。その証拠には、私はその人達の姓も名も、未だにはつきり覚えていた。或いはその人達は失恋したと思つていてもかもしれないが、私にとつたら私も亦失恋したのだ。結局は恋をし、恋を失うに変わりはない。一と月と続かない恋もあつた。

だから私は人を愛しても、愛しているという意思表示をしたことがなかつた。いずれは消えていく恋心と自らあきらめていた。それなら相手が愛してくれなくてもいいかというところ、やつぱりそうはいかない。人並に相手の心が気になつた。やつぱり愛して欲しかつた。しかし、「愛している」と口に出して告げられるのは厭だつた。もしお互に「愛している」などと告げ合つてしまつても、私は私の思いが不安だつたからだ。相手の心が変らないようにと祈る人は多いだろう。私は私の心が変わりませんようにと、神に祈りたかつた。そんな勝手な願いをきいてくれる神はあるわけのものではない。結局、私は心ひそかに恋し、心ひそかに飽きるより道がないのだ。肉体を傷付けるひまのない恋のしかただつた。

十九の夏が来た。

私の家は千葉県のH海岸へ家を借りた。私が信州へ行つた夏をのぞいて、それまでの数年、毎年H海岸へ避暑に行つていたので、夏の灼けつく太陽は私の肌を焦したただけではなく、私の「女」を燃や

させたのか、私はぎらぎらと光る海面へ十九の女体を投げ出して泳いだ。泳ぎ疲れて波間にぼつかり体を浮かしながらも、私の命の火は疲れることを知らないように体の中で燃えさかった。

めまぐるしく恋をし、めまぐるしく恋に飽きた。私は飽きない恋が欲しかった。

雨の日でも浜へ出て泳いだ。体にたたきつける雨も、私の女の火を消してくれない。そのくせ私はどうされたいのか、どうしたらいいのかわからなかった。

男にちやほやされて、八方美人をきめこんでいたわけではない。

私はひとりの人を好きになると、他の男には目もくれなかった。一度にあつちもこつちもという惚れ方は、私には出来なかった。一生懸命ひとりの人を愛した。たとえ一週間で飽きる恋でも、その時はその人のことしか頭にないような愛し方をした。

東京からの避暑客は長くて一週間位しか滞在しない。名を告げ合うころには「秋に又東京で」とか「お手紙出していいですか」とかきまり文句を残して去って行く。

避暑地は誘惑が多いとか、若い娘にはいいことないとかいうが、私は飽きつばい自分を知っていたから、どんなに心を燃しても、恋を成立させることに對しては慎重だった。唇一つ汚しはしなかった。

私はその頃、フロイドの精神分析を読んでいた。そして私のうつりやすい恋でも性慾なのだと思っていた。しかし性慾をみたしたいと願うのが本能なら、処女を守りたいと思う心も本能のように強かった。又誰か対象をみつけては恋をしていた私の性慾は一応それで解放的に発散されていたのかもしれない。それと人魚のように水に

たわむれるたのしみが私にはあつた。私と同じように沖の方まで泳げる人はわりに少なかつたから、水の中で、男にたわむれられるという危険も少かつた。

母さえ見惚れるような丸い乳房をビツタリと毛糸の海水着でつゝんだ五尺三寸十四貫の体は夏の強い陽にふさわしかった。舞扇を帯にはさんで、踊りの稽古に通つた私とは別人のようなたくましさ、私の体におどつていたことだろう。

しかしどんなに肉体ばかり立派になつても、それは私の意志と関係なしに健やかになつてしまつたので、その肉体の中にある心はやつぱり幼時の記憶をとどめ、芝居の舞台の濡れごとに心惹かれる古めかしさを持つていた。内と外とですでにそうした矛盾があつた。

女学校はミツシヨンスクールで、人まねに主イエスを念じ、家へ帰えればさまざまの迷信に氣をもみ、縁起をかつぐ。ベレーが制帽の様に、赤青とりどりの色のベレーを被つてゐる級友達と同じように、私も亦ベレーを横つちよに被り、グリーンのジャンパースカートを着たりして通学したが、お正月になれば下町娘らしく桃割や鹿の子天神というような頭に結つて、長い袂をひらひらさせた。一つの肉体の外見だけでもそうした矛盾があつたのに、それがそのまま外貌と心との矛盾にもなつていたのだ。

私の肉体の奥に、被害へのあこがれが座を占めてゐるなどと、誰が考へてくれたろう。しかし、思いがけないことから、私の秘めた願いが、僅かに満たされる事件が起つた。

という、少し大げさだ。事件という程のことでもない。ただ私の性癖をさかのぼつてたどつてゐる今、これから私が書こうとするH海岸での一挿話はやはりそうした私の肉体の歴史の上では、事件

の一つに数えられるのかも
しれないと思う。

四

八月十五日にはH海岸の
花火大会が毎年行われた。
それは一と月おくれのうら
盆で、海で死んだ人への供
養の意味があつたのかもしれない。その日の賑わいを
最後にして、海岸が寂しく
なつていくのも例年のなら
いだつた。

海には土用波がたちはじ
め、くらげが多くなる。七
月から来ていた避暑客も、
帰る日取を考えるようにな
つてくるのだ。

H海岸の花火大会は、一

夏の賑わいへの空にうたう挽歌だつたのかも知れない。

頂度その花火を見かたがた、私の友の井上弘子が東京から来たの
は八月も十日をすぎた頃だつた。

弘子は私の所へ泊る予定ではあつたが、もう一つ目的があつた。
それは弘子の許婚者の沢渡恵之介がH海岸とは浜つゞきのTに来て
いたからだ。



沢渡恵之介はN大の学生だつた。当時どの大学でも、不良少年と
いわれる学生は多少いたが、特にN大は勉強嫌いな者にも入学が安
易だつたらしく、不良が多いという評判だつた。

しかし、恐いものみたさという気持は今も昔もあるらしく、不良
仲間というものに、漠然とした好奇心を持つ女の愚かさは、どこか
ら出るものなのだろう。もしかしたら、或る女達が持つている強姦

願望に一脉通じるものではないだろうか。

ある文豪の若い時の小説に、毒婦に惹かれるマゾヒストを書いたものがあつた。不良と知りながら近づく気持の中には、マゾヒズムがあるといえないだろうか。

とに角私は沢渡恵之介に興味を持っていた。それは好意に変形し恋に変わる可能性のある興味だつた。

沢渡恵之介に会うのは、その夏がはじめてではない。前の年の秋彼の学校の記念祭に女装をするといつて、私の洋服を借りに来たのが最初だつた。それから時々、井上弘子を通じて、映画に誘われたりしたが、一対一の交際ではなかつた。弘子の遠縁で、いずれは結婚するような話になつていたから、私は安心して、彼に興味を、或いは好意を持っていたのだ。

その夏、沢渡が友達同志数人でTに間借しているという話は弘子から聞いていたが、涙は続いても一と駅ほど離れていたし、私の方からわざわざたずねて行く口実もなく、沢渡も弘子を間におかずに、単身来ようとはしなかつた。

弘子は私の所で一晩泊ると、あくる日すぐに沢渡の所へ行つてみようと言ひ出した時、私は二つ返事で賛成するのが癪な程心を動かした。男同志の自炊生活というものも何となく見たかつた。たゞ女二人でたずねて行つて、何か赤新聞の記事にあるようなことが起りはしないかと危惧する心もあつた。しかし、虚心で行くならともかく、危惧しながら行くということは、危惧ではなく無意識の願望だと言えないこともない。

母は私の交際に一つも干渉しない方針をとつていた。そのかわり自分自身に責任を持つように私は教育されていた。私は自由だつた

が、母の信頼が強ければそれだけ私の責任感も重くなる。その重さをひとりの肩に背負いきれず、私は母にどんな些細なことでも逐一報告することで、幾分でもその重さを軽くしていた。正直の上に馬鹿がつくようなおしやべりをしてゐるのは、母の教育によるらしい。母が私について、たつた一つ知らないことがあつたのは、私の被虐に対する思いだけだつた。母でさえ知らなかつたこの思いだけは、私は今でも沈黙を守り通して来た。原稿用紙に向つてだけ、私は私の此の思いを語っているが、現在愛する人にさえ此の性癖について言つたことはないのである。

井上弘子と一緒に沢渡恵之介をたずねて行く道すがら、二人は一つの賭をした。

「今行つて沢渡さん家にいるかしら？」

私は言つた。

「海へ行つてゐるんじゃない？ 間借している家へ行くより、直接浜へおりて行く方がいいのじゃないかしら？」

そう私が言う。

「でもそのうち行くつて便りを出しておいたんですもの、家にいると思うわ」

弘子は言う。

私自身も彼が家にいる方がいいと思つた。何故なら、女二人の不意の訪問に、彼がどんな顔をするか見たかつたからだ。海辺の明るさと広さの中ではその印象がぼやけそうだつた。それに沢渡ひとりではない。男同志が思い思いに散らかしているであろうその部屋へ不意にたずねて行つて、男達のあわてる様子を想像すると、どうも涙よりも、家にいてくれる方が面白いような気がした。

私は沢渡恵之介が家にいることを望んだから、いない方へ賭けようと思つた。いない方へ賭けてもいいれば、賭に負けても、いたというところが一つのたのしみになる。もし私の賭けた通りに家にいなければ、いなかつたことに失望しても、賭には勝てる。そういうずるい計算をすばやくした私は

「とに角家へさきに行つてみましょう。あなたの彼氏なのだから、あなたの意見を尊重するわ。でも、私は家にいたいと思うのよ」

「いゝわ、賭しませう。そのかわり、もし家にいたら、夏ちゃん、私のいうこときく？」

「私の出来ることなら何でもきくわ。そのかわり、もし家にいなかつたら、一日私に彼氏を貸すの、映画見につれていつてもらうわ」

「いゝわ、賭したわよ」

「OK」

このどつちに転んでもいゝつものの賭が、私にとつて前に書いたような一つの挿話を生み出す原因になつたのだ。

五

「わあ！ いた、いた！」

弘子は頓狂な声をあげて手を打つた。沢渡は頂度様先へ持ち出した七輪の下をあおいでいる所だつた。

二人の女の訪問にあわてたのは、沢渡よりも、部屋の中にパンツ一つで寝転んでいた連中だつた。

夏のことで開け放してはあつても、様先にたたずむと汗と髪油と煙草と一緒にしたような匂いが漂う。男臭いともいうのだろうか。そんな様先へ二人は腰をかけると、何よりもさきに弘子は言つ

た。

「さあ賭に勝つたから、夏ちゃんは私のいうことをきかなければいけないのよ」

私は沢渡に対して、彼がいるかいないかというようなことを、賭する程、彼の存在を二人が問題にしていたように思われはしないかと、一寸まぶしいような顔をした。そして、すぐにそれをごまかすように

「えゝ、何でも言つてごらんさい。ちゃんということ聞いてあげるわ」

と、昂然とうそぶいたのだ。

弘子は沢渡と耳うちするようにこそく／＼と話し合つていた。

「するいわ、弘ちゃん。私あなたとは約束したけど、沢渡さんの智恵を借りるなんて約束しないわよ」

そう私が言うのと

「あら、だつていゝじやないの、――、どうせ私の半分になる人ですもの」

弘子はぬけ／＼とのろけた。

しいて私がそれ以上何かいうと、弘子と沢渡の仲を嫉いてでもいるようにとられそうで、私はもう何にもいうことが出来なかつた。

沢渡から、他の二人の学生にさゝやきが伝わつた。

私は判決を待つ罪人のような気持で、わざと皆に背を向けて、様側に腰かけていた。

「とに角泳ぎに行くのに、私、海水着に着かえるわ」と、弘子は言つた。

「男の人達は一寸の間、外へ出ていてちょうだいね」

そう言う、弘子は部屋へ上つて、沢渡と二人で押入へ首をつゝこんで何かを探していたが、やがて沢渡も他の学生達と同じように席をはずすと、押入れからとり出した白いものを私の前へぶらさげた。

「あなたは今日これを着るのよ」

「え？」

私が驚いてそれをひろげてみると、白いさらしの肌襦袢と、短い腰巻だった。

「此の間恵ちゃんのお母さんが一日泊りに来て、それを着て浜へ行つたんですって。夏ちゃん、今日はミスHなんて偉張らせないわよそれ着て浜へ行くのよ」

「これを？」

私はあまりのことにすぐには言われた通り着かえることも出来なかった。

「私のいうこときくつて約束ですもの。厭だつて言つても、みんなで押さえつけて着せちやうわよ。そうしたらみんなに裸のお乳まで見られなければならないわよ」

どんなに仲がよくても、女友達というものはお互いの底に競争意識を秘めているものらしい。和服を着せたら私よりはるかに美しい弘子だった、海水着姿では私の方に分がありそうな体格なのだ。

私は弘子が沢渡の前で美しく見られたい気持が何となくあわれだった。それにしても、半襦



袢に腰巻きなどという姿で浜へ来るのは、よほどお婆さんか、海水着の持ち合せのない中年のおかみさんかに限られていた。私はしかし賭に負けたのだし、前言をとり消して、弘子にあやまるのも業腹だった。

私はパンツ一つになつて、襦袢を着、上から腰巻をしめた。「さあ、これ被りなさい」

弘子が出したのは経木で出来たつばの広い海岸帽だった。

私が素直にそれを被ると、弘子は帽子の上から頬かぶりさせるように手拭をかけて、私のあごの下へ結んだ。私は編笠をかぶされて曳かれていく囚人のような姿になった。弘子は自分は流行色の水着に着かえると

「出来たわよ」

と、外へ声をかけた。

私は自分のみじめな姿を男達に見られると思ういつもの強気もどこへやら、首うなだれてしまった。

それから浜までの白い砂の道を、私は裸足で縄こそ打たれていなければ、男達の間にはさまつて罪人のように歩いて行かなければならなかった。

浜へ出ると、男達は砂の上に穴を掘り出した。

「夏ちゃんを埋めるのよ。さあ夏ちゃん自分で掘らなければだめよ」

弘子はいふのだ。

夏の海辺で、たわむれに砂の中へ埋めたり、埋められたりす

ることはある。しかし、そんな風にはじめから罪人のように扱われて、自分を埋める穴を掘れと言われて、どうしてそれが出るだろう。

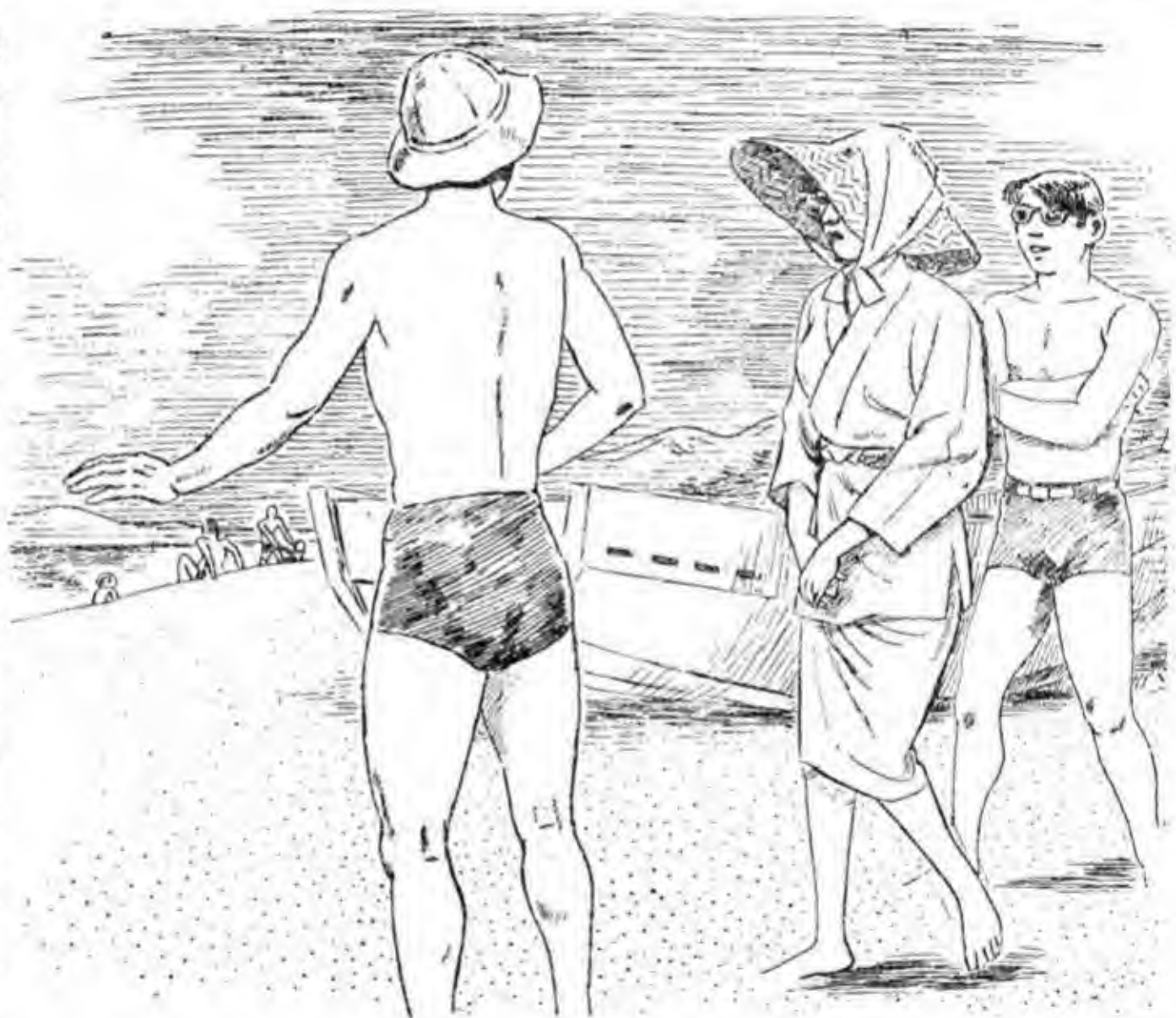
「もう冗談はやめてよ」

私は言った。

「だめ、今日は私のいうことを聞くつて約束ですもの、さあ掘るのよ」

私は仕方なく犬のような恰好で砂を掘った。毛織物の海水着と違つて、木綿の褌袴や腰巻はしめつた砂がつくと汚れて、よけいみすばらしくなつた。

夏の陽のさん／＼と輝く太陽の下で、衆人環視の中で羞しめを受けている自分を思うと、いっせ泣き言を言わずに、みんなとたわむれるように穴を掘りつゝけなければ、よけい人目に立つことに気がついた。私は喜んで羞しめを受けなければならぬようにされているのだ。へたにさわげばよけい恥しいことになりそうだった。



私は爪の間に砂を一杯にして引かくように穴を掘った。

やがて私の半身が入る穴が出来ると、私はそこへ自分の体を入れなければならなかつた。

まわりから弘子や男達が面白がつて砂をかける。私の下半身はだん／＼固定されて、わきの下につけた手も共に動かなくなつてしまつた。

砂ぐらいと、半分はばかにしていた私も、その意外にきつちり自分を動けなくしてしまつたのに驚いたが、もうどうしようもなかつた。

「暑いでしょう？ お水かけてあげるわ」

弘子は意地悪く言うのと、私にかぶせてあつた帽子をとつて、それへ海の水をくんで来て、ざあつとあけた。

いくら真夏の太陽の下でも、海水を頭からかけられてはぶるつとふるえる程冷たく感じる。しかし、それも三杯四杯となれば、もう平気だつた。たゞ、薄い木綿は肌をびつたり吸いついてしまつ

て、裸体と同じように体の線をあらわにみせるのが、反つて裸体より恥しかった。

「真珠から生れたヴィナスに、生れ故郷の美酒を捧げましょう」

弘子はわざとやうやうやく貝殻に海水をくんできて、私にのめという。

私は聞えないふりで唇をかたくとじていた。その辺の海の水は溝の水に変わらない程汚れていた。まして渚近くでは、海を共同便所だと思つてゐる人達が多いのだ。何が浮いてゐるかわかつたものではない。

けれど私がどんなに顔を振つて拒んでも体は手足を縛られているのと同じように自由にならないのだ。無理にのどへ流しこまれ、私は厭でも、その塩からい水をのみこまなければならなかつた。

水は気管に入つて、私は苦しくむせた。両眼からポロポロ涙が流れて来た。

浜には他に人もゐる。その人達が面白そうに私を見れば、私はわざとふざけてやつてゐるような顔をしなければならなかつた。悲しいピエロだつた。どんなに苦しくても、助けを求めるわけにはいかないのだ。助けを求められる性質のものではない。しかし無理やりのまされる海水の苦しさは、それを笑つてみせなければならなかつたとで倍加こそすれ、たまらなかつた。

沢渡は渚に打ちよせられる小笹をとつてきて、私のまわりに打立てまわした。私はまるで見世物のように一ときわ目立たせられてしまつたのだ。その上調子にのつた彼は

「親の伊果が子にむくい……………」

というやうな見世物の口上めいたことを言い出した。

「花ちゃんや、花ちゃんや」

とよぶのである。

「あいあいつて答えるのよ」

弘子がはたから私を促した。

私はだまつていた。あまりひどいと唇をかんだ。

思わず恨めしそうな目で沢渡を見ると、沢渡の目が冷たく微笑み返した。私の今まで見たことのないやうな目の色だつた。私の体の奥でゴクンと唾をのむやうな感じがした。

「もうかんにんして」

私はその眼に対して、何か言わなければいけないやうな気がした。「私をもつとめちやめちやにして」

もしかしたら、そう訴える方が私の本当の心の声だつたのかもしれない。

しかし、私の口をついて出た言葉は

「もうかんにんして」

という言葉だつたのだ。そして沢渡の眼は「もつといじめて！」と言われるより「もうかんにんして！」と言われるのを、無理に苛めたがつてゐる眼だつたのだ。

言葉がどんなに反対のことを言つていても、お互の思いが瞳の色で通じ合つた時、そこに恋が生れるのではないだろうか。世の中に男と女は数多い。その数知れぬ男性の中から、ひとりの異性に好意を持つのは古い言葉でいえば縁というものだろうし、その縁の生じるのは、同じ言葉がわかるといふことではないだろうか。

しかしたま／＼恋の途中でいくら言葉は同じ日本語を使つていても、一つもそれが通じ合わない時がある。国の違ふ人のような気の

する時がある。そうなるともうその恋は駄目になる。たゞそんな時言葉のいらぬ世界がもう一つあつて、体と体で通じ合わないものでもないが……。

とに角、その時沢渡の瞳と、私の瞳は何か空間で語り合つたのだ。しかしそれは文章に書けば何行かつゝいえるが、現実はとても短い瞬間だつたから。

「もうやめろよ」

と、沢渡の友達が言い出した時、もう、私と沢渡の目はその友達の方へ向いていた。

「あんまり冗談がすぎでは悪いよ」

その人は言つた。

「悪いことないわ、約束ですもの」

弘子が口を入れた。

「だつて……」

「じゃあ小松、きさま代るか」

沢渡が言つた。

「そうよ、小松さん、今度はあんたを埋めてあげるわ」

弘子はいうと、その方がなお面白いとでもいうように、もう私のまわりの砂をくずし出した。

私は動けるように砂をひろげられたのに、なお、そんな姿をしていることは出来なかつた。

沢渡と体の奥で語り合つた瞳の手前、私はよけい自分のマゾヒズムを弘子にかくしたかつた。

私ははね出すように砂の穴から出た。

それに本当の所、私は私の思い通り苛められたにかゝわらず、そ

れが私にとつて、しびれるような喜びには感じられなかつたのだ。たゞ恥しかつた。何かそうして苛められることを安心して喜びと感ずるには抵抗があつた。その抵抗が恥しさという形になるらしかつた。

私は逃げるようにひとりでもと来た道を引き返した。そして、沢渡達の借りてゐる部屋へ帰ると、襦袢をぬいで海水着に着かえ直して浜へ戻つた。

しかし、私の目に、肩まで砂に埋められた小松の姿が入つた時、私はギクツとした。私の体の奥へひゞくものがあつたからだ。

いつたい私はマゾヒストではないのだろうか。サジストなのだろうか。

弓なりに、首と足の先を出して埋つてゐる小松のまわりに無数の蟹が這つてゐた。そして小松の頭には、死んだ大きな水母が気味悪くかぶせてあつた。

沢渡達は、小さな蟹が小松の足の甲から足の裏へと、デヤリ／＼とつたわつていくように、何度も手をかして動かしてゐた。小松がもかくと砂の山がくづれそうになるのか、弘子は小松の腹のあたりの砂の上へ、どしんと尻をのせて座つてゐた。

私はその様子を見ると、電氣を通じられたように、血がブルブルンと音をたて、不規則に流れるような気がして来た。そのくせ私は皆に手をかして、小松を苛めたいとは思わないのである。たゞ苛められている様子を見ていたのだ。そうすれば、私はあのたまらないような恥しさを感じずに、自分を小松におきかえて、異常な感情の刺戟を喜びとさえ感じていられるのだ。

身動きの出来ない小松の顔や肩へ蟹が這つていくのを見てみると

自分の顔や肩がむず痒いような気さえしてくるのだ。
その時ふと、小松の瞳が私の視線をからめるようにとらえた。さ
つき私が沢渡の視線とぶつかり合わせた瞳と、頂度同じように。

「ああ！」
と、私は思わず心で叫んだ。

(以下次号)



長煙管へのノスタルジア

—— 煙管責への憧憬 ——

西 貞 雄

それは一本の朱羅宇の長煙管でした。亡き

母が淋しく世を去る迄毎日愛用して止まなかつたものです。小さい時から毎日、母と二人きりの生活をしていた私にとって、食後の一服を心から楽しんでゐる母の様子が頭にこびりついていて、今でも忘れることができません。

小学生上級の頃ふとした事から夜店の本屋で豆本を見ていると継子責めの表紙が目についたのです。可憐な子供を柱に縛りつけて継母が長煙管を振り上げている情景……それは虐められている子供に対する同情

心より、むしろ煙管を振り上げている継母の顔に官能的なものを感じました。

続いて美しい花魁が客に喫いつけて差し出している朱羅宇の長煙管の絵にたまらない甘美的なものを感じました。若い美しい女と朱羅宇の長煙管の取合せは、私に憑かれたような魅力を与えてしまつたのです。それからというものはこうした情景のたんまり見られる浮世絵、芝居、時代映画を求めて止まない私でした。その内に私の官能は次第にこの長煙管が責めの道具として随所に使用される情景に心を惹かれ、何時しか一種の責めの愛好者にと、傾いていつたのです。芝居の「俠客春雨傘」に於ける花魁同志の長煙管折檻が何と云つても、中学時代の私を惹きつけ、魅惑しつづけた最大のものです。

それから映画では先般封切られた土師清二原作の「砂絵呪縛」に於ける煙管責めです。之も先般のものは極めて興味のない短い





一瞬でしたが、無声映画のそれは私に歓喜の最大限度を味わさして呉れました。泉春子が長煙管をゆつくり楽しみつゝ縁側でくゆらした後、森静子の指の間に挟んでぐいぐいと締めつける、あの官能的なシーンには思わず心を弾ませてしまったものです。

私が大学へ進み、最初に煙草をやり出した時も長煙管を使いました。充分味も判らないのに刻みをつめ乍ら色々と煙管責めの幻想に耽りつゝ一人楽しんでゐる事もあつたのです。結婚してから私は先ず妻に、煙管による喫煙をすゝめましたが、どうしても煙草に親しまないので失望しました。しかし高島屋で東京の有名な村田の朱羅字の長煙管——それは桐箱入りの豪華品で、十数年前で確か一円

五十銭位のものだつたと思います——を求めた時は妻も時々気が向いた時は、それを使つて面白半分にかかしていましたが、どうしても煙草のうまさ判らずに済んでしまいました。その内この煙管は私達の夜の営み々の必須用具になつたのです。指責めに使つたり、鼻の穴に空気を吹き込んだり、色々と応用しました。私の感化で妻もすつかり責めの喜びを知る様になつたのです。

私達は互に交互に責め合うのです。朱羅字の長煙管は私達夫婦のマスコットであり、又愛情へのきづなと云つても過言ではありません。そしてこの一本の長煙管への私のノスタルジアは単に責めに対するものゝみでなく、若く美しい女性が、それを使つて楽しく喫煙する情景にも及んでいます。殊に明治、徳川時代の町娘、花魁、芸者達が如何に之を受用していたかを幾多の文献で見ると、今日の女性が何の情味も無い殺風景な巻煙草をふかす姿は徒らに嫌悪を覚えるのみです。

平山芦江氏の「吉原草紙」で明治時代の花魁が如何に上手に長煙管を使いこなしたかをよく説明されていますが、今日の時代劇女優ではどうでしょうか？ 私の見た所では山田

五十鈴位なものです。更に「責め」にこの長煙管を使つた写真の見当らない事も私の大きな不満なのです。私と同感の方はいないでしょうか？ 諸兄弟の中に「煙管責め」に対して共鳴される方がありましたら、どうぞ御文通下さる様願います。

終りに私の現在行つてゐる煙草責めを御紹介します。

先ず全裸で妻を縛り、猿ぐつわをした後、普通の巻煙草に火をつけて鼻の両穴と両耳に差し込みます。段々と煙が吸い込まれてゆくにつれ、咽せてもたえ始めた時、縛つた手の指の間に長煙管を挿入して強からず、ゆるからずの程度でしめつけるのです。責めの歓びを知る者としては恐らく最大の苦痛と歓喜が味える事と信じています。狭い私の家ではこうした事も充分ゆつくりと出来ないのでホテルを利用して居ります。

私達は月に一回か二回の愉楽の日を心ゆく迄味わふ、午前中はゆつくり時代劇の映画でも見て、その足でホテルへ行くのです。勿論愛用の長煙管は、必ず忘れずに持つてゆきます。そしてお互いに責めあうのです。愛情のきづなとしての長煙管、これは本当に私達夫婦のマスコットなのです。

女性切腹断想



田谷敬生

昨年を通じての本誌の大きな特色の一つとして三月号以来中康氏の健筆により、切腹特

に女性切腹が責めその他の企画と並んで重要な課題に入つたことが挙げられる。これは類誌に例を見ない異彩として今年も本誌を縦横に色どることであろう。

筆者は昨年中康氏の研究の一助にもと、女性切腹の実見例とそれを基盤とする二、三の考察を公表した。以後今日に至るまで熱心な読者の方から種々の御批判と共に、更に若干例の貴重な女性切腹例の御送付に接した。そこで筆者は、以上今日までに集まつた全例を綜合して、再び女性切腹の医学面に随想的な意見を呈示してみたいと思う。

筆者が今日までに得た女性切腹例は前に発表したものを含めて一七例で、総て切腹の状況がかなり詳しく判明したものばかりである。まず全例を年令的に見ると、十代が五例二十代が七例、三十代が四例、四十代一例で総数の約七〇%を二十代までの女性が占めている。先に中康氏が指摘されたように、女性切腹において特に性感覚との関連が重要視されることは当然想像できるが、上記の数字を見ても明かに女性切腹が性的發育の上昇期乃至成熟期に大多数を占めていることがわかる。しかしさればとて現実に女性切腹の本態を性的意識の転化といふ切つてしまうのは、稍危険であるような気がする。なるほど本誌に貴重な告白の幾つかを投稿された読者の方々については「切腹願望」が性と不離の関係にあることが明瞭に看取されよう。けれども

同時に中康氏もいわれるように、筆者は、切腹願望者≡切腹者、では有得ないと信ずる。

「性」という要素は勿論女性切腹の一因子である点に間違いはないとしても、それだけではなぞ日本女性に特に切腹者があるかという疑問の答にはなり難いであろう。女性切腹が現実に行われるには、本人の側の、性的状態を含めた要因Xに、環境因子（例えば戦争の際の生命の危険、女性の純潔の危機、敗北感等々）が渾然一体となることが必要なのである。このXは特に日本女性に特有なものでなくてはならないが、これ以上は問外漢である筆者の手に負えるものではない。中康氏の更に詳細な分析研究に期待しておこう。

昨年にもちよつと触れたように、女性の切腹時の服装はかなり問題になるべき性質のものである。その際、女性特に若年女性にとつて腹部を露出することはかなり羞恥を伴うものではあるが、単に襟を寛げて上腹部のみを露わすような姑息な方法では、切腹を完全に行うことは難しく、腹部のかなりの部分を露出し、腕の動きを自由にするため双肌脱ぎにならねばなるまいことを筆者はのべておいた。資料について服装を見るに、襟を寛げ又は衣服の下から割腹したもの五例、双肌脱ぎ

のもの六例、下着のみで裸体に近いもの五例

全裸一例となり、一七例中一二例は双肌脱ぎ

以上に裸体に近い状態であつた。特に肉体の

露出が苦痛であるはずの十代の五例がすべて

全裸又は裸体に近い状態であつたことは、筆

者の予想も尚及ばざる感があつた。古来日本

婦人は一般に肌を露わすことを忌み、特に西

洋婦人と異なり胸よりも腹部を露わすことを

禁じられた結果、女性の腹部は全く秘密の中

に閉ざされた感があつた。そのようなタブーに

反撥し、切腹という妥当な理由の下に豊満な

腹部を露出することは切腹者の露出的傾向を

充足すると共に、絶大なる勇気を誇示する手

段にもなるであろう。昔とちがい、衆人環視

の中で切腹するということの有得ない現代で

は一層裸体になり易いとも考えられる。いず

れにしても切腹は「従来の日本婦人に特有な

腹部露出傾向」を満足させる唯一の手段であ

るように思われる。一部にはこのような傾向

は興奮の極、狂燥状態から生れたものという

考もある。しかしこれには一、二の反証が

ある。A女性ほとんど下着もすり落るほどの

半裸で切腹したが、局部はT字帯で緊縛し

てあつた。この女性は局部に若干の形態異常

があつたという。他の姉妹は二人揃つて同様

の半裸となり、声を合せて十文字に掻切つて

いる。これらは少くとも始めからその状態を

予期したものと見るべきであろう。

次に問題になるのは切腹の様相である。女

性にあつては生理的にも男性に比し切腹が一

段と困難であることは前にものべた通りで

あるが、切腹の型についてみると、一文字腹

一二例、十文字腹五例でやはり一文字腹が多

数を占めているが、十代の女性五例中三例ま

で十文字腹（一例はカギ型）であるのが目に

つく。又切創の深さについてみると、一文字

腹一二例中六例、十文字腹五例中三例は腸管

が溢出し、全体として五三%、三十歳以下で

は一二例中八例（六七%）までが腸のあふれ

る程深く掻切つている。これを三十歳以上五

例中一例（二〇%）に比べると特に画然たる

差が認められる。由來腹壁を腸管の溢出した

い七、八分の深さに一定して掻切することは極

めて困難なことであり、余程冷静でしかも絶

大な氣力がない限り行い得ない筈である。常

識的にも浅すぎて物笑いの種になるよりは、

思い切つて深く切るとするのが理の当然であ

り、以上の点から筆者は先にも腸管の溢出す

るのがむしろ自然の形式なるべしと推論した

のであるが、どうやらこの推論は誤つていな

いようである。それにしてもかよい若い若年女性が男も及ばぬ壮絶な割腹をとげていることは、筆者にとつてもかなり意外なことであつた。

ところで素人目には腸管が溢出する程深く切れば、そうでない場合に比べてはるかに早く死ぬことができるようであるが、腹壁を腹腔に達せぬ程度に切つたのと、腸管が露出した場合とでは、実は死に至る経過にはほとんど差がないと思われるのである。問題を一文字腹に限つてみよう。前に拙著でも触れたように、刀が腹腔に入つたとしても多くの場合柔軟滑沢な腸管はそれ程切断されるものではなく結局出血は腹壁に限られることになる。かりに五五kgの健康成人女性で体重の一三分の一を血量とすると、約四・二リットルとなる。失血のためのみで死亡するには控え目に見てもその四分の一乃至三分の一が失われなければならぬから、一・〇——一・五リットルの出血が必要になる。これは腹壁の細小な血管からは殆ど不可能なことである。その上ある程度の出血が続くと、末稍血管の血圧が減少し血管は縮少し、血液の凝固のため自然に止血状態になる。この現象は腸管の露出せると否とには無関係である。但し腸管の露出

していない切創は自然治癒の可能性があるが腸管が溢出していれば、当然急性腹膜炎を起す危険性があり、勿論自然治癒は望めない。

何れにしても致命傷を加えない限り切腹による死亡経過はきわめて長いと知るべきである。しかしこれは一面から見ると、切腹者の精神力により切腹の経過が如何様にも左右され得るという特長をあたえることになる。

青酸死にしても縊死にしても、又比較的意識の明瞭なストリキニン死にしても短時間で行動の自由を失うため、死様は万人共通である。それにひきかえ、切腹者は氣力さえ充分ならば思うまゝの状態で思い通り腹を割くことができる。これは切腹者の優越感を満足させる大きな要因であらう。腸管の溢出は、下腹部中央部では稍々細い表面の滑らかな桃色乃至薄桃色の小腸が塊状に溢出し、右脇深く引廻し又は膈上一寸程を切れば、太い皺の入つた黄褐色の大腸が一条になつてダラリと出る。勿論下腹部でも腸を握んで引出したりすれば後から大腸も溢出する。これは切腹図を画く場合、充分注意していただきたい点である。

話が脇道に外れるが、それなら急速な失血を起した場合どんな症状を呈するかについて

少し触れてみよう。犬の全血量の二分の一乃至三分の一を一〇——一五分で脱血させると、まず血圧は著しく低下し皮膚乾燥、四肢冷却嗜眠、無氣力等の症状を呈するが、一——二時間後から体液が血管に流入して血圧は正常に戻り、一——二日後には血液成分の修復が始まる。このようないわゆる虚脱状態は、致命傷を与えるまで凄愴な苦悶を呈しむしる興奮状態にある切腹とは全く異なるものであり、切腹と失血死が縁遠いものであることが読者にもお解りのことゝ思う。若し夫切腹後失神せる例の如きは、当然異常興奮のための脳貧血状態と見做すべきであらう。切腹後入水しようとして腸管を露出したまゝ走つていて捕えられた男については前にも触れたが、其の後N氏は、腹十文字に掻切つた後十数歩を歩み垂れ下つた腸を切り棄てた女性についての資料を寄せられた。これを見ても筆者が上にのべた、割腹後に残されたある程度の行動の自由を充分認識していたとけるであらう。

こゝで十文字腹について少しくわしく考察してみよう。横一文字に掻切つて刀を抜き、鵝尾の高さに突込んで引下げる場合、肝臓の中央部は必ず一部裂断されかなりの出血を呈し、且つ自然止血は困難なため、そのみで

かなり速やかに死に至ることが考えられる。強烈な腹部打撲（例えば車との衝突）を受けた人が外傷はないのに貧血状になり腹部膨満して数時間で死亡することがあるが、これは肝臓、脾臓の裂断による内出血のためであることが多い。同じ十文字でも右脇から刀を引上げるカギ型の十文字では仮令肋骨に当るまで引上げたとしても肝臓を切る可能性は少く余程剛氣に刀を深く斜めに鳩尾まで切上げない限り正十文字程の惨烈さは期待できないであろう。女性の身で一文字に引廻した後更に十字に掻切することは至難であろうことを筆者は予想したが、十代の女性によつて何例か行なわれていることは特筆に値する。

話の序に切腹図絵、切腹写真についても一言附加えておこう。従来切腹図絵は真実性に乏しく、従つて迫力に欠けていることは前にも注意した通りである。がしかし、さればといつて筆者は真実の描写一辺倒を固持するものでもない。元々切腹図絵も美術の一つである以上、真実そのまゝ凄惨であるという丈では価値がない。特に女性切腹の場合、鮮血にまみれた中にも女性らしい肉体美、哀切感が感ぜられるものでなくてはならない。たゞいつまでも浮世絵流に、刀を突立てただけで

血が滝のように噴流していたり、腹一面唐紅になつていふような幼稚な手法は現代にそのまゝ用いるべきではないといふのである。従つて問題は、真実性と哀切美とをどの程度の割合に調和させるかという点にかゝつてくる。これは人によつて意見も違い、又同じ絵についても見る人により受ける感じにも差があつて仲々難かしい問題であらうが、筆者の見るところでは、二月号の「女腹切八景」の挿絵程度が最もよいように思われる。

總じて一般には哀切美六、真実性四といふところが、まず妥当な線であらう。しかし筆者としてはいつも大体同程度の線にそろえることなしに、時には哀切美八分、又或は真実性八分といった変つた感じのものも希望したい。将来もし「切腹図集」といふようなものができるとすれば、それはこうした多彩な図絵の集成であるべきである。切腹図に関連して筆者が中康氏から承つた所によると、愛川さんは一月号の賤機さんの絵について興味ある批判を下しておられる。この絵は女性が刀を腹から背中に通して前に倒れ伏しているものであるが、愛川さんはかゝる状態では外出血はごく少なく、又あれだけで急に死ぬる筈もないので、端座して伏した構図は変だといふのである。この考えは、筆者が上にのべ

たように全く正確なもので、たしかに構図そのものに無理があり、流血も多過ぎるようである。しかしそれだからといつて、あられない苦悶の姿を露呈しては絵の美しさが壊れてしまふ。やはり切腹図絵としては、一文字乃至十文字腹をまず完全に画くことを目標に麗筆を振られることを賤機さんに御願いと共に、愛川さんの細かい觀察に敬意を表しておく。

切腹写真となると問題はもつと面倒になる。この場合環境条件は絵に比してはるかに制約が多く、モデルの肉体そのものが画面の主体を占めてしまふ。現在までのところ女性特有の自慰感覚の充足が主体になつていふのである程度でもよいのかもしれないが、それではモデル自身の自己満足に終つてしまふ危険性もある。一応切腹写真と銘打つ以上、もう少し——前の流儀で行けば三分位は——真実性があつても………と思ふのは、筆者のみであらうか。この場合画面の平凡さは血紅の活用によつて救われる筈であり、筆者も前に愚見を編輯部にお送りしておいたので、いずれは次第に向上して行くものと信ずる。

終りに貴重な資料をお寄せ下さつた読者の方に重ねて厚く御礼申上げると共に、更に向後とも御協力あらんことを切望して止まない

或る同性愛者の告白

小 田 雅 春

私は自分の過去を充分に表現し得ない事に焦燥を感じ乍ら此の真実の告白の中から、私と同じ孤独に悩む同好の士に慰めを与える事が出来れば、又、私のこの記録も無意味ではないと自らを慰撫してペンを更に続けたいと思います。

昭和十二年七月七日、支那事変が起り、同日二十一日、補充兵として充員召集により入隊し、昭和十五年四月、除隊するまで約三年の軍隊生活が経りました。此の時期は苦しい乍ら、反面私にとつては最も恵まれた時代でもありました。それは同性ばかりの世界であり、常に私の心中で求めていた世界だったからです。

一口に戦友愛と言いますが、私の場合は矢張り同性愛以外の何ものでもなかつたのです。入隊当時は精神的にも、肉体的にも全く苦痛の連続で、他の事は何も考えられませんでした。したが、其の当時は、一月に一回位、新しい補充兵が召集されて入営して来ましたので、私等は入隊後三月もすると、所謂古兵になれたのです。

翌年の正月には私は星も三つになつて、内務班の教育係上等兵として初年兵を預る身になりました。明日は新兵が入営して来るといふ前の夜等は、期待と希望で眠れない思いで過したものです。当日新兵が中隊兵舎前に引率されて来て、人事係準尉によつて個名点呼により班別に分けられると、私は自分の班に

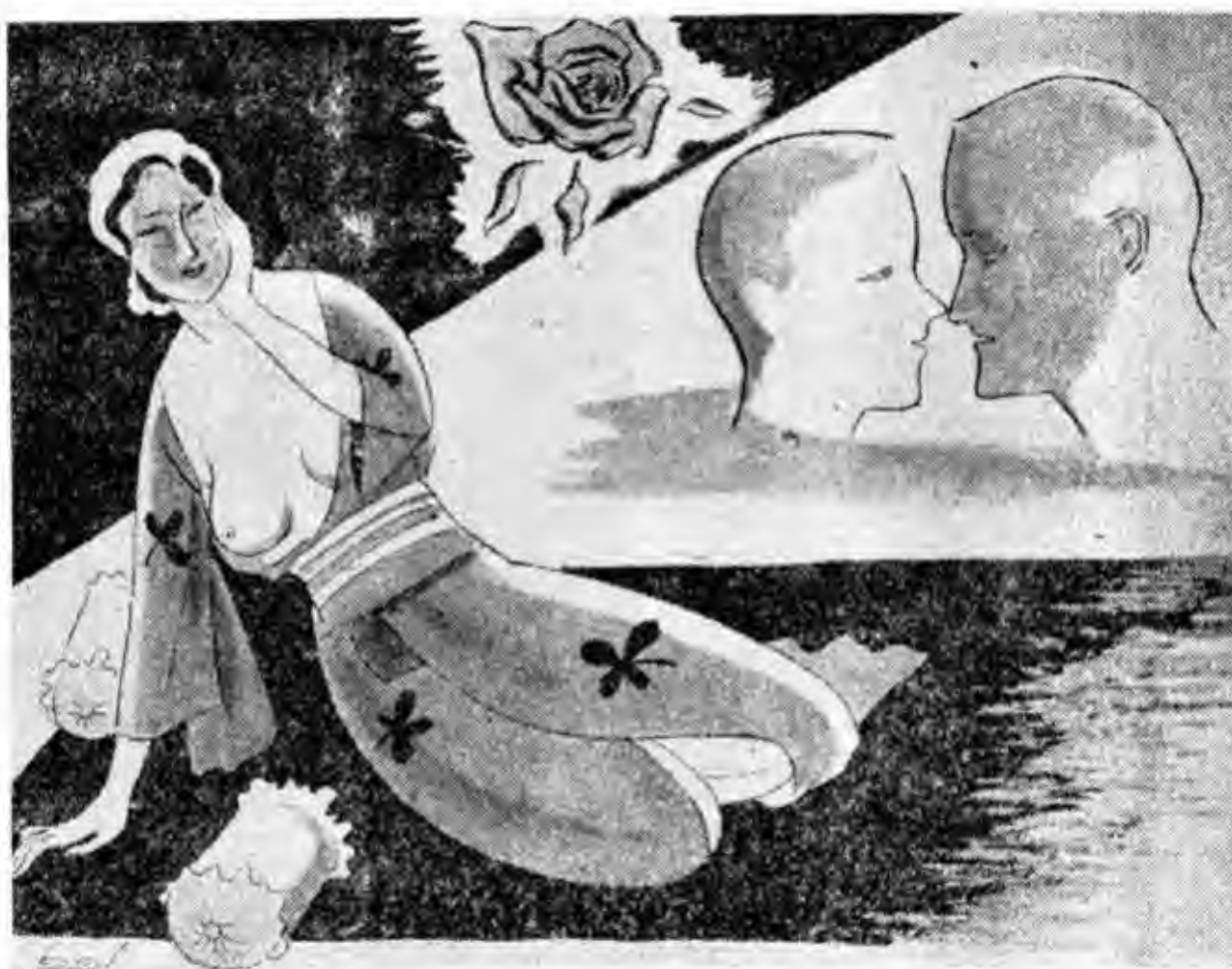
編入された、凡そ三十名の若さの満ち溢れた新兵の中から、自分の愛の対象を逸早く決めるのでした。班長から兵隊を渡されると、これを班内に入れて各自の寝台を決めてやるのですが、勿論先に目をとめた兵を自分の戦友として、私の隣りに置いた事はいふ迄もありません。

そして班内で着ていた私服を脱いで皆禪一本になつて了うのですが、其の逞しい裸体群を眺める事は、又人知れぬ私の喜びでありました。

こうして新兵は予め準備されている襦袢軍衣に着換え、今迄着ていた私服を風呂敷包みにして見送人のある者は見送人に渡し、そうでない者は小包にして郵便発送するのですが

今まで身に合っていた私服と違つて軍衣は本人の体格等は分らずに、唯適当に本人の寝台上的の整頓棚に置かれてあるのを着用する訳ですから指までかくれるような大きな上衣が当つたり短かい袴をはいたり、凡そ初年兵の恰好たるや喜劇そのものでした。こんな中にも私は自分の戦友となつた兵隊には中隊被服係に交渉して、其の身に合つたものを揃えてやるのでした。他の多くの新兵は私の戦友となつた兵隊を羨望の眼を以て眺めています。

私にとつて辛い事には、当時内務班は平時の約倍位の兵員を収容していたので、寝台と寝台との間には全く間隔はなくピツタリとくつつけられていたので、私は二人の毛布を一緒にして四つ折にしないで其のまゝ二つの寝台にかけて敷き、上に着る毛布も同じ様に拡げて床をとるようにしました。之は私だけでなく殆んどどの兵がそうしていたのです。私はこうして私の好きな兵と毎夜同床する事が出来ました。然しこうした兵も三ヶ月の教育期間を終



えると、殆んどが戦地へと送り出されて、教育係としての私はやむを得ず次々と戦友を変えねばならなかつたのです。此の時代の忘れ

られない戦友に下村金一という兵隊が居ました。之は私が最も愛し得た兵でした。彼は丸ぼちやの童顔で未だ少年の臭いの抜け切らない兵隊でしたが、私の戦友に選ばれた彼は全く私に対して献身的でした。私の身の廻りの洗濯、兵器の手入と、自分の事だけでも精一杯の新兵の身で私の身辺一切、手落なく内務班生活を過した彼は実に驚異的な働き振りでした。或る時は酔つて床の中で吐瀉した私を介抱し深夜の二時頃までまじろぎもしない彼に気付いてどんなに心の中で感謝した事でしょう。昨夜の吐瀉物で汚れた敷布を点呼前の早朝、洗面場で洗濯している彼を窓越しに見つけた時、いとおしさに胸もつぶれる思いでした。

然し彼も、三ヶ月の期間を終えろと戦地へと出て行きました。私に力があるなら、この儘残しておきたい彼でしたが、一上等兵では思いも及ばぬ事でした。彼を残す事が出来ないなら自分も同時に出征したいと嘆願しましたが、当時教育係其の他の必要人員しか残っていない

中隊からは一人の上等兵とはいえ他隊に転属させ出征させる事は許されませんでした。

こうして出征したまゝ、下村と私の関係は断たれて了い、彼の生死すら知り得ぬ別離となつてしまいました。

此の時代の今一つの私の楽しみは、消燈後の班内巡視です。昼間の演習にスツカリ疲れている新兵連は、消燈と同時に深い眠りにおちいるのですが、起床前の一時なぞそれはく／＼壮観でした。見渡す限りエレクトリシタ男性の象が、毛布をもち上げ、電柱の様に林立しているのです。

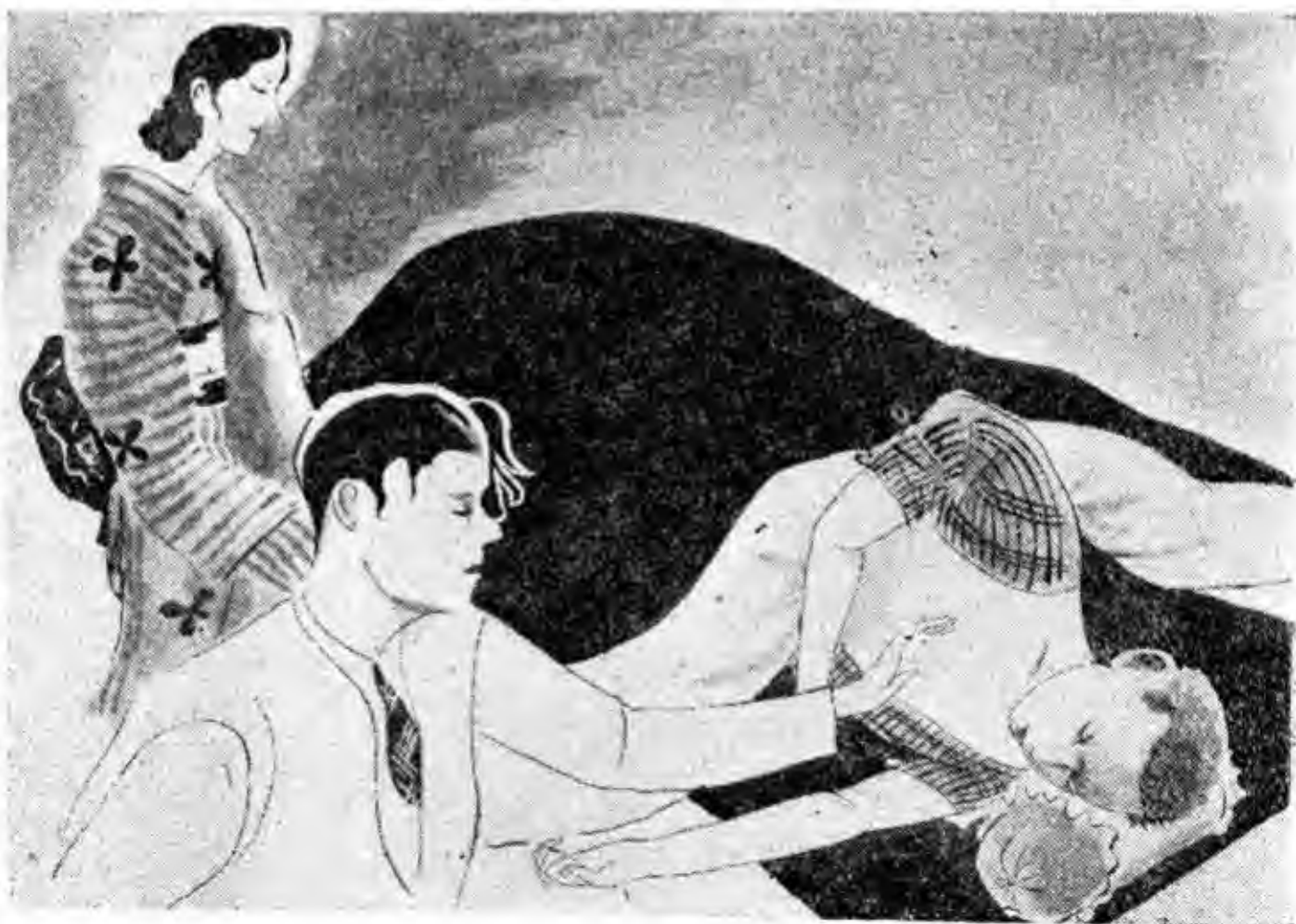
私が出征したのは、昭和十四年初頭で、上海の某部隊に転属になつたのですが、翌昭和十五年四月に召集解除により内地帰還するまでを世界の魔都と呼ばれる上海で過しました。当時上海は完全に日本の占領下であり、私達の生活は三日に一日の上海兵站司令部の警備勤務で、それは遊覧旅行でもしているような錯覚を覚える暢気な生活でした。

其の頃内務班長をしていた私は、矢張り戦友の対象として山路という新兵を可愛がつていたのですが、除隊後彼が早速妻帯した事によつて終止符を打つた形になりました。除隊後私はすぐ朝鮮に渡つたので彼と再会する機

会もありませんでしたが、終戦後郷里に引き揚げてから幾年振りかに山路を訪れ、あの頃の交渉を再現したいと胸を躍らせていたのですが、彼は私の心情を知っている筈なのに、其の夜、彼の妻が彼の言いつけだからと言つて、私の床に滑り込むようにして、はいつて来たのにはびつくりしました。私には異性の交渉は考えられもしませんでした。幾ら私と山路の仲だからとて、自分の妻を昔自分を愛してくれた班長へ最上の贈物として寄越した山路の気持も全く有難迷惑でした。そうして山路と同性が、満たされぬ思いで帰途についたのです。

昭和十五年五月二十四才の時召集解除となつた私は、朝鮮鉄道に就職、渡鮮して昭和二十年九月まで約五年間を朝鮮で過しましたが、此の時代は私の半生の中で最も罪惡意識に苦しんだ時期でありました。それは同性愛故に心にもない結婚を自

ら求めたという事実で、自分の熱愛する男を弟と呼べる身になり乍ら、結局は其の男の姉



を不幸の蔭に泣かしめ、弟の怨みを買ひ終戦と同時に全てを失ひ孤独の身を淋しく引揚げた私でした。

朝鮮鉄道に於ける私の任地は、北鮮平安北道満浦鎮の機関区でした。満浦鎮は平壤を起点とする満浦線の終点で満鮮国境鴨緑江岸の小さな町でした。私は此の機関区の庶務係として赴任したのです。赴任当初は此んな僻地に来てという不安もありましたが、鉄道寮に入り落ちついて見ると、之は又私の様な同性愛者には願つてもない環境でした。此の寮は二階建コの字型の六畳四十室を有する建物でここには十五、六才から二十二、三才位までの内地人の青少年約百名位が住んでいました。遠く故郷を後にして異郷の空の下、異人種の中に生活する私達の中に芽生えた同性愛は、それは又異状な迄に強烈な愛の結合でありました。

着任後間もなく、此の寮の寮長に任命された私は、或る日、寮員の中に愛らしい少年を発見して心臓の高鳴る思いをしました。私は早速其の少年当時十七才の末木安雄を自分の同室者に選びました。二人限りの部屋で思い切り彼を抱くと、彼は眼を細めてうつとりとした思いで私の腕の中にいる事に無上の幸福

を感じているようでした。私の愛は炎の様に燃え上つて、此の子の為なら此の刹那に死んでも良いとまで思う程幸福に酔いしれた毎日でした。私は彼を安雄と呼び彼は私を兄さんと呼び、お互いに愛を誓ひ合つたのです接吻の甘美な味を知つたのも安雄との生活に於てでした。

今こうしていてもあの頃の夢の様な生活が現実の事のようによみがえつて来ます。

私の勤務は朝出て夕方帰る常の勤務でしたが、機関車乗務員の安雄の出勤退庁は昼から出たり、夜になつて出たりして、帰るのも朝であつたり昼であつたり或は深夜だつたり毎日のように違ひました。安雄が昼からの勤務の時なぞ、朝早く出勤しなければならぬ私は、ユツクリと一人寝ている床の温みが離れ難く、前夜のまゝの名残りを惜しむ如く一分でも一秒でも余計床の中にいたい思いで、こういう時、私はよく遅刻しました。時間が迫つて名残り惜しいのを思い切つて床を出て行く私を安雄は薄眼を開けてニツコリ笑つて、「行つてらつしやい早く帰つてね」と云います。非番で一日安雄が寮にいる日など退庁時間も待ち切れず、飛ぶようにして帰ると部屋の中で私の帰りを待ち詫びている安雄にとび

ついて行くのでした。或は安雄が深夜に帰る時はたとえ其れが一時であろうと二時であろうと、私は起きて窓辺によつて汽笛の鳴るのを今か今かと待ち詫びるのです。「兄さん只今」深夜、寝もやらず待ち詫びる私に安雄はこう遠くから私に呼びかけて帰つて来るのでした。

こうした私と安雄の関係はやがて寮員の不満の声となり、羨望となり、安雄が何かと他の寮員から意地悪されるようになったので、私は意を決して官舎の貸付を受け、安雄を連れて寮を出ました。二人限りの常の夫婦生活に似た愛する者同志の自炊生活でした。それから誰は、かかる事のない二人の生活が如何に満ち足りたものであつたか御想像下さい。当時甘味品は町から消え、甘さに飢えていた頃でしたが、安雄は乗務先からそんなものを土産に買つて来て私を喜ばす事も忘れないのでした。

こうした幸福の中で、いつか私は精神的な面だけでなく、事実上も兄弟になりたいと思うようになりました。これがそも／＼私の失敗でした。

昭和十七年春安雄のたつての願ひでもあり私の故郷の両親も当時二十六才になつていた

私に適当な人があれば結婚するようにと折々の手紙に言つて来ていましたので、安雄の只一人の姉シヅと結婚、私達夫婦と弟安雄と三人の生活が初まりました。姉思いの安雄は私達の結婚と同時に自らは官舎を出て寮に入る事を申し出ましたが、其れは私の最も恐れる処だったので、経済的な理由を楯にあくまでも同居するよう申渡しました。

これから私の悲劇が始まるのです。結婚式当夜の所謂初夜に於ても夫婦の営みを求める妻に対して例の如く何等エレクトしないまま過した私です。其の後も雖も性^{せい}を出来る訳もなかつたのですが、安雄の寝息をうかつて妻は、二十一才の処女の身の性のもだえにたえ切れず毎夜のように夫婦のそれを求めてやまないのです。之は私にとつてはほんとに地獄の苦しみでした。

申し遅れましたが、結婚後も私は安雄が別室に寝る事を許さず、私を中にして両側に妻と安雄を休ましていました。私は妻の肉体の接触到嫌悪さえ覚えてひたすらに安雄の肉体を求めてやまないのでした。以前程の様には何もなかつたが安雄は別に私に反抗しようとはしませんでした。昭和十八年正月安雄が適令となり平壤の部隊に入營する迄、処女のま

ゝの妻と私と安雄との奇怪な生活は続きました。

愈々入營の爲に安雄が町を發つ日、私は附添人として平壤迄送る爲に同車し窓際の席を向い合つてとりました。愈々明日から暫くは或は永久に会えなくなるかも知れないと思うと唯悲しみに我知らず泣けて来るのをどうする事も出来ませんでした。走る列車の中で染しかつた安雄との生活が走馬燈のように頭の中に浮んで来るのです。官舎の風呂の中で真つ裸の安雄と私は妻のいない二人限りの一時を過した想い出にたえ切れなくなつた私は隣席の人もはゞからず向い合つた安雄の膝の上にオーバーをひろげ、如何にも眠い風して丁度安雄の服の袖口に顔を近づけ頭から肩まで先程安雄の膝の上にひろげたオーバーの中にかくしたのです。安雄は其れが何を意味するか、ソツト私の肩に静かに両手をのせて隣席の者からを感じかねないようにしてくれるのでした。

完雄は其の翌日入營しましたが、それから間もなく秘密裡に彼の部隊は北滿方面に移動したのでした。

昭和十八年二月異例の昇進により私は任官すると同時に、平壤機関区事務助役を拝命し

て赴任しました。安雄と別れた私の生活は空虚なものでした。妻はもうあきらめ切つていたのかそうした私に人形妻として仕えてくれています。私はどんなにか良心的に苦しみ悩んだ事でしよう。妻の氣持を察して私以外の男と交際を結んでも良い、と洩らしはしたが、妻はあくまでも私のそうした時を待つと云うのでした。思えば可愛相な妻でした。出征した安雄の爲にも此の妻を幸福にしてやらねばならないと思ひ努力しましたが、全てが無駄でした。医師にも相談しましたがそれは訓話的なものであり、何の効果も得られませんでした。こうした生活もいつしか二年過ぎて、昭和二十年四月大東亞戦も漸く深刻を極める頃、私はいつ自分に召集がかかるかも知れない事を理由に妻を内地へ独り帰したのでした。そして幾許もなく終戦に依り同年九月丸裸になつて身体一本で郷里へ引き揚げた私でした。

二十年末、復員した安雄は姉から私との生活の全てを打ち明けられ、涙をのんで妻の正式離縁を私に申し込んで来ました。こうしてより深い同性愛を求めて兄弟とまでなつた私と安雄の仲も、これを機会に一切を清算して別れねばならぬ事になつたのも、私の浅はかな思慮が生んだ当然の帰結だつたのでしよう

あるマゾヒストの手帖から

沼 正 三

第五十 美姫の水浴

酒風呂の規模を大きくすれば酒池肉林の「酒池」になる。史記殷本紀に「以酒為池、懸肉為林」いうのは、いわゆる長夜の飲をなすための準備の大掛りなことをいつたものだが「酒のプール」という以上、その中に美人が泳ぐことは当然だろう。

温泉水滑洗凝脂」と玄宗が貴妃に浴を賜うた華清池の光景を詩人は歌っている。古来東西とも専制君主は寵妃の水浴を喜んだようだ。酒池ではなかったらしいが、美女の浴するプールの水を飲む話が西洋にもある。

西洋史を学んだ人なら英王ヘンリー八世の妃アン・ボリーンの名を知っているだろう。有名なエリザベス女王の生母である。フランス読みではアンヌ・ド・ボルアン。フランスの宮廷に育つて、はじめ英王妃アラゴンのカザリンの腰元になつたが、王の寵を得て、法

王と争つてまでカザリンと離婚させ、第二の妃となつた。後に貞操を疑われて殺され、その後何人も王妃を取替える王の乱行が始まるわけであるが、寵の衰える迄は、専横驕恣な振舞が多かつた。英領カレーの離宮で彼女の浴した水を廷臣が飲んだというのも、彼等の彼女に対する阿諛の表現として理解すべきだろう。

私が多少の疑問を存した書方をするのは、案外ここにフェティシズムがあつたのではないかとも思えるからである。日本ではつい最近までは、本願寺の門跡の浴後の湯は「御垢」とか称して地方の信徒が喜んで買ったものだときく。イギリスにはそんな迷信はないと思うかも知れないが、フレイザーの「魔術」によると、るいれきは「王の病」 King's Evil といわれて、英国王の手が触れば治癒すると信じられ、チャールズ二世などは一代の中に一万人もその手を触れてなおしたという。これが十七世紀の話である。ましてアンは十六世紀初頭の人だ。王

や王妃は文字通り神聖^{ホーリー}だつた。その神聖な肉体にふれたものはすべてフエティシユたり得たのである。然しこの場合の解釈としては、これは恐らく思い過しである。

もう一つ、これも割合著名であるが、十四世紀のカスチリア・レオン国王ペドロ。弟を殺して「残忍王」の名を得た人だが、スペインはセビリアの御城^{アルカサル}の中庭なる大プールで、寵妃マリア・デ・パデリアに浴を賜つた。この時群臣を顧みて彼女の泳ぎ廻るプールの水を飲ましためたという。これはフランスのツールーズの博物館に、この光景を描いた画が残っているそうである。

第五十一 ポツペアの

ミルク風呂で

前項に関連して、こんな標題を選んで見た。牛乳風呂^{ミルク}という奴、今は東京の名物となつた例の東京温泉トルコ風呂以来、珍らしがられなくなつたが、仰山な呼称に拘らず、ミル



クをけちけちした稀薄なものが多い(大体市販の飲用牛乳自体が、随分うすくなつてゐることは、牧場で乳牛の乳房から出たのをすぐ飲んでみたことのある人にはすぐ感ぜられることだが。)

西洋では、日本の江戸時代のように牛を嫌うことはなかつたから、ミルクを活用することは古くから進んでいたし、美容法としてのミルク風呂は古代からあつた。ハリウツドの女優は四十近くなるとからミルク風呂を愛用して皮膚の衰えを防ぐひとが多いときいているし、事実ミルクを浴槽に注がせて浸つてゐる女優の写真、「ビクチュア」誌「ルツク」誌などで見たことがある。

キヤパネの「世界浴場史」(訳本)によると、ミルク風呂については、特にポツペア・サピナと、チヤンリス夫人の二人を特筆している。尤も右にいったようにミルクそのものが日常品だからミルク風呂自体は或る程度の奢侈的生活には当然伴つたと考えられるので、ポツペアをその創

案者というわけにはゆくまい。

ポツペア、サピナは有名なローマ皇帝ネロの妃である。(ネロにはオクタヴィアという皇后があつたのであるが、ポツペアはネロに彼女を殺させた。鬼の女房に鬼神といった一對であつた。) アグリッピナ及びメツサリナと並び、当時の代表的な淫虐女性であるが、その豪奢においても、さしも奢侈になれたローマ人の間に評判だつたのであつて、ミルク風呂云々はもとより無理からぬことである。入浴の時には数十人の奴隷を従え、その一人一人が、専門の勤めと技術とを持つていた。孫引であるが、ミラボーの「エロチカ・ビブリオン」によると、塗油係、香油擦込係、皮膚摩擦係、按摩係、第一除毛係、第二除毛係、第三除毛係……といった工合である。除毛係の色々は、勿論身体の中の部分の毛を除くかによる区別である。

大体日本という国は支那や欧州に比べてみづちいが、その支那や欧州でも、近代は古代に比べるとみづちいこと甚だしい。立憲君主の一番裕福なものでも、古代ペルシヤの名もない太守や、ローマの地方総督ほどの生活すらしていない。」とは、クレオパトラの宴宴を描写しようとしたゴーチエの嘆息である。みづちい現代の中でもみづちい日本に生れた私達の不幸を嘆きたくなるが、空想の中でなら、いくらでも古代の豪華生活に参与することができる。空想しようにもよりどころがないという方は、ポツペアやネロの出て来るシエンキヴィツチの「クオ・ヴァデイス」や、その中の重要人物ベトロニウスの作で、この頃やつと全訳の出たラテン文学の奇蹟「サチュリコン」を読めば、日本語から文でもこの時代の空気を窺うことはできる。英語の読める人は、スエトニウスの「十二皇帝

伝」の英訳本を読めば尚良い。あとは私のよくいう想像力の問題である。私など毎日のように古代世界に遊んでいる。

いや古代に遊ぶとは語弊があるかも知れない。古代世界には遊ぶことしか知らぬ階級と、遊ぶことの許されぬ階級との二階級があつた。そして、マゾヒストたる私が想像の翼を借つて飛び廻るのは、いつもこの後の階級に属する者達の世界なのだ。奴隷になるのだ。脱線をやめてポツペアの入浴に戻ろう。私はいつか彼女の除毛係となつて、浴室の一隅に控えている。

大理石の浴槽の中には香水を交えたミルクがなみなみとたたえられている。風呂から上つて嬌として力無き彼女の傍に馳せよつた抱上係は大きなタオルで彼女を包むと、傍の褥の上に運ぶ。白鳥の装いをした拭取係が、練絹のような肌を拭つてゆく。香油を塗る奴隷擦込む奴隷、指先に自信のある按摩係は縦横に指を走らせること琴をかなでるにも似て、彼女の肉体を快適な弛緩にまで、喜ばせつつ導いてゆく。その間に私達三人の除毛係も担当部位を綺麗に剃つてしまわねばならぬ。仰向けに横つたまゝ何の恥らいもなく両脚を投げ出して南の彼女の神々しい美しさ。然し私はそれを一人前の男として鑑賞することは許されない。女の毛を剃る役目の奴隷として私は育てられて来たのだ。顔を近づけた私の目の前にこんなりと盛り上つた美しい丘、そこが私の生活の、生き甲斐の、すべてなのだ。そこを快よく剃り上げて彼女に奉仕すること、ただそれだけのために私は生れて来たのだ。ポツペアに侍る数十人の奴隷がすべてそうやつて彼女の生を快適にするために、その一部分ずつを自己の生の目的として勤勞しているのだ。古代の奴隷制度とは何とマゾヒスティックなものであるか！

アツ。彼女がビクリと身動きしたため刺刃の先が僅かばかり彼女の肌を傷けた。

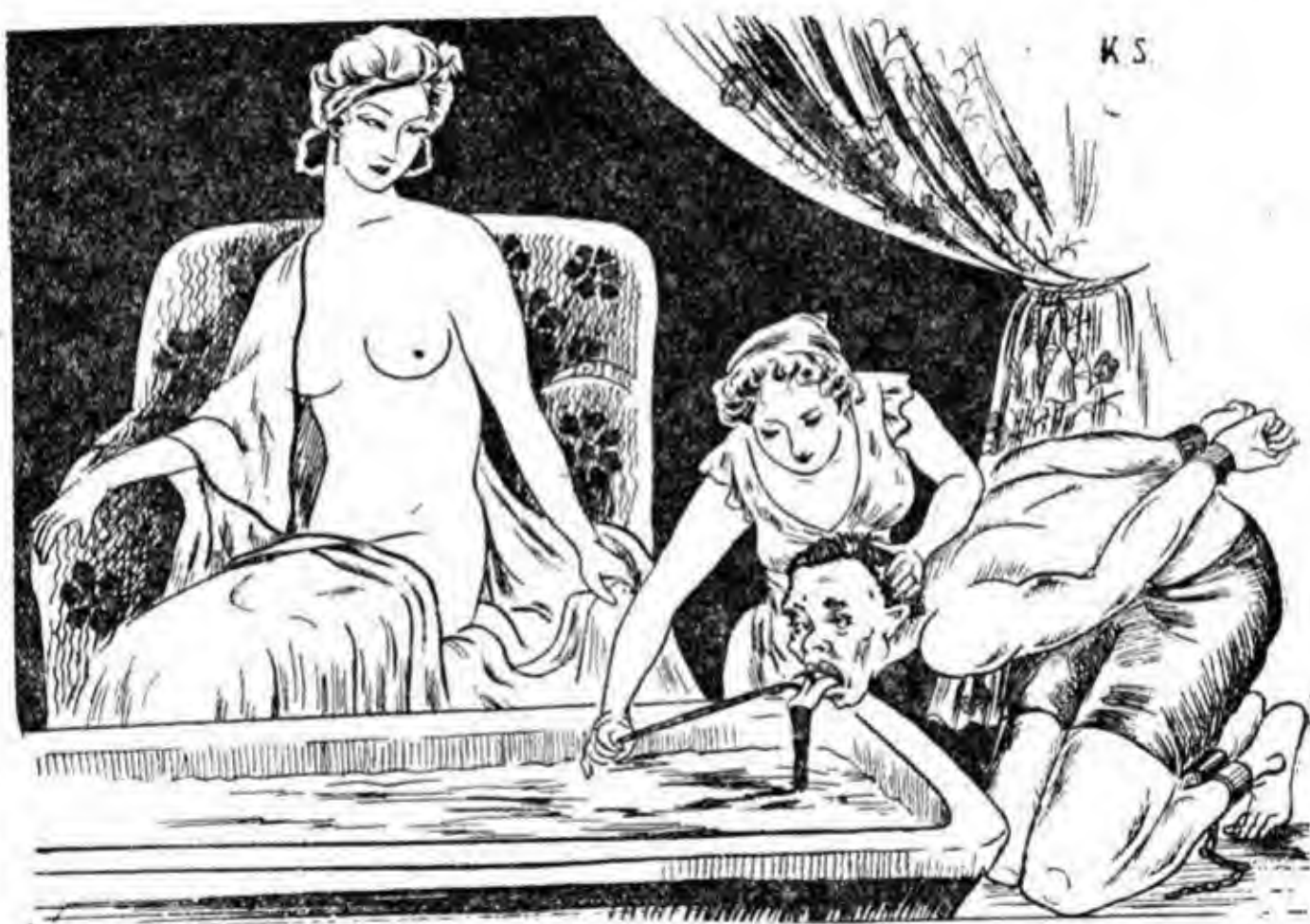
「痛ッ」と彼女の声。

少しだが血が赤くにじんで来た。私は咄嗟に顔をさしよせて舌で舐めとる。だがもう駄目だ。何の咎がなくてさえ、ポツペアは奴隷の命を玩ぶことを何とも思わない女なのだ。それが今彼女の身体を私は傷けたのだ。血止薬が届くまでの間、私は必死に舌を動かしながらも暗澹たる思いにとざされる。

「お前は私に血を流させて、それを吸つたね、吸血鬼め」彼女は傷口に薬を塗らせると私をチロリと見ていだした。

血を舐めるのがいけないなら、その時すぐとがめてくれればいいのに薬がくるまで黙つて舐めさせていた癖に。と私は思うが、もとより口答えはできない。

「そして怪我にかこつけて私の身体に、友知などとも苦をあてた。……さよもあつてを許されるのが限られた者だけなのをお前が知らぬ筈はない」いかにも私は知つ



ている。その人々が……すいよう毛……くのが私の役目なのだから、けれど出血の時の応急の手当は特別だと思つていたのだ、私は。

「大方、お前は、私の身体に舌をあててみたいために、その口実を作ろうとして、わざと傷つけたのである。どうじゃ。不届者」ちがいますポツペア様、どうしてそんなことがありましょう。血を流させたら命はないもの。そんな危険をどうして敢て冒しましょう。……けれど私は口答えることが出来ない。奴隷として、主人の前にかしこまること文を仕込まれて来た私には、主人のことばに対してこちらから思つてゐる通りに口をきくということができないのだ。

「どうぞ、お慈悲を」私はただこう叫ぶのみ。

「お前が吸い取つた血を、何倍にもして返すがいい。私の身体にふれてお前の身分不相応になつたお前の舌をお前のからだから切落してしまふがいい」

ポツペアのことばはそのまゝ私への判決となつて、直ちに執行さ

れる。彼女の羞図で私は後手に手枷をかけられ、彼女の浴槽の横に跪かされて足枷がはめられる。そして舌が切られた時捲き戻らない様、根元で縛られた上、私の舌は鉤針で引き出され、舌先が鋭でチヨン切られる。なおも舌を伸さされたまゝ、その切口が浴槽内のミルクに浸る所迄私の顔は押し下げられ、その位置で、浴槽の縁に首枷で固定される。ポツペアはミルクに血の交つてゆく工合を見たいとフト思いついて、この奇妙な刑罰を羞図しているのだ。

自分の舌尖から噴き出す血潮で、ミルクの純白が美しく変色してゆくのが、舌底なしに見える。浴槽の向い側にはポツペアの椅子がある。上目づかいに眺める彼女の顔の何と生き生きとして楽しそうなことよ。いつも倦怠の色濃い明眸が、淫虐の愉悅に光り、残酷の美に輝いている。

「血の出方が足りないようね。もう少し切つてごらん。」

声に応じて、一人の奴隷が鉤を伸し、私の舌尖をもう半センチほど切落す。迸る血流。

「よし、よく出る様になつたわ。まあ、綺麗なこと。」

彼女は無邪気に感嘆する。自分の思いつきの成功に満足してるのだ。毎日無聊に苦しむ彼女にとって、これは一寸したひまつぶしなのだ。恐ろしい痛み私の全身は痙攣し、手枷と足枷はガチャガチャと揺れる。しかしそれが何だろう。除毛係の奴隷の苦痛が、ローマの王妃の思いつきを、ひまつぶしを妨げる価値があるというのか？ むしろ、一奴隷の生命が、王妃のために暫しの娯楽を提供したところこそ光栄と感ずべきではないだろうか？

ポツペアは腰掛けたまゝ片脚を伸して浴槽をかきまわす。いちごミルクのいちごを潰したようにミルクは白を流した薄桃色から段々

濃い紅にそまつてゆく。

失血のため次第に遠くなつてゆく意識の中で、私は想像する、ポツペアとネロとの今夜の闇の対語を。

「妾、今日お風呂で怪我したわ。ミルクと血と交ると綺麗な色になるわね。」

「ミルクの色が変る位血が出たのかい。」

「ううん。怪我はすぐなおつたけど、除毛係の奴隷の舌を切つてやつたの。その血を混ぜて見たのよ。綺麗な薄桃色だつたわ。」

「そいつはどうなつた。」

「さあ、死んだでしよ、きつと。ミルクが真赤になるまで血を出したんだから。真赤になるまで見てたわ。色がもう変らなくなつたら急につまらなくなつたから、どんどん来ちやつたの、あとどうしたかしら。」

今や失神せんとして、かすれゆく眼界の中で、私はポツペアがつと立上り、興味を失つた顔で向うに立去るのを認める。もうふりむきもしない。奴隷を使つて試みた、一寸したひまつぶしは終つたのだ。目のすぐそばに迫る水面は真紅に染つている。舌をペロリと出して先を切られた滑稽な姿で、ポツペアの浴槽の縁につながれたまゝ、私は死ぬのだ……。

「手帖」の第七「舌」の項で、私は舌とベニスとが心理的に等価であることを書いたと思う。これを記憶する諸君は、本項の私の懲罰空想が、「去勢願望」の一表現であることに気附かれたことであらう。

悪の部屋

二俣志津子

×月×日

私は遂に解放された。何と言うながい被虐の時間だつたろう。まるで身体がふわ／＼と宙に浮いているようだ。身体の様子が變つてしまつたのではないだろうか、と言う疑惑がふと私の脳裡をかすめた。すると、お尻も乳房も妙だ。紐できり／＼と締められたまゝの幾日——、又、身体に電氣を当てられた瞬間、私は、どうしていたのだらう。想い出すことが出来ない。たゞ、しびれるような感覚が残っているだけだ。それは、不快なのか、快感なのか分からない。たゞ、何とも知れぬ力が私の全身を、あの天井裏へぐいぐいと引つぱつて行く、と。私の理性が——おゝ、理性などと言う言葉はすっかり忘れはてていた——それに抵抗する。

私は、夢遊病者のように街をふら／＼と歩きまわつた。奪つてきた二俣志津子のハンドバッグには三千円程の金が入っている。今日を生きるには充分だ。明日は明日で何とかなるだろう。しかし、やはり気になる。私の肉体は變形してしまつたのではないだろうか……と。

私は、新宿まで来ると、伊勢丹へ入つて、トイレットへ行つた。そして、中に入ると、服をすつかり脱いで素裸になつてみた。小さな手鏡ではお尻や背を見る術もない。乳房は——幾分大きくなつてゐるようだが、気のせいかもしれない。私は稍安心して服を着たが、トイレットを出ると、又急に不安になり出した。誰かに自分の身体を見てもらおう。そうして、異状ないことを確認しよう。しかし、自分の肉体が變形したかどうかを証言出来る者は、夫しか居ない。夫—— そうだ、私は夫と別れてしまつたのだ。どうして又彼のもとへ頭を下げて行けるだらう。行けば又サドとサドの争いが起る。そして結局私の負けた。ねじ伏せられて、きりきり縛り上げられて、あゝ、まるでそれは暴行だ。苛借もない。想つただけでもたまらない。嫌惡——やはり、夫の許には帰れない。

ふと行ずりの男が私の顔をのぞき込んだ。「君、お茶飲みに行かない？」
私はちらつと、その男を眺めてから、まるでおぼこ娘のように、がくり、と肯いて俯向いた。紳士だ。金もある。と、妙な直感がした。紳士は私の腕をとつた。街の燈は輝き始めていた。

「こゝは、どう?。」
 「私、レインボーへ行きたいの。」
 「レインボー?、君、始めてなんだね。」
 「え?、何が?」
 「こゝはじゆくだよ。じゆくで安く遊ぼうじやないか、野暮のようだけれども、その方が



お互いにいいじやないかな?。」
 「そうね、でも、私、新宿、知らないのよ。うゝん本当。」
 「そうらしいね。じゃあ、僕が教えてやろう旭町に安いドヤがあるんだ。この辺の女はみんな旭町へ行くんだ。が、僕はあそこはあま

り好かん。えーと、まあ、お茶でも飲んでからにしよう。」

紳士はなか／＼ハンサムだが、言葉はあまりよいとは言えない。それが私をすっかり小娘扱いにしているのだ。恐らく、年を聞いたら私と同じ位ではないだろうか?。

私達は一寸した喫茶店へ入った。

「コーヒーはダメよ。あなたもいけませんワ
 ミルクセーキ、私。」

「ビールはだめかい。」

「あなたはともかく、私はだめ。」

「なぜ、少し位、いゝだろう。」

「そうそう、その少し位が曲者よ。」

「なか／＼話せそうじやないか。何故だい?一杯だけつき合い給え。」

「一杯が二杯、二杯が三杯……。それは子供に使う手よ。あなた、いけない人ネ。その手で、可愛そうに、夜半にそそうした娘もあるのでしょう?。」

「はっはっは、うがつているね。」

私は紳士の耳元に口をつけて言った。

「ドヤで飲むわ。」

紳士は私の顔を見て眼を細めた。

私達は喫茶店を出ると中華料理屋で腹をこしらえてタクシーを拾った。

私はタクシーの窓から、流れる街の夜景を眺めながら、危く涙を流しそうになった。何とながいこと街を見なかつたことだろう。そして、何と夜の街は幻想的なのだろう！

紳士は私の腰に腕を巻いて、ちらちらと私の顔を眺めながら、服の上から私の肌をまさぐっていた。私は紳士に寄りかゝりながら、呟いた。

「ゲル、今下さらない？。」

「ゲル？、ほう、君、ドイツ語知っているんだね。よし、オールナイト、一枚、」

「私、こゝで降りるわ。」

「一枚半、どう？。」

「一枚でも結構なのよ。だけど、急にいやになったの。ごめんなさい。運転手さん！」

紳士は私の口をあわててふさいだ。

「二枚、いいだろう？ ほら、」

私は紳士の出した金を黙つてハンドバックへ入れた。

タクシーは温泉マークの前に停つた。

「君、そのサングラスとつたらどう？、」

私は、はッ、とした。すっかり忘れていたのだ。が、私はいや／＼をした。

「お部屋へ行つたら。」

「美しいよ。それに君は、なか／＼コケテ

ツシユだ。いや何て言つたらいいかな、知られざる宝石かな。君を夜の街へ出しておく男の気が知れないね。」

「男？、男つて？。」

「男つて男さ。」

「知らないわ。」

「うまいね、本当と思つていいかね。」

「どうぞ。」

「怒つた？。」

「いえ。」

私達の案内されたのは、こゝでは上等な部屋なんだろう。案外清潔なので私はほつとした。

すぐに風呂が空いていますから、と女中が告げに来た。

「あなた、どうぞお先に。」

「え？ それは……」

「約束がちがいますか？、」

「いや約束じやないが常識だぜ。」

「お床に入るまで知らない方が宜しくなくて？、あなたの拾つた女は、みんな御一緒に風呂にお入りになつたのでしようけれど……一人位、変つたのが居ても宜しくなくつて？、」

「うむ、よし、じや」

「ほゝ逃げませんわよ。」

私はやはり自分の肉体を他人に見られるのが恐ろしい。私の身体は、夜になるに従つてうずいてくるのだ。どこも、こゝも……あゝ、たまらない。どうかされたい。私は、正木と二俣三郎のためにすっかりマゾにされてしまつたのではないだろうか？

×月×日

肉体のうずきに、ふと眼がさめた。夢を見ていたようだ。快く放尿している夢……私は、小さな声をあげた。私は、現実に、放尿しているのだ。それがもう止めようにも止まらず、はね起きようとした。が、私の顔の上に異様なものがぶら下つているのだ。それがなんであるかを認識するまでには数秒かゝつた。その間にも私は放尿しつゝけた。

が、ふと気付くと、男の口がびつたりと、私の口に吸いついて離れないのだ。いつ男が裸になつたのか、いつ私が裸になつたのか、まるで覚えがない。男はのどを乾かしつづけていた。私はすっかり放尿し終るとどうも重なりてしまつた。

私はビールを四本飲んだまでは覚えてい

る。

私がそそうしたらどうする。と、男に言ったら、僕が飲む。と、男も酔った口で言ったところまでは確なのだ。

男はぐつたりと横になつてゐる。それに反して天井裏で練えられた私の肉体は激しくうずき出した。私は、男をゆさぶつた。

「どうしたの。起きてよ、可も満足させないで休まうなんて、卑怯よ。恥しいと思わない。さあ、私を縛つて！。そして、ぶつて！。でないと、私があなたを縛るわよ。ぶつわよ。」

「縛つてくれ。」

男は喘ぐように言つた。私は一瞬気抜けがした。が、猛然と、サド的感情が湧き起つてきて素早く男の両手を背にまわし、夜着の紐でくくり上げた。

「叩くと音がするから叩かないわよ。」

私はそう言いながら、男の足をベッドの脚に縛りつけ、志津子のバツクから鋭利な刃物を取り出した。

「あッ！」

男はそれを見て悲鳴に近い声をあげた。

「どうするんだ！」

「ほ、殺しやしないわよ。あんたの皮膚を

少しいただくだけよ。」

「頼む、助けてくれ。」

「だから、殺しやしないと云つてゐるじやないの。」

私はメスを持つて静かに男に近づいた。

二

私が兄の部屋にたどりついたのは、夜も大分ふけてからである。兄は留守であつた。が電燈も点いたまゝであつたし、仕事もしかけてあるので、兄のことだから甘納豆でも買ひに行つたのだらう位に、思つて帰つて来るのを待つた。が、いくら待つても兄は帰つて来なかつた。

私はふと、隣室の大塚智子に兄の行方を聞いて見よう、と、思つた。とに角今夜はどうしても兄に会つてたゞさねばならないことがあるからだ。妹の私が凌辱されてゐるのを見て何とも思わない兄だつたらうか。その羞しい現場を写真にとるような兄だつたらうか。私は裏切られたような口惜しさと情無さで胸が一杯であつた。

私は大塚の部屋のドアを叩いた。確かに人の気配がした。がしかし、ノックに対する応答はなかつた。

失礼しちやうわ。馬鹿にしている。

私は心の中でそう呟いて大塚の部屋の前に立ちつくしていた。すると、しばらくして、智子の低いがよく透る声がした。

「もう帰つたらしいワ。」

それに答えた、更に低い男の声は確かに兄のそれだ。と、私は感じてドキツとした。

「いいじやないの？、そんなに妹さんが恐いの？、ふふ、そうらしいわね。いくら否定したつてダメよ。」

「……頼むから、もつと低い声で喋つて下さい。」

間違ひなく兄だ。――私の胸は怒りにふるえた。

そして、どうしてやろうか、と、あたりを見廻した。再びドアを叩いても無駄だろう。又、現場を押えないことには、兄は知らぬ、と言ひ通すかもしれない。

――とまず部屋へ入つて、じっくり考えようと、私は足音を忍ばせて兄の部屋へ戻つた何の気なしに、机の上にあるカメラを取つてそれをひねくりながら考へてゐるうちに、「悪の部屋」を空け放してあることが氣になつて来た。

――正木が来ているかもしれないワ。あいつ

の情婦になつてやろうかな。

——だが……

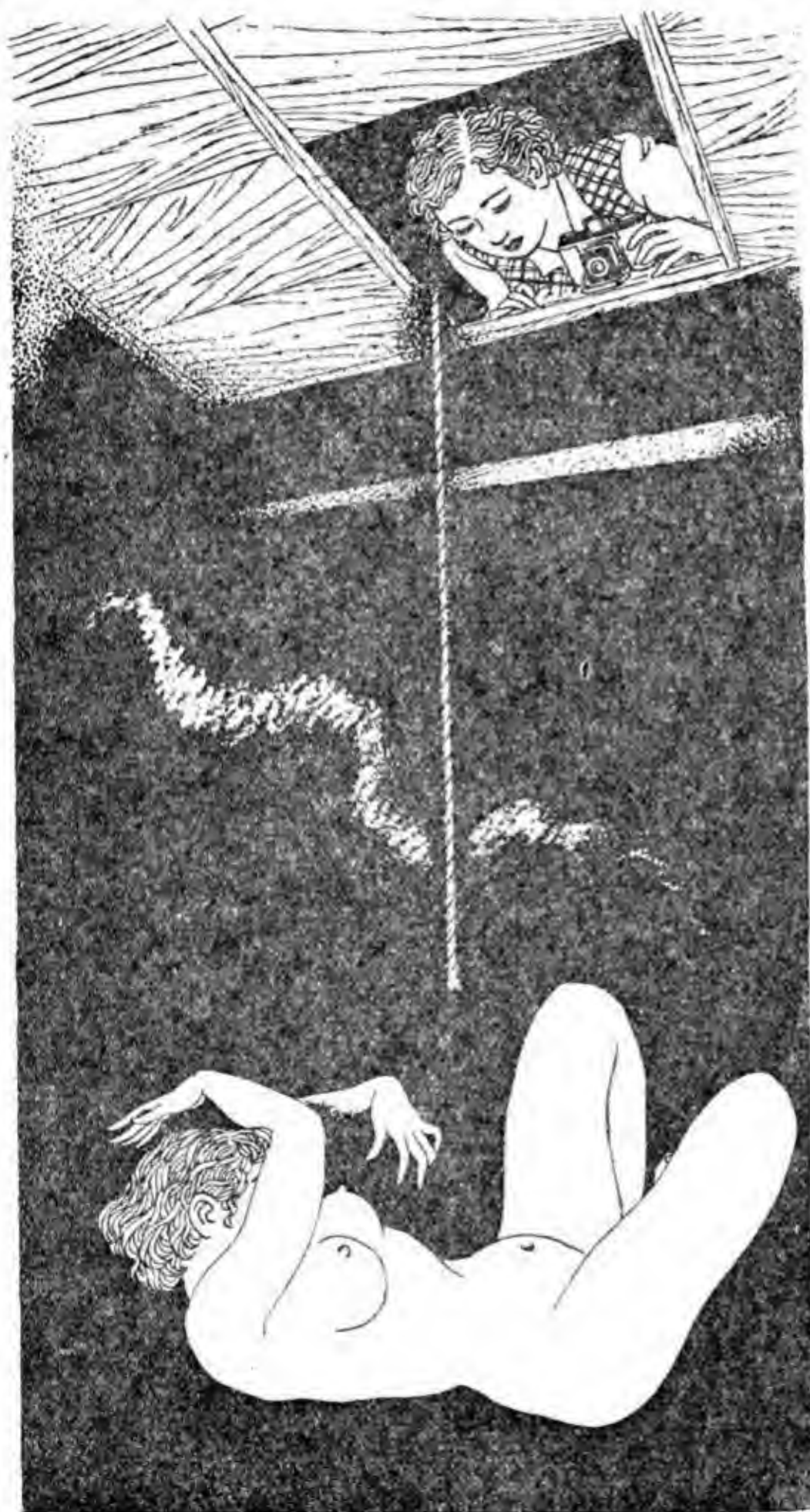
カメラにはフィルムが入つていた。まだ二枚撮つたばかりである。私は、悪の部屋の連想から押入れのことを思い出した。そうだ、こゝから大塚の部屋へ入つてやろう。と、咄嗟に考えを決めた。彼女が起きているうちに

てしまった。食事をすますと百ワツトの電球とカメラを持つて秘かに天井裏へ這い上つた。勿論、兄の部屋に内から鍵をかけておくことを忘れていない。若し兄が帰つてきてもドアが開かないので又、大塚の部屋に戻つて行くに決つてゐる。

私の行動は、鼠の足音ほどの音もたてられない。が、すぐに隣室の押入れはわかつた。天井板をそつとずらしてみると、丁度、智子がふとんを引出しているところであつた。が間もなく彼女はふとんを出して押入れを締切つてしまった。

しかし、私はなおも要心して、身動きもし

入れば不法侵入とか何とか言うに決つてゐるから、彼女等が寝入つてからでなければならぬ、それから兄を彼女の部屋から出さぬことだ。それは、私が兄の部屋に居ることをいつも示さねばならない。私はラチオのスイツチを入れ、部屋の中を足音を荒く歩きまわり、ふとんを敷き、炊事の仕度をしその間に押入の天井板を外しておいた。私はすっかり落付い



なかつた。やがて、電燈を消し、低い声での
楽し気な言い合いも息をひそめ、女の溜息と
かすかな呻き^{うめき}がもれてきた。私は機を見て
押入へ下りた。

「いやよ、いやよ！」

喘ぐような智子の声が意外に近い。

私は全神経を耳に集中していた。どんな物
音も聞きもらすまいとして……。

やがて部屋の中は静まつていった。そして
全く物音が絶えてしまった。私は夜盗のよう
に押入の戸を一寸、五分と、開けていった。

智子も——二人共……夢の中にまで持ち込
んでいる姿態だ。それが暗闇の中にぼーつと
浮いている。フラツシユがあれば……が、
止むを得ない。電燈を点ければ眼をさますか
もしれない。

私は電燈の球をつけ替えながら、よし、こ
のまゝ二人を縛り上げてしまおう。と、心に
決めて紐を搜した。眼を覚してわめきたかつ
たらわめけばいい。が、縛り終えてしまうま
では覚めさせたくない。と、細心の注意を払
つて二人の身体に紐を巻きつけ、いつでもキ
リキリと締るようにして、カメラを向け、電
燈を点けた。兄が身動きした。がもう一枚撮
つた後で、いましめを締めようとしたが二人

共眠りから覚めない。私は、違った角度から
もう一枚撮つてから、紐をキリキリと締めあ
げていった。二人は最初は寝呆けていたが、
私の姿を見ると、二人共あつと声をあげて逃
げようとした。カメラは巧みに彼等の動きを
捉えた。

「どう、満足でしょう。法被^{はふき}を着て、持ち込ん
だまゝの如^{ごと}きでいるのですから。」

智子は顔をそむけたまゝ肩で息をしていた
が、その肩から乳房まで羞恥に染つていた。
兄は、私の視線を捉えたと、にやり、と笑つ
た。

「兄いさん、少し眠つて下さいな。私、この
人に用があるの。」

私は、兄の部屋へもどつて注射器を取つて
きた。それを見ると智子の顔色は青ざめた。
が、薬が単なる魔睡薬であるのを知ると、ほ
つとしたようであつた。

兄は間もなく昏睡状態に入つた。

「どうなさるの?。」

と、流石に智子の声はかすれていたが、大
分落付を取戻して言つた。

「兄さんを返してもらいたいの。」

「兄さんが奪いに來たのですワ。」

「どちらでも、同じよ。」

「いゝえ、同じじゃありません。」

「同じです。兄は私の兄です。私だけの兄で
す。肉体関係に於て女が、奪われる、と云う
観念は、完全に誤つています。本末を転倒し
ています。原始共産社会時代から、母権制度
時代から、奪うのは女で、奪われるのは男と
決つています。これは疑うことの出来ない真
実です。私はそう主張します。奪うのは女で
す。又、奪わなければならぬ。私は、私か
ら私の兄を奪つたことに対して、よき戦士と
してあなたに敬意を表します。よき敵手とし
て尊重します。しかし、今は、あなたは私の
捕虜です。兄を奪い返すことはわけありませ
ん。が、結ばれたであろう精神的なきずなは
強奪によつて奪うことは出来ない。このこと
に関して、私はあなたに願いたい。返して下
さい。兄に関する一切を心から断ち切つてほ
しい。」

「いやです。」

智子の眼は、明らかに斗志に輝き出してき
た。私は心の中で手を打て喜んだ、美事に私
の作戦にかゝつてしまつたらしいのである。

「あなたに何と言われようと、手中の宝を
生きて手離すのは女の恥ですワ。いのちより
も大切なものが、女にはある筈です!。」

「返して下さい。兄をお返し下さい！」

「どんなことがあつても！」

「あなたの肉体が減びても？」

「勿論！」

智子の頬は誇らかに輝いて、小憎い程に美しくなつた。

「頼もしいワ。」

私は急に語調を変えた。

「頼もしいひとね。見直したワ。しかし、兄は返してもらわなければなりません。」

「絶対に？」

「そう、女はみんな貴女のようにでなければいけないワ。しかし、一応、貴女の肉体は私の

ものよ。戦利品よ。覚悟なさい！」

私は智子の豊かな形のいゝ胸にのびやかな脚——両膝を押し付けて三ツに折り畳むようにして縛り、唇を噛み目を閉じた彼女を大きなリュックサックに押込んで、背に担いだ。

——十六貫はあるワ。

私は一寸リュックをゆすつてみてから、兄の身体の上にふとんをかけて部屋を出た。街はもうすっかり深夜の気配である。巨大な二つの眼をキラキラ光らした甲虫めいた怪物が猛スピードで走り廻っているだけの時刻で、人間は、物蔭から物蔭へ、おどおどと逃げ廻らねばならない夜の中へ、私は勝利者の胸を

張つて出て行つた。正木への抵抗力が深まつてきたように思えて私の心は明るくなつていった。

夜はやはり女の世界だ。肩に喰い込むリュックも苦にはならない。どんな強敵が出現しても、私は一度得た戦利品を奪われたいために闘うだろう、この大塚智子よりもより頑強に……。

私は目玉を光らせた甲虫に向つて手をあげその腹の中にすべり込んだ。

「荻窪！」

甲虫は音もなく路上を旋回した。

(つづく)

今年の夏は野外撮影会のモデルとして数回参りましたので、全身がすっかり陽に灼けてしまつて、お風呂へ行つても自分で鏡にうつして驚く程でした。野外で全裸になつて三十数人のカメラに取り囲まれた時には、今迄少しはカメラにも馴れていると思つた私でしたけれど、すっかり上つてしまつて、ポーズをつけて下さる方の言葉も

上の空で聞いていたことを覚えています。特に真直ぐに立つて、両手を上へ上げたようなポーズは、周囲からカメラで取り囲んでいるだけに、何の防備もなく、全部さらけ出しているという気持が、たまらないものでした。

丁度、私が初めて縛られた時もこれは室内でしたけれど、やはり手と足の自由を奪れてしまつたと野外、といつても池の畔や林の中

という気持が、全裸で野外に立たされた時と同じように、身体中がこそばゆいようなゾク／＼する気持でした。私は肥つていてボリュームがあるというのでよく野外へ連れ出されて、夏中はスタジオをやめて撮映会専門のような恰好になつていました。ところが、どちらかといえば、私も野外、といつても池の畔や林の中

手

記

責めのモデルになつてみて

初めて縛られて

村田那美子



の身体を見られるということに、喜びを感じていたのかもしれない。私がまだ縛られたモデル々にならない前に、高瀬忍さんが「村田さん、一度やつてごらん、そりや、しんどいし、妾、辛抱したけれど、貴方だつたら、よう辛抱するかしら」

と驚かされましたが、その高瀬さんも、座談会ではなんだか、縛られることが好きになるような言

葉だつたので、妾はあいた口が閉らなかつたんですけれど、初めて縛られた時は自分でも、情ないと思う位、従順で素直でそして痛さにもよくまあ辛抱したものだと思っています。

それも、最初、あんなに驚かされていたので、どんな事になるんかしら、という恐怖と怖い目にあつてみたい好奇心で緊張していたんだけど、案外、親切で、それ

に無茶をなさらないので安心してなんだ、こんな事位あんな大ゲサに考えなくともよかつたんだわと安心したり、失望したり。それでも、暫くして、馴れてきて、横着になつてきた時は、いろんな我儘を言出してみると、一番最初に縛られた時は、よくもあれだけ辛抱したものだ、自分で感心したりすることもあります。やはり、その頃は純情だつたのかもしれない

「痛いですか？」と尋ねられて、痛くつても「いゝえ」と答えないでおれなかつたんだもの。この頃は、一寸凄いいことになりそうだった、縛られない先から「痛い、痛い」つて言つてやる位厚かましくなつていくんですからすつかり変つたものです。

だから、夏になつて野外撮映に行くようになってから、縛りのモデルの方をよくすつぽ抜かして、この頃どうして来ないの、と云われた時、あんなの痛くつて、それに手首に縄のあとがつくんですもの、妾気が進まないわ、つて平気で云つてやるんです。そして相手の人の困つたような顔つきを見ているのが、とても面白いの。

本当は熱い蒸しタオルで二三度温めたら、すぐとれてしまうのだけれど——。時々我儘を言つて、これから、映そうつていう時「痛い」と言つて、紐を解かしてしまふ事だつてあるんです。

(オワリ)

傷痕をなてながら

私は切腹した



岸田 映子

数年来ある動機から私の心中に秘蔵されて成長をとげて来た「切腹願望」は既に妄想の域を脱して、その機会をうかづつていたのです。

勿論「死」と「苦痛」の恐怖は、私の幻想の中でも大きな分野を占めてその実行を阻む力となつていたのですが、時には自分で切腹して臓腑を手繰り出すときの悲愴感や、皮膚

の白と血液の赤色が織りなす彩りの対比や、平常は殊更冷静そうにしている余り感情の變化を表面に出さない私が苦痛と興奮に吾を忘れて取り乱す顔面の歪みや肉体のケイレン等を想像すると、その倒錯な幻想の美しさに蔽れて「死」や「苦痛」などの恐怖心はいつの間にか影をひそめてしまうのです。私の勤務先は毎週電休日の木曜が休日なので、七月下

旬の水曜の晩、明日の休みを利用してA市近郊にあるA温泉へ遊びに行く計画をたて、お友達二人を誘つて私はその晩のうちに出発し温泉旅館を経営している叔父の宿に泊り翌朝早く来るお友達の歓迎準備をして待つ事にしたのですが、その晩は非常に蒸し暑くて寝苦しいので一風呂浴びようと思つて浴場へ行つて見ると時間も遅いから中には誰も居らず湯口から流れこむ透明なお湯が小波をたて、淡青色のタイルの湯槽から溢れていました。

いつもの癖でザブリと入つてすぐ上ると浴室の壁にはめこんである鏡の前に座り、その中の自分の姿を見ると……はち切れんばかりに青白く匂うわが女体の美しさ、皮膚の艶やかさ、線の滑らかさ、そして全身から立ちのぼる若さの精気……などにしばしうつとりとナルシステイックな自己満足に浸されて行くと共にあらゆる醜悪と恐怖の感情が消え去つてしまうのです。

その時突然、日頃抱いていた「切腹願望」がむくむくと頭を抬げて来てサツとインスピレーションが閃めいた途端に、——そうだ、今こそ——何となくそんな氣になつて切腹を決意してしまつたのです。

さすがに全裸では恥ずかしいので、脱衣場

へ行つてパンティをはき、肩から浴衣をひっかけて再び浴室のタイルに座り、顔剃り用に常時洗面袋に入れてある西洋剃刀を取り出して刃を起し、手拭いを巻きしめて切尖を二センチ程出して逆手に握るといかに気分が出て、思わず下腹の方に目をやり、小ジワ一つない臍の下を左手で撫で廻して見ます。

やがて左手で下腹をおさえて右手の刃を静かに下腹に当て、それを見つめたまま深く息を吸つてビタリと止め、じりじりと右手に力を加えると皮膚が少し凹むのでグツと下腹に力を入れ同時にほんの少し刃を右に引き乍ら更に力をこめると刀先が三ミリ程皮膚の下にすべり込んで行きます。臍下四センチ、左脇六センチ位の所で痛みはほとんど無く、血はかすかに玉の様にしみ出ます。そこで右手の力を思い切つて増すと、ゾリツとはらわたに響く様な手応えがして切尖は案外深く突き刺さつたので思わず「うウツ」と声を立て、しまいました。どきんとする様な痛みが傷の周りに起つたけれど最初に予想していた程ひどいものではなく、血が漸く流れ出してパンティを染めはじめました。

その血を見た瞬間、灼きつく様な激痛が左下腹から始まつて全身をかけ廻ります。もえ

る様な痛み、「しまった、やるんじやなかつた」と云う後悔の叫びと「ここ迄どうせやつたんだもの、もう一息思い切つて右へ掻き切つてしまえ、早く早く」と急かせる自虐の聲が耳元で錯綜します。

瞬時の間に誘惑は後悔をねじ伏せてしまい右手はすうーつと右下腹の方へ走り、皮膚や脂肪層を切り裂く手応えがブリブリブリとむしろ快よく感じられました。

噴水の様にふき出すかと思つた血もそれ程でもなく、わずかに膝のあたり迄はねとんだだけで、あとはブクブクと傷口から盛り上つた血が下腹を伝つてパンティや下のタイルに細流を作るだけで「凄壮な血煙り」と「奔流の様な血の川」と「地獄の苦痛」を予想していた私には意外な位ポリウムの足りない緊迫を味わつた訳です。

傷の深さは五ミリから十ミリ位のもので、桃色の真皮？の下に白色の脂肪層がかすかに見えただけでも間もなく血で蔽われてしまいました。この頃迄の私は姿勢も殆んど崩れないう意識もしつかりしていましたが、傷口がズキズキ痛み、全身が火の様に火照つて体中から脂汗の様なものが流れるのを感じると無性に咽喉が乾いて水がほしくなり、左手で傷

口をおさえ、右手と足で浴槽のふちにある水栓の側へ寄ろうとしたけれど全身の力が抜けた様になつてだるくどうしても水栓に近寄れないので焦つて声を出したのでしようか、間もなく背後に人の気配を感じてふり向こうとしたら途端に両肩をグイと掴まれてぐつと引き起されてしまつたのです。

それでそのまゝ私は失神してしまつたのですが、その時私が「あゝやつぱり」とぼつりと呟いたそうです。その時の「あつやつぱり」は一体どんな意味があるのかと後で考えて見ると、①やつぱり見つかつてしまつた。②やつぱり助かつた。③やつぱりパンティをはいてよかつた。④やつぱりここでやらなきやよかつた。⑤やつぱりここでやつてよかつた。などの複雑な、行為自体に矛盾した気持がそう云わたたではないかと思ひます。

あれから四ヶ月、これから寒さ厳しくなるみちのくの果てに、癒えたとは云え、時々疼く傷痕をなで乍ら人目が恐ろしくて普通の人並みには風呂へも行けない私が奇クを愛読する様になつたのは、この雑誌だけが、私の行動を是認して呉れる様な気がするからなのです。

(終)

變態讀美論

2

第二部 變態性慾各種型の道德的解釋 鬼山 絢 策



種型者にも、真に理解出来ぬ点があると思ひ、又、この道德的解釋が本論の骨子ともなるものであるから、各種型別に具體的に詳述する。

第一章 サディズム

(嗜虐性性慾)

サディズム心理の本質は、大別して、相手を完全に征服する意慾、相手を完全に独占する意慾

この二種の心理の變態的發露に他ならない。中には潜在的な猜疑心に依つて、相手の愛情の深さを立証せしめる意慾が發露する場合もあるが、これも要するに

筆者は前章に於いて、「道德的解釋」に

就いて、各種型の全般に亘る見地から見て極めて抽象的にその解釋の要点のみを述べた。

が前章の解釋のみでは、一般人にも、各

独占慾の變型に過ぎない。

サディズムの行為は大別して

相手に苦痛を与えるもの相手に屈辱を与えるものの二種に限定される。

A 相手に苦痛を与える型

イ、精神的に苦痛を与える型

ロ、肉体的に苦痛を与える型

A 型にも右の如き二種類がある。

第二章 精神的に苦痛を与える型

精神的苦痛を与える型には、時に依ると相手が、その苦痛がサディズムに依るものと、察知できぬ場合がある。

例えば、夫だけが美衣飽食して、妻には粗衣粗食を強いたり、経済的にも行動の範囲も圧迫束縛を加える類いである。

これを道徳的に解釈した場合、もしもその妻がそれに甘んじて行くなれば、何等不道徳にはならない。

然し妻が不平不満を抱くなら、そこに考慮を要することになる。

その差があまりにひどければ不道徳となる。

この行為を好む人は、何等かの形をとつて、相手に諒解を求めなければならぬ。それでも猶且つ相手が肯ぜぬ場合は不道徳として憤まねばならない。

この型の人は、その相手に与える苦痛を、サディズムに依るものと明らさずに知らしめ得ぬ悩みがある。然し例をあげて暗示するとか、別の面で深い愛情を示すとかすれば、或は相手が理解してくれる望みもあるから、無理のないように事を運べば、強ち不道徳とは言えぬであろう。

第三章 肉体的に苦痛を与える型

前者が陰性サディズムと仮称するなら、これは陽性サディズムである。

この苦痛を与える性慾が極度に昂進すると、相手を虐殺する行為に到達する。これは以つての他である。タブーの三条件全部に抵触する。

このような型の人は、その意慾を妄想の範囲に止めるべく心掛けるがよい。妄想の世界なら、いかに惨虐な殺戮を行うとも、決して不道徳ではない。

キリストは「あゝあの女と一緒に寝て見たい」と想えば、それは姦淫の罪であると言つて居るが、これは聖者の論であつて、俗人は此処迄嚴格に守らなくとも不道徳ではない。殺人の妄想が不道徳なら、小説家は皆不道徳漢になり、探偵小説家などは極道者になつてしまふ。

然し妄想のみではどうにも満足できない人もあるであろう。このような人の昇華方法としては疑似行為がある。

例えば相手と相談の上で芝居をすればよい。血を見たければ紅を使えばよい。芝居でやるならどんな惨虐なことをやつてのけても、見物人がある訳ではないから不道徳にはならない。

苦痛を与えて満足する型には、「緊縛」が最も良い方法である。「緊縛」はそれ自体が立派な「責め」であり、「責めの基礎」である。「緊縛」は独占慾をも満足させる。

又「緊縛」は非常に暗示に富んで居り、緊縛を行つただけで、次に行うべき凡ゆる惨虐行為の妄想が強い迫力を以つて沸いてくる。

これは非常に楽しい。

「奇譚クラブ」が多年にわたつて「緊縛」の研究に真摯な努力を払われたことは、非常に世の多くのサチストを昇華せしめ救い得たことと信ずる。

「緊縛」こそ健全で、美しい責めは他に比を見ない。この型の人には妄想の発達に心掛け、実行に移したい意慾を他に転化せしむべである。

どうしても実感を得なければ満足出来ぬ人は、相手の承諾が得られたなら、針で刺すとか、注射とか、愛咬程度の微傷を与える程度なら、不道德の部類には入らぬであろう。

但しこれは非常に進行し易いものであるから危険であり、よく程度を弁まえて行ふべきである。

又次の方法も有力であると思う。

それは外見上非常に惨虐に、見た眼を思うさま惨たらしく責めても、その苦痛が相手の肉体的に、実質的にさのみ被害を加えて居ないものは、合意の上であるならば、道徳的に宥せると思う。

又次の方法も健全なる方法だと思ふ。

それは実際に相手に非常な苦痛を与えても、それが後に残らぬもの、そして回復が速く、実生活に何等支障を来たさぬものであるなら差支えない。



例えば光輝ある帝国海軍が「健全なる懲罰」として、大に奨励した「前さゝえ」の如きものである。

「前さゝえ」は衆知の如く、腹這いの姿勢から、両手と爪先のみにて全身の重量を支えるものである。これは五分位は何の苦痛も感じないが、十分、十五分と経つ毎に、その苦痛は加速度的に倍加して来る。四十分もやれば、かなり頑健な肉体の持主でも参つてくる。

両手はブル／＼と震え、全身から汗が流れ、呼吸はハツ／＼と荒く眼はくらみ、その苦痛はいつ果つべきともなく、然も刻々留度なく加わつてくる。

そして我が光輝ある帝国海軍の惨虐なる懲罰者は斯う言うのである。

「俺は懲罰を加えてるのではないぞ。いゝか、お前に体操を命じてるんだ、体操をな、これをやれば腕力が強くなつて益々健康な肉体になる。非常によい鍛錬なんだからな」と訓示するのである。これは事実のようである。それ程苦しくとも、止めれば翌日の労働に差支えたことはないからである。筆者も体験して「まことにこれはよい体操である」と文字通り痛感した。

このような方法が、他にいくらもあるに違いない。そこを工夫することであるが、勿論相手の承諾を必要とするプレーである。

第四章 屈辱を与えるサディズム

この型は、苦痛を与えるものと違つて、相手の肉体に、実質的にさのみ損害を加えるものが多いから、相手さえ承諾するなら、かなり深刻なところ迄進んでも道徳的に宥せらるゝと思う。

夫婦生活の中には、一方が屈辱的サチストで、それを意識して相手がそれをサチとは気づかずに入受入れて居るケースもある。日本の女性は多年の男尊女卑の風習に依り、特に女性において、風習的に夫に隷屬して居る妻、母、下婢等が多い。然しこれ等は風習的にそのやうなものとして諦観して居るので、これは一面黙諾して居る形でもある。このような家庭に対して、はたから、貴女はあまりに献身的だあまり隷屬的だと、世間の例をひいて、眼を覚まさすべき好意をよせるのは、相当慎重な考慮を要する。もしも本人が他人の言に依つて、不平、或は屈辱を感じた場合は、今迄平和な家庭に波風が立つこととなる。その不平を正当な理論として夫に並べたてたところで夫が直ちにそれを全部認める筈がない。又世の中には何らかの恩恵を妻に施して、その代償として隷屬を強いる夫もある。他人はそれ等の過去を知らず、只現在の生活のみを見て、同情的に妻に進言するのであるが、それが却つて不幸の根源となることもあるのである。個人の生活の組織と言うものは複雑なものであるから、余程その家庭の過去、裏面を知悉し、種々の状態を先々迄考慮した後でなければ、進言する資格はないと言えよう。

この恩恵を売つて隷屬せしめる行為は、道徳的に言えば、排斥さ

るべきものであるが、社会の機構が總べて代償行為に依つて經營されて居る以上、程度の差が問題だが、或る程度のことは「浮世の義理」として、これも道徳的と言うより、常識的良心に訴えて恥じぬものがあると思う。要するにこれは「秤」の問題で、その秤の平均値をどこに求めるかと言うことは、当事者、第三者、総て観点が違ふであらうが、一応平均して居る「秤」に対して他人の進言と言う「錘」を加えて不平均化する必要はない。

第五章 マゾヒズム（被虐性性慾）

マゾヒズムの本質は先にも述べた如く、尊敬、謙讓、犠牲寛大、と言う美德の変型である。

マゾヒズムの行為は相手側にとつてあまり迷惑な場合は少いから大抵の行為は道徳的に差支えない。但しあまりに惨虐な行為を受けることを強いるのは、時には相手が迷惑する場合もあるうし、又明日の業務に支障を来すことは、慎しむべきであることも前章に述べた如く、当然である。

故にマゾヒズムは何等隠す必要のないものだと思う。潤一郎の小説の中にも「俺はあの女のたれた糞なら食つてもいい」と言う一節があるが、常人が「汚ない」と思つても自分に直接関係はないから迷惑は感じないと思う。

病氣にしても肺病、癩病などと言うと、人は怖れるが、それは伝染して迷惑する恐れがあるからで、病氣自体としては肺病癩病より遙かに恐ろしい癌を「俺は癌だ」と人に言つても怖れはしまし。それは伝染の可能性がないからである。

その点サディズムと相違するものがある。

第六章 フェチシズム（遮物愛着的性慾）

フェチシズムの本質は、愛慕の追憶である。これも美德の一変型であつて何等羞しい性慾ではない。

但しこの型は、その対象物を得んとする方法に注意すべき点がある。

この型の人、靴とか、下着、パンティ、腰巻、花等に熱着するの余り、この蒐集に志して往々にして「盗む」場合がある。これは道德的にも法律的にも許されないから、絶対慎しむべきである。筆者の論法をもつてすれば「所有主の承諾を得るならば」と言うことになるが、さすればフェチシストは抗議するであろう。「恋人以外の異性に対して目的物を所望して、承諾する筈がない、恋人でも中には拒否する場合が品物によつてはあるだろう。それでは蒐集の目的、イコール性慾の満足が得られないのではないか」と。

筆者は総ての変態性慾を正当なるものと認めて居るが、認めるだけで実行不可能な条件がついたのでは、一休が屏風に描かれた虎を縛るに「それを追い出してくれ」と条件をつけたようなもので所謂「画餅」である。

そこで筆者はこの型の人に筆者の良心から割り出した妥協方法を案出しよう。



相手に無断でなければ取得し得られぬ品物である場合は、フェチストは、予めその目的物と同じ品物（新品）を用意して、無断で頂戴した代りに、それを無断でおいで行くことにしたらどうであろう。

これとて「盗む」ことに変わりはなく、道德的に見て許さるべき行爲ではないから、私は妥協案とした迄で、決してこれは推奨はしない。止むを得ぬ非常手段であると断つておく。

然しこれなら相手の異性は「氣持が悪い」とか「ウス氣味悪い」と言う迷惑は受けても、物質的には損害を受けて居ないのであるから多くの場合宥してくれるのではあるまいか。

第七章 スコプトオフィリア（窃視的性慾）

この本質は、恐らく万人に共通するものであつて、他人の秘密を覗き見たいと言う慾望を持たぬ人はないと思う。たゞその行爲が不道德であるものとして理性で抑えて居り、或はその道德固持が変態心理となつて、嫌悪する人もあろう。

然し他人の秘密を窃視することが不道德であるなら、刑事や探偵が容疑者の私行、秘密を窃視し、たま／＼その容疑者が犯人でなかつた場合「あゝ嫌疑が晴れた」と、それだけで済ます場合、これを何故不道德と見なさぬのであろうか。

窃視型の人、他人の秘蔵するもの、行爲において、その刑事の行動と何等変りはないではないか。名目が違ふと言うが、然らばもつ

ともらしい名目を附せばよい。刑事の中に窺視型の性慾者が居ないと断言できるか。名目と言う怪物に散々悩まされて居る事は万人の体験するところである。「名目」こそ社会の害毒の重要な立役者である。

窺視は、相手に気づかれなかつた場合、そして窺視者が絶対に秘密を保持して、それを利用したりしなかつた場合は、相手に迷惑は掛らぬ訳である。(相手は知らないのだから)そしてこれと同様の行為が社会では何らかの正当と見える名目のもとに行つた場合は宥される。例えば親が子の性的悪習の疑いを以つて、子の秘密を窺視する場合、この「親」が、「兄」に代えられようと「恋人」に代えられようと、同じではないか。

仮に筆者を窺視者の立場において考えて見よう。否そんな仮定論をだけ必要はない。筆者自身窺視の経験が豊富にある。その場合を反省して見よう。

A 金束を出して、見も知らぬ他人の秘行を窺視した場合。これは赤線区域などによくあることで、その場限りのものであり、勿論相手には気づかれていない、或は気づいていてもそれを承知して居る場合のいずれかであるから別に不道德と思つて居ない

B 知人の秘行を窺視した場合

これとても、筆者は絶対秘密を守つたし、その相手が日頃尊敬する人であつて、その秘行に奇抜な行為があつたとしても、秘密保持は勿論、一切利用はしなかつたし、又窺視に依つてその人の人格に対する信用とか観かたを変えろと言つたようなこともない。

私はこの戒律を守ることに依り、何等良心に恥じて居ない。但し万一筆者の窺視が相手に発見された場合は、非常な侮辱を与え不道德を犯かしたことになるから、その罪に服する覚悟はもとより出来て居る。窺視者には常にその覚悟が必要である。

それでも猶且つ筆者の行為を不道德であると言う人があるなら、もう一度先の刑事の場合を引例して比較しよう。

刑事が容疑者の秘密を窺視したことが発見された場合はどうなるか、もしそれが犯人であつた場合は、自己の不道德な行為には触れず、その防禦として相手の罪を攻撃することによつて欺満的逆襲で押し通してしまふであらう。

又相手が犯人でなかつた場合は、これはどうにも仕方がないから詫まるであらうし、侮辱罪で訴えられても罪に服するよりないであらう。然し相手が気づかなかつた場合は、この侮辱罪に相当する罪を「猫ババ」して然も良心に恥じぬ心理これが筆者の心理に共通して居る点である。

その刑事の行動を不道德とするなら当然筆者の考え行つて来たことも不道德となる。それでも猶且つ筆者の考え方を不純なものと論ずる人があれば、筆者はその人と論議する手段として筆者の過去の窺視の一つ一つに正当な理由と名目を附することにしよう。(これこそ良心に容めることなのであるが)

第八章 エキスビジヨニズム(露出的性慾)

この型の本質は「束縛から脱出したい」と言う心理と、マゾヒズム的な、「屈辱を受けたい」という心理の二種である。



さてこれを道徳的に考えて見た場合公衆の面前で自己の性器を露出することは「公然猥褻罪」を構成し、法律に触れる。

又公衆の面前でなくとも、相手に不快な念(迷惑)を与えれば不道徳となる。

すると筆者の論法を狭義に解釈すると、この型の性慾者の性慾遂行には、公衆の面前以外の場所において、相手に不快な念を起さぬ承諾又は確認を得た後でなければ遂行できぬことになる。

然しこの型の本質から言うと、そんな条件をつけられること自体が本質に反するものであり、満足を得られないかも知れない。そこで原則としては右の条件が必要であるが、実行の方法としてはいくらか抜け道があるであろう。

その手段としては本誌十一月号所載の河間田子路氏の「自虐鬼の独白」の如きもよき一例である。

又露出したい目的物が性器に限られて居なければ、これこそ容易である。又これを職業、趣味と言つた面で昇華させることも出来る。

高橋鉄氏は「芸術家、出版業、政治家、商品製造業者等の中にはこの型の慾望を高度に昇華発展せしめたものがある」と言つてゐる。

第九章 ビグマリオニズム(偶像愛好)

この純粹なる型と言うのは日本では極めて稀少なものであると思

うが、この本質は、美への尊敬愛着が性慾へ結びついたもの、及び相手に意志がないために自分の意のままに出来ると言う(サチズムの変型か)点も含まれているかと思う。

この型を道徳的に見た場合は至極簡単で、他人の所有物を無断で用いてはならぬと言うことだけである。

然し相手が国宝とか自己の所有物となし得ない偶像であるなら、その写真とか、模造物を作つて、満足するより方法がない。

この型種を地方によつては信仰にもとづいて行つて居る風習がある。少くともその地方ではこの行為を不道徳とは認めて居ないと言える。

第十章 ネクロフィリイ(屍体愛好)

この種型の本質はもう完全にサディズムとフェチシズムの変型であり、そのどちらかに属するものであつて、他型と混用して遂行される場合が多い。

この性慾者は左の二型に分類されると思う。

A 秘密的で内気なサディズム

B 所謂「死者に鞭打つ」式の、死して後迄更にサチを加えたい慾望の現われ

これを道徳的に観た場合

その屍体の所有權(死体の所有權などと言うものが法的に存在す

るかどうかどうか未だ調べてないが」と言うものが常識的に考えて、この型性慾者にある場合（例えば屍者が妻で、夫がその性慾者であつた場合）から考えて見よう。

妻の死後、その屍体と交つた場合、筆者の論法で行けば何等道徳的に疾ましい点はないと思う。

先ず法的に見ても「屍体毀損罪」或は「屍体冒瀆罪」には抵触しないと思う。

問題は「死者への恥辱、或は屍体の冒瀆」と考えられることは、その性慾者並に社会が、霊の存在を判然と肯定するか否かにある。

「霊」の存在を認めれば、「冒瀆及恥辱」が成立する。が生きて居るうちこそ人間であれ、ひとたび死すれば、それは一個の物体にか過ぎぬと言う観かたが成立すれば、「冒瀆及び恥辱」は消滅する故にその性慾者が霊の存在を認めぬ人ならば不道徳とはならず（自己の良心に訴えて）霊の存在を認める人は慎しむべきである。

然し屍者と交わることが果して冒瀆であるか恥辱を加えたことになるかも知然しないのではあるまいか。

例えば最愛の妻が死んだ、夫は妻を愛慕して止まず、悲嘆と執着に取り憑かれて妻と交つたとする。妻も生前限りなく夫を愛して居たとすれば、この行為が果して冒瀆、恥辱になるか疑問である。

故に筆者はこの場合のネクロフィリイを道徳的に宥せると思う。

（第三者には勿論迷惑はかゝらない）

が又こんな場合はどうか

夫が他に愛人を何人も作つて「もういゝ加減に女房の奴死にやが

ればいゝ、後がつかえてるんだ」と思つてゐる所へ詭え向きに妻が死んだ。たまたま夫がネクロフィリストで「恰度いゝ機会だから楽しんでやれ」と犯した場合、これは「恥辱、冒瀆」になりそうである。然し前者の場合も、後者の場合も行為そのものには変りはない。これを一方において「冒瀆」とし一方を恕すと言う矛盾は筆者の採らざるところである。

結局筆者はこの双方共認めざるを得ない。何故なら後者の場合でも、それはその本人の心のうちに秘めてあることで、第三者から見れば果してその行為自体の発見すら困難であり、又発見したとしても獸的なものか、情的なものかを識別することは困難なことであるからである。一方筆者は死者の靈魂の確在に疑問をもつからである。

次に自己の所有権のない屍体の場合は、これは絶対宥せない。然しこれでは自分の妻以外には屍体が得られない訳である。これではその慾望を達することは困難である。

そこで筆者は、サチイズムの項において述べたと同様に「疑似行為」と言う便法を採用したい。

これは生きて居る人間の承諾を求めて、これに死者を装わしめることである。その方法は、青い白粉を使わせて、死んだ振りをせしめるとか、睡眠薬を飲ませて、昏睡状態にさせるとかの方法である。これは相手が承知すれば、不道徳ではなからう。

第十一章 ソドミイ（獸類愛好）

この本質は、求むべき人間の異性が、社会の色々な束縛を受けて



自由に得られない場合、止むを得ず、手近かの動物で代用する場合と、今一つは、その相手が絶対秘密を保持する点と、或る程度自分の意のままになる点、又人間よりも快感を得られる場合、この三つの場合が主となるものであろう。

これも自己の所有であれば一向に差支えない。又他の所有であろうとも、相手の動物の肉体に損傷を与えないならば構わぬであらう。但し此処に問題となることは「人倫」に悖る？と言う点である。それはソドミーに限らず、前項のネクロフィキ又ビグマリオニズムにおいても言えることであるが、これに対する解釈は後章「ホモセクシヤリテット」の項において一括して答えよう。

第十一章 ホモセクシヤリテット(同性愛)

この型の本質は、

- A 幼時種々の事情に依り異性を嫌悪、畏怖するショックがそのまゝ残るもの
- B 同性親の愛慕の変型
- C ナルチシズム(自己愛慕)の変型のいずれかであると思う。

この性行為は、只異性を同性に置き変えただけのことであるから道徳的に何等差支えない。

そこで各型に於いて問題となつた「人倫」に反するものではない

かと言う考え方に就いて言おう。

人倫(本論においては、性道徳に関する人倫のみに就いて言う)と言うものが、何の原因として生じたか。

旧道学者の脳壁に何十年も前の腐つた味噌の如くコビリツいて居る「人倫」を一言にして言えば

「常態と異なる性慾及び性行為は、總べて自然に反し、生殖の神聖を犯すから人倫に悖る」

と言うことである。兎角筆者は勿体ぶつた長たらしい講釈は嫌いだから、彼等の言わんとする所の要点を煮つめたのであるが、結局「不自然」と「生殖行為に反する」の二つだと思ふ。

このうち「不自然」と言うことは社会の生活文化が進歩すればする程「不自然」な行為が止むない場合が生じる。他の道徳の面では大に不自然を美德として称え、こと性に関する豹変して自然を讃美するが如き考え方こそ不自然である。

次に「生殖」の意義を失うと言うことは、なる程重大問題である。仮に全世界の人間の総べてが、同性愛、ビグマリオニズム、ネクロフィリイ等に陥つたら、人間は減少の一途を辿り、百年を出でずして全部死滅するであらう。

結局人類は——一国は——一族は——一家庭は——総て生めよ殖せよで人類はバイ菌の如く繁殖せしめざれば滅亡する。と言つた考えに基いて居て、これはまたあまり人間のハビコつてない頃の考え

方である。日本がもつと広く感じた頃思想であつて、現代の如くラッシュアワーの電車内の如き日本ではもはや通用しない。

又日本人全部がこの型の性慾に転換することなど、到底考えられない。

第一、生殖に反する行為が人倫に悖るなら、産児制限はその最兇なる行為である。

又彼等旧道学者の崇拜おく能わざるところの昔の高僧の性生活を見よ。性慾と言う大切に於て神聖なる本能を抑制する不自然行為を敢えて冒し、終世女を遠ざけると言う人倫に反した行為を行つて居るのではないか、然もこれ等聖者の中に、女性は退け得てもホモの誘惑に負けた人々があることは史実に明らかな所である。

第十三章 其の他の種型に就いて

以上あげた種型の他に

自己愛慕

若少愛

老人愛

近親愛

破花愛好

殺人淫樂症

排泄物崇拜

口淫

擦淫

尿道淫

接触淫

自虐

等の諸型があるが、これ等は前記の系類の支流の型もあり、ナルチズム(自己愛慕)の如く独立した種型もあるが、筆者の道德的觀念の要旨は前記の諸例でのみこめたと思うから省略する。

このうち殺人淫樂症の如きは、当然排折すべきは勿論であるが、これも擬似行為或は妄想に依つて昇華せしむべきである。

最後に筆者は、変態性慾の諸型に對して、これ迄用いられた和訳の熟語の語尾に「症」とか「姦」とか「狂」とか言う文字を附せられて居ることに対して、反對する。

程度を越えざる変態性慾に對して、右のような惡徳を意味する文字を附することは變態性慾讚美論者として到底首肯し得ざるところである。

筆者は本論において、筆者流の訳語を附したが、他により適當な訳語あれば、いつでも訂正するが、「症」「姦」「狂」にはいかにしても賛成出来ない。勿論その種型において、程度を附せられても仕方がない。

「症」と言うより、「性癖」「性向」と言つた方が適當であると思ふ。
(つゞく)

——次号は——

第三部 讚美論

第一章より第四章まで

『闇雲博士の回想』

辻村 隆



親愛なるY君——、どうやら僕の最後の時が来た様だ。この破廉恥極まる僕の回想を、君に忌憚なく打明けることに依つて、君は唾棄すべき僕の、ハイド氏さながらの赤裸々な裏面を知り、或いは僕を蔑すみ、又は反面、一掬の同情を注いでくれるかも知れない。

とあれ、数時間後に、自から己れをこの世から薙り去ろうとするこの僕の、偽りなき懺悔

悔の回想として、最後迄読まれん事を冀希う次第だ。恐らく君が、この僕の背徳に呆れ果て、今迄抱いていた僕のイメージを粉々に打砕いた頃、僕の魂は、天空に飛去つていゝに違いないだろう。

君も御存知の通り、僕は世間一般からは、謹厳一徹、狷介な学者肌の男として知られて

いた。僕はこの謹厳の仮面の下に、文学博士として、学界でも、一風変つた話せぬ男として通つていたのだ。だから同僚が酒席の乱れた時、又雑談のつれづれに、女の卑猥なる話猥談に談笑していても、僕はいつも気難かしげに眉をしかめて、黙々と片隅でボソ／＼と飯を喰んでいた。その様な話に耳を藉すのも汚らわしげな僕の白々しい態度を、君もよ

く見掛けていた筈だ。だが——、僕の心の奥に秘かに潜む、誰も知らない今一つのハイド氏の、アブノーマルな心を見抜いた者があつたならば、おそらく世間の奴等は、僕を非人間か、犬畜生同様に弾劾したに違ひあるまい。博学の君の事だから今更説明する迄もあるまいが、スチーブンソンの「ジエキル博士とハイド氏」と謂う、二重人格を描いた有名な中篇小説を御存知だろう。確か六七年前だったか、スペンサートレシイとイングリットバーグマンによつて映画化されたものが、日本へも来た筈だ。

君を含めて世間の知る、文学博士閣雲龍作と云う男は、所謂、この謹厳極まりなき人格者、ジエキル博士の半面なのだ。今こそ判つきり云おう。僕の心底に潜む今一つのハイド氏の正体は、世にも稀なる異常性格者なのだ。君とても、おそらく昼と夜との生活は相異しているだろう。端麗にすまして道を行く貴婦人が、夜ともなれば娼婦に勝る露骨な痴態を繰り広げていたり、道徳を説く君子然の校長が、若い妾を囲つて、喋々喃喃と戯れていたり、才色兼備の優しき妻が、或いは夫に隠れて、秘かにアブノーマルな夢を盛つた妖しい小説を巷間の雑誌に発表したりしている

かも知れない。宇宙上すべての人類とは云えまいが、その殆んどの生きとし生ける者は、大なり小なり、夜と昼の生活様式が違ふ様に相反するノーマルな性向とアブノーマルな性向を有していると僕は思うのだ。公式の社会道徳と私生活の全てを脱皮した公開を憚る反面を人皆一様に有することは、おそらく君も否定はすまいだろう。唯私生活の赤裸々な状態を、公式生活に濫用した結果が、時には新聞タネとなり、或いはエロ漢、猥せつ者と見做されるのだ。

僕は敢えて云おう。僕の相反する二つの性向が余りにも極端に過ぎる為、閣雲博士が、謹厳をよそおえばよそおう程、その反動で、今一つのハイド氏の性向が、謹厳さに反比例して、アブノーマルへアブノーマルへと駆り立てられていつたのだ。閣雲博士によつて萎縮し、圧迫された感情の吐け口は、怒濤の様

にハイド氏の方へと押し流されて行くのだ。僕が四十才になるまで、独身を保つて来たのも、一つにはこの異状極まりない奔放不逞な、感情を充すために外ならない。更に又、結婚によつて、僕の性格の極端なる半面を、知られる事を懼れたからにもよるのだ。

Y君。窮屈と無味乾燥極まる学界から解放

されると、僕は忽ち俺に代つて、黄昏迫る陋巷へと獵奇と狂痴を求めてさ迷い出るのだ。

俺はニコソンの汗と垢にまみれた連中に交り、一杯二十円の残飯の掻きまざつたシチュ―をさも美味そうに平げては、薄暗い木賃ホテルや、簡易宿泊所に一夜の場を求め、南京虫と家ダニに悩まされ乍ら、あぶれ男娼を抱きしめて、そのやに臭い相手の舌を吸い乍らさも我が意を得たりとほくそ笑んだ事もあつた。俺は餓狼の様にギラ／＼眼を輝かせ乍ら天王寺公園の木蔭から木蔭へと、脚音を忍ばせて這い廻つた事もあつた。

塙のない風太郎共が、公園グラウンドの芝生の中に、下駄を枕に転つて、満天の星を眺めつゝ、半ば腐りかけた、汚臭の漂うぶよ／＼した女を抱いて、饞えた嗅いをまき散らして果敢ないうらぶれた一夜を、俺は木蔭から夜つびいて覗いては、デバカメニズムを堪能させた事もあつた。

通称おかまと呼ばれている男娼の一群が、音楽堂の前の、池のほとりて、一人の仲間の者にリンチを加えているのを見た時など、俺の異常欲求は頂点に達した。俺は未だにありありとあの夜の出来事を憶えている。

女性化した男性の、その私刑行為の何と陰

惨であつた事よ。時刻は既に午前二時を廻つていたと思う。俺は例によつて、夜の涉猟に時を費やし、草叢に寝ころんでその有様を発見した時、リンチを受けたその男？は息も絶え／＼に、ぐるりと仲間に取囲まれて呻いていた。赤い蹴出しからはみ出た毛だらけの足が、鈍い街燈に照らし出されて、なまめかしくも醜かつた。

リンチはこれから本段階に入るところらしかつた。聞くに堪えぬ猥褻な／＼しり声に続いて、男娼等は寄つてたかつて、引きちぎる様にして、彼を裸に剥いていつた。最後に堅く巻いた、下腹部の晒木綿だけが、夜目にも白く残つて、………いるのか、そこだけが変に盛り上つていた。それもぐる／＼と剥ぎとられた後、パーマの華奢な体に………衰えた………の小さな邪………が黒く………んでしおれていた。彼等はそれに眼もくれず、男の両手を左右の立木に轟々と緊縛すると、両脚をそれぞれ三人程の男娼が股も裂ける許りに左右へと引き広げた。今迄、凝つと木立にもたれてそれを眺めていた女にも見まほしい、一際水ぎわ立つた男娼が蒼白い頬に、冷然と笑みを浮べて、静かに男の側に近よると、ナイロンの提袋から一本の

四つ目錐をとり出した。

平然とした面持ちで、むき出された両股の附根へ彼は四つ目錐をぐすつと差し込んだ。夜鳥に似た絶叫がこだまして夜気を震わせ、男は狂つた様にもがいた。

菊の花の中へもむ様にして、四つ目錐はギリ／＼と一寸、二寸とその姿を致して行く。ポタ／＼と血滴が慌た／＼しく地に吸われ、宙に浮き上げられた両股の附根はのたうつている。錐の柄先がすつかり男の肉体に嵌入し終ると、その両脚は離されてドサリと体が地上にのびた。

男娼の用をなすべき個所を破壊し終ると、ゴロゴロと彼等の群は立去つていつた。男は残されて死んだ様に動かない。それでもビク／＼と臀部がケイレンして、硬直した両股がザリ／＼と土を蹴つていた。

Y君——、猥奇とはこんなのを云うのだらう。僕のハイド氏は、夜に夜をついで、巷の裏道を飽く事なく彷徨していた。

僕は又マゾヒストでもあつた。虐められたい縛られたい願望は、嵩じて自縄自縛へと追いやり、自動シャッターで己れの逆吊りになつた裸体を撮り、さまざまの行為中の、その部分をカメラに納めもした。僕は今もその

形身の写真のもろ／＼を眺めつゝこれを書いている。同封するから、僕の浅ましい姿を笑つてくれ給え。

Y君——僕は君の、そのたくましい筋骨隆々たる男性美に羨望と憧憬を感じて、秘かに君に縛つて貰いたいとどれ程思つたか知れない首枷、手枷をはめられた、素裸の僕の足に鎖を巻きつけて、石ころ道の大通りをずる／＼と晒者の様に君に引曳られて行く夢を僕は幾度となく見た。何かの折に校内の職員便所で君と並んで放尿した時、君のズボンの両側を押えた両手の間からチラリと覗いた、………ものを、横眼で窺い乍ら、僕は瞬間、君の人間便所になりたい願望にかられた事もあつたハハ、可笑しいじゃないか。それ程君に憧憬と願望を抱き乍ら、校内の教授室では、机一つ隔てゝ毎日顔を見合せて居ても、時には鹿爪らしく論議はしても、毛筋程の気振れも見せぬ謹厳さだつたからね。

君は恐らく僕のことを、うるさ型の先任教授、話せぬ朴念人だと思つていたに違いあるまい。

Y君——、僕はこうしたマゾヒストであり乍ら、その癖反面サジストの傾向も充分に具備していたのだ。

僕はサジストのやりきれない慾望に燃えてはあふれた浮浪女の中から、とりわけ醜い女を選んで、木賃宿の一室で、散々に……玩弄したりした。容貌に自信のない女程、僕の云う儘になり、僅か二三百円の手金で、どんな恥態もあからさまに見せてくれた。僕のつくり上げた女百態の写真を君に見せたら、或いは君は卒倒するかも知れない。免も角、想像する限りの凌辱と、緊縛と、責めのギリ／＼迄を実行して見たのだから――。百葉の写真も同封しておく。僕のハイド氏の面の百鬼夜行の態を知るよすがにもなろう。

Y君――君も知る通り、教壇での僕は、実に謹厳極まるものだ。僕のニツクネームが「カチンコ」と云う仇名であつた事も知っている。それは全く要領を得た仇名であつたわけだ。カチ／＼のオカチメンコだつたからね。しかし、僕が早くから、サジストの傾向を帯びた異状性格者であつた事は、僕の論文を見ても明らかな事だ。唯学界では、僕の日頃の謹厳さに瞞着されて、誰もそうした傾向に気付かなかつただけのことだ。

試みに僕の論文を憶い出してくれ給え。それは、「徳川初期に於ける、キリスト殉教徒の精神分析」であつた筈だ。在学当時から、

既に胚胎しつゝあつた、僕の観念的サジズムは、早くから極端な殉教者の責苦、拷問の様に、少なからぬ興味を抱いていたのだ。僕はその為、慾求もだし難く、一夏、休暇中を利用して、遙々九州に渡り、天草から島原界隈を涉猟し、長崎では文献を漁つて、当時の殉教者の哀れむべき、苛酷な拷問の状態、責苦のさま／＼をつぶさに研究調査して見た。

その頃から、僕は斯うした無抵抗主義の弱々しい殉教者を何がなし軽蔑する様になり、太々しく彼等を責めさいなんだ、長崎奉行や拷問役人の、責め方に激しい興味をそゝられたのだ。

Y君――、この事は、当時の軍国主義による、尚武精神からでも何でも無い。だから、現在これら殉教者の群の徹底した殉教精神が非常に尊ばれているのを知つても、別段僕の当時の観念とは何ら変りはない。余りにも弱い小羊に対して齒掻きを憶えるだけだ。

否その頃僕は反つて反動的に、僕自身が彼等を責めさいなむ立場を想像しては、苛酷な新手を夢想してペンを走らせ、僕の創作による、殉教者への責折檻を巧みに織り込んで、さもそれが実際に行われたが如く、潤色脚色して、論文に綴つて発表した。現在、よく雑

誌等に掲載する殉教者の様相のうち、その何分の一かは僕の想像上の産物であるとは、恐らく君以外には知らない事なのだ。ハハ、面白いじゃないか。

だが、結果、評判は散々だつた。余りにも加虐趣味に走り過ぎて、陰惨、苛酷を極めたからだ。背骨を割つて鉛湯を注ぎ込んだり、〇〇を縫合してしまつたり、羅切した後へ焼火箸を突込んだり、如何に僕のでつち上げた殺りくと拷問の手段が、残酷を極めていたか若し興味があれば、校内の論文保管室を訪れて、一度、とくと僕の論文をよんで呉れ給え然し、学部では、僕のその研究の努力――その実、半ば僕の創作によるのだが――を認めてくれて、免も角論文はパスして、僕は学位を得る事が出来た。

どうも話が脱線した様だ。僕の終局の時間も刻々と近づいて来たので大急ぎで話を戻すでしょう。

Y君――僕は博士号をとつてからも、己れの体内ではボクとオレが火花を散らして相争つていた。表面上は面白くもない中世紀の農民、平民の動向、生活環境などの研究をつゞけ、学生達からもさして相手にされぬ講義をつゞけていたが、体内に鬱々と流れる、異



常な願望は押えがえがたく、一人暮らしを幸いにハイド氏の仮面を被つて、探偵の放浪をつづけたのだ。

その夜も俺は、すゝけたいでたちで、浮浪の群に交つて、天王寺公園の音楽堂の芝生に転がつて、妄想をたくましくし乍ら、星屑を

見つめていた。

「クモさんでしよう！」

突然降つて湧いた様に、俺のハイド氏の名を呼んで、頭上に立つた女があつた。俺は驚いてムクリと起き上ると、マジ／＼と女の顔を見つめた。俺の驚きにお構いなく、女は言

葉を継いだ。

「私、縛られたいの——。どうお気に召す儘に……。知つてるのよ、あんたが女を色々に縛つたり、責めたりして写真を撮つたことをすつかりその女から聞き出したんだから——驚かなくてもいいわ。私みたいな物好きな女もあるのよ世の中には……。ねえ、縛つて……、素裸にして責めて……」

「貴女は一体誰なんだ？」

「ホホ、小百合とでもしようかしら。どうせお互に本名を云つてもつまらないし……」

俺は小百合と称する女を凝視した。わざとらしい毒々しい化粧の奥に、品格の高い端麗な滑らかな皮膚が隠されている様に見えた。三十前後、否ひよつとすると三十七八にもなっているかも知れない。臨たけたきり／＼と締まつた男まさりの容貌、ハキ／＼した言語動作は、この女がマゾヒストかと俺は己れの眼を疑つた。同性愛の対象になる女のタイプは凡そ反対のサジストを彼女に連想した。

一瞬惚れとは、こんな場合を云うのだろう。俺はこの自分に好一对の小百合と云う女に、激しい興味を抱いて、行きつけのホテルへと彼女を伴つて急いだ。異状性格者のアバンチュール。お互に素性も知らぬ同志が、縛

り度い慾望と、縛られたい願望に胸を疼かせて、ホテルの門を潜つたのだ。

Y君——君はこうした事実を捏造と考えるに違いない。併し、事実は実に奇なるものだ。俺も小百合も、チエキル博士の面は、毛程にも見せなかつた。敢てこの場合、小百合もと云いたい。外でもない。彼女の朝から夕方までの行動は謎に包まれて、窺い知る術もない程に完璧なる酒癖をしていたからだ。

俺がラジオ塔の下で待つ夜もあり、彼女の待つてゐる夜もあつて、時には空しく逢えずに帰る夜も続いたりした。

そして相逢う夜、俺と小百合は獣のように狂い廻り、肉と鞭が戯れて、飽く事なくサドとマゾのお互の慾望を満し合つていたのだ。

小百合と云う女は不思議な女だつた。どうして思いつくのか、次から次へと新規な責手のあれこれを考え出しては、時には俺のマゾの傾向を知つて、夜叉の様に、スラリとした体に黒タイツのみの裸姿で、俺のブリアツプをポーポスを巧みに廻り弄り、何時の間に準備したのか、鉄鎖の枷などを俺の両手足にはめて、痴人の愛のナオミの様に、犬這いの俺の背に君臨してビシヤリ／＼ポーポスを交互にしばいたりした。

総ての支払いは待たせた方が受持つた。そして何かの都合で一週間も小百合に逢えぬ夜は、俺は痴呆の如く公園をさまつた。

或夜、小百合は俺に一冊の雑誌を見せて、「こんなもの、書いてるのよ。どう、あきれた？」

俺は手にとつて彼女の示したものを見た。

「淫火」と題があつて、松井彌子作としてあつた。俺はしばし拾い読みするうち女主人公の小百合夫人が小百合に余りにも似てゐるのに愕然とした。しかも描かれた登場人物の行動のすべてが、俺と彼女によつて、ホテルで繰り拡げた行為の数々にその儘だつた。

俺は小百合の、わざとらしい毒々しい化粧の裏のジエキル博士の正体を知りたい慾望にとらわれた。

いつかラジオ放送で、婦人講座の時間に聞いた女の声によく似てゐる？……。

文化人の催しの節、学校からの招待で、一度顔を出した時、淑やかに交る紅一点の女にそこはかとなく相似点を感じる。

知名人の素人芝居で、見かけた様な氣もする。しかし、それが事実とすれば、彼女のジエキル博士の正体を知つた時、俺の仮面のハイド氏も虚しく崩壊する時だ。

広い世の中に、俺の如きハイド氏がこゝにも存在していた。俺はその事実に関りなき欲を覚えた。

銃の輝き、磨かれざる珠の如き小百合の、ベール一枚を隔てゝの彼女との、夜のあの楽しさ。俺は全精力をぶちまけて、小百合と二人の夜を、ガニアミの歓楽の一夜の様に耽溺し尽した。

逆吊り、棒縛り、駿河責め、それに伴う数々の緊縛も、愛の笞打や咬みつきも、すべてが限界ぎり／＼の線まで行つた。そして、この俺も、ある時はだるまの様に転がされ、ポーポスにろうそくをゆらめかし、ハンモックの様に吊られて、彼女から凌辱をうけて歡喜にもだえた。

ダブルベッドのマツトをとり外して、スプリングの俎然とした上に、四方のベッドの足に、小百合を束縛しては、さまざまに料理する夢想で遊ぶ事もあつた。

「いゝかい、今夜は腹を断ち割つて、ホルモン料理をやるのだ。子宮は特に精力がつくそうだから、うまく取り出さなきゃ——」

「えゝ、いゝわ、あとであなたの……吸物を戴くことにするから——」

こんなやりとりをして、俺は小百合の全身

を撫でさすり、刃の落した刺身庖丁で、スーツ／＼と、腹に赤い筋がつく程、押しつけて引いた。

又、或る夜は生きた儘解剖されるため、彼女はベットに仰臥し、両足を高く上げ、上から吊し、俺の医学的実験の対象にもなった。

彼女の情熱の根源を探るべく、俺はギネの使用する種々の器具をテーブルの上に羅列し、あひるの口の様な開孔器を狭んで、……

……、一号から二十号までチーズの様な型をした、金属性のブーシーを次々と抜きかえていったりした。

尿道結石の想定の下に、俺はカテーテルを挿入して、……。ゴム管のさきから、チロ／＼と出る……

その甘酸っぱいほろ苦さに陶酔もした。洗滌器による温湯の洗滌は、殊の外小百合を喜ばせた。……、その為部分的にもした。

こうした医者ごっこが奇妙な形で行われ、彼女が女医になれば、俺は痔核の想定を下されて、両手足を縛ってキリ／＼と滑車に獲物の様に吊された……、彼女は容赦なくグリセリンの溶解液の灌腸を続け、坐薬の代りにローソクを溶いて固めた坐薬様のものを挿

入し、その出るのを防ぐ為セメダインを絆創膏にぬりつけて閉じたりした。

ローソクの溶液を、合成樹脂のスポイトに満たし、注入した時は、流石に焦熱と、排尿出来ぬ苦しきで、臆て柔かく固まった棒状のものをピンセットで摘出するまで、俺は不安に悩みつゝも、底知れぬマゾの極地に切り切ったこともあった。

幸いな事に、俺も女も、マゾでありサドであつて、交互に吐け口を見出しては、飽くまで愉悅に浸りきつた。こんな生活がどれ程つづいた事だろう。

Y君——、そして遂に破局が来たのだ。

君もあの日の事件を覚えてるに違いない「女流作家、浜本富枝女史、惨殺さる」と、大新聞の三面記事をでか／＼と飾つたのを——。

あの夜、彼女、即ちハイド氏の小百合の感情は特に強かつた。何故あの夜に限つて、あれ程マゾの慾望に燃えたのか、俺もその疑問に悩まされている。

彼女は逆吊りにする様俺に希つた。俺はその通りしてやつた。陶器の様に白々と滑らかな肌が桃色に染まつて、充血した顔はこよなく美しかった。

「お願い！ 両手をベットの枠に縛つて、ギリ／＼と締めて頂戴。早く／＼／＼」

それも俺は彼女の云う通り、宙に浮いた両手が、俺の首筋に巻きつけてきたのを、ぐいと外して両手を縛ると、縄の端をベッドの枠に廻して、グイ／＼と引つ張つた。小百合の体は逆吊りに硬直して、ピンと一線にのび、足首の縄が皮膚に喰い込んでくれる許りだった。

「股から裂いて料理するの、いゝことね。一線にザーツとひき切つてしまうのよ。庖丁はそこにあるわ。早く早くしてね」

小百合は呻き／＼うつとりとした様に叫んだ。俺は云われる儘、小百合の脱いだ衣服の下新聞紙に包んだ刺身庖丁をとりあげると、疼く様なサドの快感に氣もそゝるに、「いゝかい、すつぱりと立ち割つてやるぞ」と云うなり、ぐいと庖丁を当てると力任せに引いた——。

「ヒーツ」

小百合の悲鳴——。そして、バツと散つた血漿を浴びて、俺は呆然と立竦んでいたのだ。

ドキ／＼と研ぎすまされた刺身庖丁の刃先からポト／＼と血滴がしたゝつた。

◆告白と手記と体験◆

懸賞募集

★賞金★

優 秀 作 一篇につき 三千円 若干篇
佳 作 一篇につき 二千円 若干篇

規 定

- 一、枚数は一稿十枚から二十枚まで、若し超過しても三十枚を超えないこと。
- 一、必ず未発表のものたること。
- 一、原稿第一頁に懸賞告白と朱記のこと、原稿の返却は致しかねます。
- 一、締切は別に定めませんが、入賞作品及びその経過は誌上に発表します。
- 一、賞金は入賞作品発表と同時に御送りします。

●告白記の募集●

- 一、上記の懸賞とは別に月例通り皆様の真実あふれた告白記を募っておりますから、どしどしお寄せ下さい
- 一、文章の巧拙や長短、用紙、書き方等一切御自由です
- 一、投稿者の本名や其の他一切の個人的秘密に関する事は厳重に秘匿いたします。誌上への発表は匿名で結構です。
- 一、誌上へ掲載した分は掲載後相当謝礼を差し上げます
- 一、原稿は御返戻申し上げかねますが、係よりの連絡は差し上げます。
- 一、原稿の御送付には開封の上第五種郵便百瓦まで八円にて御願ひ致します。

(編集部)

俺は新聞を見て、小百合の正体が、あの有名な女流作家浜本女史であることを初めて知った。

無我夢中、飛び出した儘、小百合のクワツと見開いた眼がいつ迄も俺を追い掛けてくる様だ。俺はあの夜、どう云う気持ちから、あの刺身庖丁を買い求めたのだろう。

当局は必死となつて、この虐殺犯人を追つてゐるらしい。

Y君——、ハイド氏のクモさん事、文学博士閣雲龍作の正体曝露の日は時間の問題だろう。僕の机の上に、サイダーに交えた青酸加里が僕の呑むのを待つていてくれる。

Y君——、けたまひサイレンの音が聞えて来たよ。どうやら僕の家らしい。

俺のハイド氏よ、永久にさようなら——。

悪徳の塊り、ハイド氏があの日、日頃射つていたヒロボンの切れた兇暴性を帯びた僕であ

つたとは今更云つても追つかぬ愚痴事だが、せめて、この行為がヒロボンの仕業に転嫁したい僕の今の気持ちだ。

天国から小百合の呼ぶ声がきこえてくる様だ。喉が喝いた。サイダーを呑むとしよう。どうやら、警官が僕の家を表を叩き出したらしい。

では左様ならY君——。地上より永遠に

非小説

性液

(三)

伊藤晴雨

下谷区谷中坂町九十番地と迄云わなくともモデル屋の宮崎といえは一度で判る位、東京美術学校御用という看板の下に日本に一つしか無い、商売往来に無い商売は当主の宮崎幾之助が東京美術学校に於ける陰然たる勢力に外ならずと知られ、毎日曜日に来る裸女のモデル市は画家以外の人々は絶対不入の人外境であつて、豊満な肉体からカモシ出す一種の

雰囲気は三百人以上のモデルが茶疊の大広間に一糸纏わぬ女人王国を現して居た。茲には審査員も無名画家も一視同仁、恋愛と芸術とが万字巴と入り交れて、三角四角五角六角、まだく上つて何角かの関係さえも珍しからず、二三十銭の菓子包を持つて素見に来る美術学校の生徒もあつて、其頃の宮崎といえは飛ぶ鳥をも落す程の画家仲間勢力があつたものだ。裏と表は一枚の硝子にさえ、一枚の

油揚げにもあるので、宮崎幾之助という男がかくも日本の画壇に勢力のあつたのは他にも大きな原因があつて、これは現在でも祕密にされて居る様だが、当主の幾之助は我國の画壇の最高權威、橋本雅邦や狩野芳崖の育ての親とも云う可き岡倉天心の腹違いの弟であつた事である。

僅か廿四才の岡倉覚三が廿七才の横山大観を教えたという事のみを以てしても其偉大さが判ると思う。謂う勿れ、明治時代は事が仕易かつたと……いくら明治時代でも馬鹿やボンクラ斗り揃つて居た訳では無かつたのだ

日本洋画の淵源を尋ねたらば、或は寛永頃に火焙りの画を西洋風に描いて辻々に立てたという話が残つて居るが、どんな描法であるか伝わつて居ないので大昔の話は暫く措いて

外人の手に依つて直接に教えられたのは、著しい例としては慶応年間？に渡来した英国人ワグマンであろうと思う。ワグマンの弟子に小林清親があつて日本の版画面界に大なる貢献をした事はよく人の知る所であるがビゴーなどより一足先きに日本の風俗を描き、其作品は現在横浜市立図書館や東京芸術大学に沢山所蔵されて居るが、ワグマンは元英國の新聞通信員の仮面を冠つて日本へスパイの役目を帯び渡来し、横浜に住し湖南三浦半島や東京湾の測量をして居る中に横浜野毛山の水茶屋の娘お春といふ仲になり、日本の風俗習慣が好きになつて、目的のスパイの役目は日本に不利益を与えるものだといふ観点から本国への通信を怠る様になつたので、本国から機密費の送金がなくなつてしまつたので、お春と共に野毛花咲町の裏長屋に住い、英語を教えたり洋画を教えたりしてカツ／＼の生活をして居たのが晩年であつたというが其頃は、洋画は人間の生き血を搾つて描くから生きている人の様にかけるのだ等という時代でモデルになる人などは勿論少なかつたのであらうと思われる。

其後明治九年伊太利人ボンタネジー氏を聘して日本人に洋画を教える様になつても女の

裸体モデルなどは夢にも使えなかつたに違いない、寡聞な私が女のモデルというものを知つたのは明治廿三、四年頃、浅草今戸に窯業の名人で弁司という人の娘、本名月谷はつという評判の美人が当時塑像の天才といわれた小倉惣次郎の細君となつて幾多の傑作を残して居るが、それとても全部コスチュームで全裸体のもではなかつた。正確な年表的なものでは無いけれども裸体のモデルを使つた作品は、明治卅年前後黒田清輝氏が帰朝後の作品で、裸体画排斥論と賛成論とで大袈裟に云えば日本中引つくり返る様な論戦をしたのは今から見ると馬鹿げた様に思われもするが、裸体画の売場という点から云えば当時不思議に大問題にならなかつたのは当時初めて出来た前記岡倉天心の率いる谷中の日本美術院展覧会の出品で故人高橋広湖の出品、元冠の図であつた。

高橋広湖は松本楓湖の門人で夙に出藍の誉れ高く、養母は吉原で有名な金瓶大黒の小紫という名妓で、金冠をかぶり、狩衣をつけ、金の装束を指して男舞を舞つたという有名な女であつて、此養母の薰陶によつて大家となつた人で、元冠の図は紙本でタテ五尺、ヨコ一丈一尺余の大作で図中には全裸体の美女が

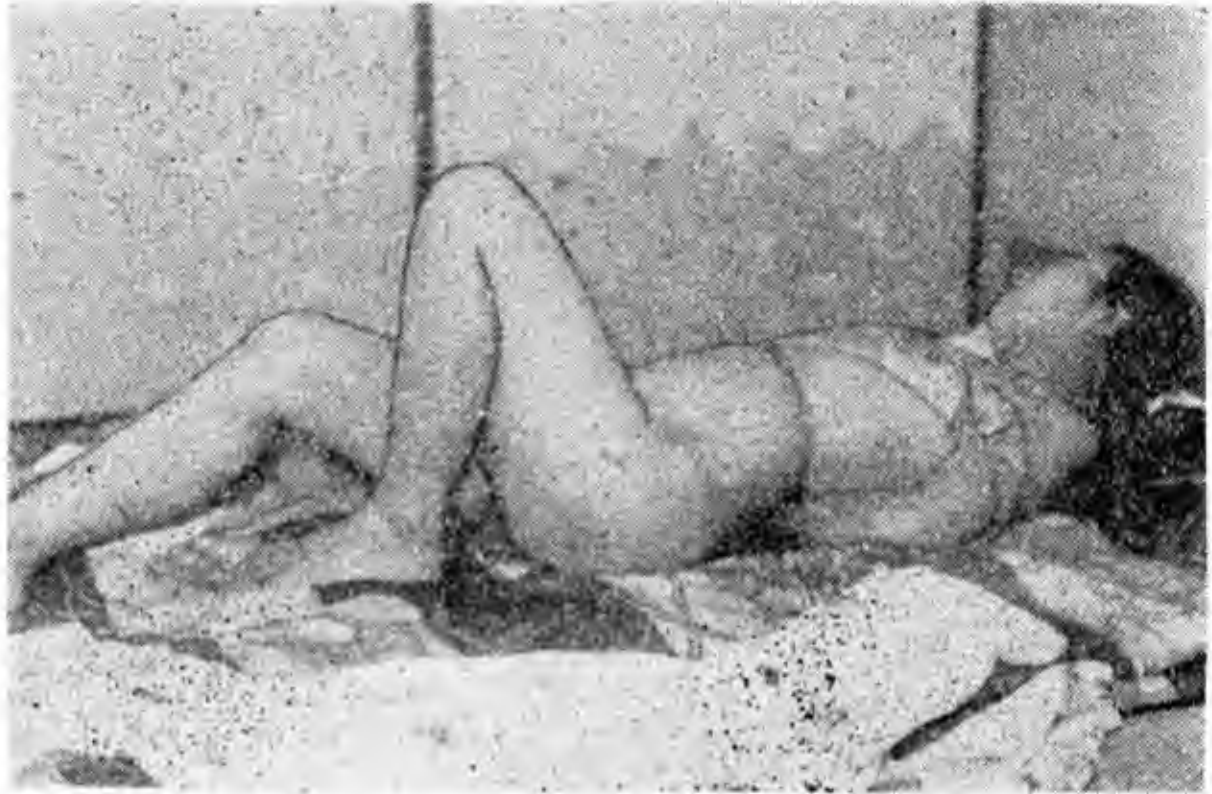
両手に縄を廻されて、二人の兵士に海岸を引摺られて居る図で、裸体で縛られた女が十余一人一図に収められて居り、全部黒が主になつて居たと覚えて居る。此写真は当時の日本美術院の機関雑誌「日本美術」三十何号かに載せられて居るし、東陽堂発行の絵画雑誌にも載つて居るので、今でも時々見掛ける事があるから、貴のコレクションをやつて居る人にモデル女といえれば何か特殊な人間の様に世間では思つて居る。併しモデル女も亦人であつて、意地もあれば人情もあるが、時に或若い画学生などが青春の血を沸らして夢中になつてあたら悲劇を生じる場合もある。余り古い話も現代の読者には興醒めであろうから、大正時代のモデルを語り、縛りのモデルが如何に困難であつたかという事を語れば、現在のヌード写真が△△で容易に手に入るなどという事は全く夢の様な話で大正時代のモデル女は縛られるのを甘受する女は一人も居なかつたので、女優の少なかつた当時は勢い男性である女形の俳優を縛つて写生するより他に方法がなかつたが、其頃東京美術学校に勤めて居た秋田県生れの鈴木かねよという女が居た。

現在の北区田端町の或る洋服屋の二階を借

りて母親は朝な／＼納豆、チアツト——と籠へ入れた納豆を売つて歩いて居るので、一名「納豆屋の兼ちゃん」で通つて居たが此女頗る美人、芸さえ出来れば新橋へ出しても恥かしくない位の美形であつたので、洋画界の元老であり、帝展の審査員であつた藤島酒二先生などは此女にゾッコン参つて仕舞つて画室のドアを内から鍵を掛けて、ソレカラ……という次第、或時読売新聞の美術批評家で関如米という悪徳記者が用事があつて藤島氏を訪れ、勝手知つたる画室のドアを開けると掘げられたのは一幅の活人春画、藤島画伯はカンバスを投げ出し、出て来たので、女の裸体モデルを見馴れた如米も流石に呆然として以来「助藤さん」と云えば美術学校生徒の中で通語となつて仕舞つたという位に画家に対して従順なモデルもある。此おかねという女、別名を「嘘つきお兼」といつて其頃日本橋区呉服町に手拭屋を開いて自作の版画や自作の手拭を売つて居た竹久夢二君にも貞操を捧げるなど、美貌を幸いに盛んに学生を釣つて居た。山口蓬春氏などは此女に恐れを為して「兼公はすげえ」と計りに敬遠して居たのは流石に賢明であつたが、女に血道を挙げた山田某という美校の生徒が国からの送金を

全部此女に入れ揚げ
てしまつて寒中シヤ
ツ一枚、小倉の校服
一枚というトコトン
迄行つて、友人間に
は借金だらけ、年の
暮というのに炭も買
えない迄に落ち込ん
で仕舞つた時は十二
月十七日で、浅草観
音の年の市でおかね
は山田の窮境を知り
乍ら、羽子板を買つ
てくれと云い出した
惚れたが弱味の山田
は学校の服を脱いで
質に入れ、シヤツ一
枚の上へ友人のマン
トを着て、寒さを堪
えておかねと共に浅
草へ行つて漸く一枚
の羽子板を買つてやつたという笑えない様な
悲惨な話もあるが、此女が縛られるのが大好
きで其頃日本美術院の院友であつた戸張孤雁
氏の許に通つて縛られるモデルになつて居た

これは悪質モデルの写真です



が、此女西施の何と
やらで打たれて顔を
しかめると美しくな
るといふ妙な女で、
後には麻布六本木の
某酒屋に嫁に行つた
が、肺を病んで死ん
だ。此女金銭に掛け
ては凄腕で嘘八百で
巻き上げた金を貯め
るのが何よりの楽し
みであつたが、竹久
夢二氏が外国から放
浪の旅を畢つて帰し
肺を病んで富士見高
原の正木不如丘氏に
救われた頃は竹久氏
は貧乏のドン底で、
子供の学校の月謝に
さえ差し支えて居た
のを見兼ねて月謝を
払つてやつたのは珍らしいという評判があつ
た。

.....

そうかと思えばモデルから清元の師匠にな

つた女は現在の清元梅吉社中で上調子の名人
(?)と呼ばれて居る清元梅比呂で喜多村や
水谷が「婦系図」の「湯島の境内」を出す時
には此人ならではならない様になつて居るが
鍋木清方氏の傑作「試みるゝ女」のモデルは
此人であつて、現在でも女流の清元として成
功者の一人に数えられて居るが、この女など
はモデル中の異色といつてよからうと思われ
る。

.....

更に今一つ悪い方の例としては誘惑し易い
女の裸体モデルが積極的な行動をとつて自分
の方から関係をつけておいて、モデルの背後
にある人物を以て相手を脅迫したり、或は結
婚を強要したりする事実がある事で、事の序
を以て記しておけば、芸術大学の方でも一々
モデルの素行調査をやつて学校へ出入させる
訳でないで、稀にはこういう悪質のモデル
もある事を知つて置く必要があると思われる
ので敢て其事実を有りの儘記す事にした次第
である。

横浜市神奈川区宇三ツ沢に豊顕寺という桜
の名所がある。其寺の傍に渡辺兼子というモ
デル女があつて、其女の姉も亦宮崎のモデル
になつて居て、今は同所の歯科医の妻になつ

て居る其女と兼子という女と兼子の母親と、それに附いて居る或る種の男と互に連絡して兼子と関係した男を脅迫して結婚を迫り、盛んに金銭を要請する。相手方が之に応じない場合は家庭審判所を瞞着して、処女を犯したと係り官の同情を求めて、関係者が多少社会的地位のある人と見れば法外な慰謝料を吹つかけるという危険人物で大酒を呑んで何とかを丸出しにして大道へ寝てしまふ位平気な女で、年は二十歳に近いが一見十五、六にしか見えないという化物である。筆者の知人が此女に關係して手酷く痛められた事があるので現代のモデル氣質の一端として記して読者の参考にする所以である。

百貨店の売り子でアルバイトのモデルもあれば、戦後派の未亡人でモデルになつて居るものもあるが、皮膚の色が悪かつたり、身体が萎びて居たり、戦前の如き発潮たる良質のモデルが極めて少くなつた事は事実で、モデルは神聖なり々という自分の誇りを持った女が少くなつた事と、教養の点では社会扶勢と正反對に低下した事は事実である……といつて愚老は昔斗りを褒めるのでは無い事を断つておく。

現在のモデルに売春の事実ありやといえれば残念乍ら之れ在りと云わざるを得ない事を悲しむのである。一日三百円という学校の支給額では生活して行けないと云ふ事も原因するかも知れないが、明治時代のようなモデル女の誇りが無くなつた事は何としても否定出来ないと思われる。

昔と今とのモデルの相違は最近男のモデルが少くなつた事で、支給額の女に比して安い事と、男モデルを雇う人が少くなつた故でもある。需給共に絶無に近い事である。宮崎の外に最近上野桜木町に約三百人以上のモデル女の団結して居る所があるが、被縛ヌードには面倒な条件が伴うというので、依然として宮崎から被縛ヌードのモデルが支給されて居る。

以上は現在の女モデルの片鱗であつて必ずしも全体では無い。被縛ヌードのモデルは容易に得られるが、減多に優秀な女に出遇つた事が無い。

昭和二十七年埼玉県川口市川口仮設劇場に於て、前記の悪質モデル渡辺兼子が臨時に女優になつて水責の芝居をやつて真実のびて仕舞つたかと思われた事があつたが、此話は後章に譲る事にして置く。

女モデルを使つてヌード写真を撮す人が其モデルと肉交がある方がいゝか悪いかという問題に就いて私は屢々質問を受ける場合がある。それは肉交があれば或る特殊の場合だけは便利であつても大体に於て緊張味を欠く恐れがあるので、モデルとの肉交は無い方がいいと云う考え方をして居る。

筆者は曾てモデルを女房に持つて責の實驗を試みた事がある。併し正直に云えば余り自慢にもならない話で、實際問題としてモデル料の節約と女を弄んだという(他人から見れば)結果になるので、其為の實驗的効果は多大なものがあつたが、一方社会的には大きな損をして居る事に気が附いた。

現在ヌード写真を撮つて通販をやつて居る某という男は被縛モデルと遊ぶ資金に窮して友人、先輩に迷惑を掛けて居る。こうした事は斯業の爲に喜ばしくない事で其撮影上の効果は下らぬ写真になつて現れて居るので、現在のモデルで被縛写真を撮されるモデルで決死的の冒險をやる勇氣のある女があるかどうかを私は疑つて居る。

×

×

×

蜘蛛と蝶々

(最終回)

飛田良二


 kato


「あゝ自分はまだ死んでいなかった……」
 意識をとり戻した里枝は、昨夜の冒険がまざまざと蘇り、取り返
 えしのつかない絶望がみる／＼枯れつくした筈の涙になつて臉の外
 に溢れ出しました。

鉄格子のある小窓にはすっかり夜の気配が見えます。(今夜はク
 リスマスだ) そう思うと里枝の胸には新たな感慨が切なく迫つてき

ました。早朝には汽車で母と妹がこの東京に着いている筈なので
 す。案内知らぬ上野の駅頭で、とまどつてゐる母と妹の姿が目に見
 えるようでした。

「お母さん！」

思わず声を挙げた里枝は、初めて現実に戻つてセーター姿のまゝ
 でベッドに釘付けにされている自分を発見しました。毛布一枚を通

して急に寒さが身にしみると、動かしだした華奢な足首に冷たい鎖の音がして、完全に捕われの身となつた自分をイヤという程思い知らされました。見事な失敗に終つた昨夜の結果が、悪夢のように湧き上つてきたのです。

——撮影のお仕事がとても忙しいので、今年も帰れないと思ひます。春になつたら、一度東京見物においで下さいませ——

会いたい思いを押えて出した母への葉書がどう解釈されたのか、昨日の昼すぎ、所宛の「アスアサミヨトウエノツクハハ」の電報となつたのです。美代とは彼女のたつた一人の妹なのです。（きつと冬休みになつた妹が母を説得したにちがいない）電報を受け取つた時は、もうすでに母達が汽車で故郷の駅を発つてゐる時刻でした。

「ほう、お母さんが上京されるんだつて？ ミヨつてのは妹さん？ こりや素敵なクリスマスになるよ、それに僕にとつても願つてもないチャンスだ！」

プロデューサー室から出てきたM助監は愉しくてたまらぬように、電報を手にした里枝の肩を叩くのでした。里枝はMの気持は解りすぎる程よく解つていました。それだけに一層いたゞまれない気持ちにかられるのです。

（Mさん、里枝は貴方の思つておられるような、清純な娘じやないわ。汚れ果た女、二匹の悪魔の手によつて、さんざん玩具にされた身体なの）

そればかりではありません。カフアツションモデルの大成功の朗報は会社側をして一躍里枝を大スターとして売り出すべく、急契、「第二部」の製作を一決し、主なるスタッフにより緊急会議が終つ

た所だつたのです。

電報を手にしたまま考え込んでいた里枝は、はしやいたMに促されて人影のない所の食堂迄行きました。——あゝ、それから急な用件を思い出した、きつと君の抜擢を嫉んだ奴の夕チの悪いユスリだと思ふんだが——

そんな前置きで語り出したMの話は。

昨日の事、及川と名乗るMも知らない目付の鋭い中年女が突然来訪して、「御川里枝引抜き防止運動の資金を請求」したというのです。あゝ来るものが、とう／＼来しました。瀬田達の企んだ芝居であることは、その及川という名刺を置いていつた目の鋭い中年の女が過日、あの怪しげな貸アトリエでの意地の悪い女に違いないと直感されたからです。

里枝の最も恐れていたものが来たのです。明日の夜はMと約束した楽しいイブの夜、所が悪辣な瀬田達は『例の「フィルム預り料」を忘れずに持参せよ、まだ少し時期は早いですが急に金が入用になつた』という一方的な命令が伝えられてきていたのです。

（もう辛抱は出来ない、どうしても今夜の中にあのフィルムを手に入れなければ）

その夜は粉雪まじり風が横なぐりに吹きつけていました。覚悟をきめた里枝はジャケット・セーターにスラックスという身軽い身体をオーパーに包んで出掛けました。瀬田のスタジオの燈が消えるのを寒風にしびれをきらして電柱の陰に佇んで待つてゐる中瀬田がオーパーの襟を深々と立てゝ外出してゆきました。留守番の女は廊下づたいの炊事場の横にある部屋にいる筈です。今瀬田が出てきたばかりの入口から勝手を知つたスタジオへの階段を両手にレインシュ

ーズを提げて登つてゆきました。足の裏から伝つてくる冷氣に、里枝はがた／＼と膝頭が震えるようでした。勇気を起して飛び込んだスタヂオは、人の気もないまゝ消し忘れたスタンドの灯が只がらんとした部屋をぼんやり照らしていました。

（さあ、今だ、あのフィルムさえ焼きすてゝしまえば、彼等との關係を絶ち切る事が出来るのだ。）

戸棚の中から探し出した十六ミリのフィルムケース、躍る胸を押えて開けた中は？ 灯にすかして見ようとした里枝の傍に音もなく近づいて右腕を握つた男、彼こそ、悪魔の片割れ、滝尾だつたのです。里枝はフィルムを抱えたまゝ、へた／＼にその場へくずれてしまいました。

今はもう会いたくもないと思つた母も、同じ東京の空の下に、と思うと居ても立つてもいられませんでした。二日も無届欠勤した撮映所の事。心配しているMの顔。（母に一目会えたら、Mに一言。それで私は……）

そんな事を思うともなしに思つている時、部屋の外で鍵の音がして灯がつくと瀬田が入つてきました。

「おや、お目ざめだね、お蔭で約束のフィルム預り料は間に合ひなかつたじゃないか」

残忍な眼をぎら／＼光らせて瀬田が近寄つてくると、邪慳に毛布がはねのけられて里枝が思はず身をよじらせました。

「さあ、一つ今夜は約束違反のお礼にたつぷり可愛がつてやるぜ」ベッドのアームに絡ませた鎖をとると、あゝ、なんという事でしよう。両足首にびつたりはまつた鉄の環には三十軒ばかりの黒い鎖

がすつかり里枝の自由を奪つてゐるのです。瀬田と滝尾に発見された二十三日の夜から昨夜にかけて受けた凌辱の数々が今更のように自分の肉体に蘇つてくるのです。

「立つて、こつちへ来るんだ」

瀬田の声に身を起した里枝の眼には隅に投げ出された泥の乾いたレインシューズがまるで自分の現在を暗示しているように思えました。歩きたびに両足首の鎖がちや／＼と鳴ります。連れ込まれたスタヂオの中はストロブが音を立てて燃え、むつとする暖気です。中央の台上に立たされた里枝は天井から突然注いできた強烈なライトに一時、目がくらんで足首の鎖の音を響かせて台上に倒れました。瀬田は手にした黒いマスクを里枝につけさすなり、暗闇へ向つて声を挙げていました。

「皆さん、今夜はクリスマスにふさわしい贈物としてこの見事なデコレーション・ケーキを用意いたしました。これからどんな料理法が行われるか、どうか、ごゆっくり御覧下さい」

一角からかすかなざわめきが起りました。瀬田の合図でサンタに扮した滝尾が鞭を手にしてゆつくりと近づいてきます。哀れな捕われの蝶々からそのか弱い翼をむしり取ることは容易な労作でした。悲鳴も哀訴も、悪魔にとつてはすべて無効なばかりか快い楽音となつて聞えるのです。

余りにも美しい裸身。見物の男達は倒錯した異常な劣情からこの美しい機をむちやくちやに磨きたい思いに駆られ、女は醜い嫉妬から思うさまに恥しめたい気持ちに襲われるのでしよう。

サタンの手でマスクのシャッターが下されると里枝の視野は完全に奪われてしまつて、不自由な足で円いステージを落ちないように

歩まされるのです。スポットの輪が全校の裸身を追つて、この素晴らしい鑑賞物の隅々までも観客の前にさらけ出してしまいます。目を閉じられるということは、目明きにとつてはなんという不安なことでしょう。思わずよるめく里枝の肌に粘つくこく這い廻つてくる指先女だけが知っている、女の最も羞しがることを要求する指先でした。

「どう？ お嬢さん、御機嫌は？ 今夜も妾貴女の御相手に頼まれてきたのよ」



あゝ、先日のあの及川という女なのです。里枝には忘れようとしても忘れることの出来ない、冷やかな語感でした。時々、サタンのふるう鞭が腹にしみ渡るような音を床の上に立てゝ、この序曲の伴奏譜を奏でゝいます。

この時、天井から、する／＼とブラコンコのように丸い棒を渡した二本のロープが伸びてきました。愈々これから奇妙な責めの饗宴が展開されるのです。暗闇の中から固唾をのんで凝視つづける観客たち。

ステージの中央で中膝にされた里枝のうしろへ廻された両手は揃えて革のグローブをはめられてしまいました。逆に伸した後手はもうそれだけで全身の自由を奪うのに十分でした。両足首には三十種の黒い鎖によつて連結された鉄の環がまるで足首の白さを誇張するかのように金属製の光を鈍く放っています。

本能的に固く合せた里枝の膝の内側には丸い檜の棒が挟まれ一旦合せた両足を八の字に無理に開かせられてしまいました。なんという羞しい恰好でしょう。とうとう里枝は声を挙げて泣き出してしまいました。観客の私語とざわめき、滝尾が部屋の隅のハンドルを廻すと泣きながら里枝のそんな姿勢は、ぐつと仰向けに反りかえりました。サタンがニヤリと笑いますと、黒いハイヒールをはかされた里

枝のウエストへ革製の幅広いベルトが瀬田と及川の二人の力で喰い込まされ、頸には首輪が装着され、天井から垂れてきたブランコにベルトで連結されてしまったのです。

「あゝ、誰か、助けて！」

里枝の悲鳴が部屋中にキンキンと響き渡りました。瀬田はす早く猿ぐつわを噛ませるとマスクを手荒にはぎ取つてしまいました。

「よし！」

瀬田の台図でこの奇妙な操り人形は次第にステージの床を離れてゆきます。スポットライトはこの里枝のまるでサーカス娘のプランコ吊りのような姿を、心ゆくまで観客達に観賞させるべく所要所に集中させてゆきますが、マスクをはずした顔面だけは、うまくその光茫の中から除外してしまいました。里枝の身体は左右に揺れながらその見事なポーズを次第に上へ上へと引き上げられてゆくのです。ぎつちりと頬に喰い込んだ猿ぐつわの下から観客を酔わせるしほるような呻めきが伴奏となります。尖ったヒールがもがく度に宙に揺れ、下に観客がいる、という意識が里枝の全身を粟立たせますが、今は身動きならぬ身体の節々の痛さを辛抱するのがやつとでした。「あゝ、何故、私だけが此のようにひどい目に会わなければならないのか？」

里枝は気の遠くなるようなひととき、そんな責苦の中でこう自問していました。サタンが観客達に何か喋つていますが、里枝の耳にはもう意味のある言葉としては伝つてきませんでした。それは一度宙に浮いた白い蝶々そつくりの姿だったのです。里枝は息が切れてきました。もう何もかもわからなくなっていました。其処には、母も妹も、Mもありませんでした。

やがて責めの一時が終り降されてマスクをつけられた里枝はよろ／＼とよろめきつゝも自分から手足をふんばつて、やつとこらえていました。里枝の心の中の得態の知れないものが怪しい力でもう一人の御川里枝を否定していました。

（私はダメ……、私はダメな女だわ——）

涙の出ない五体の中で泣き叫んでしました。しかし、そんな状態も永くは続きませんでした。征服に酔つた悪魔たちは更に次の飽くなき凌辱を計画していたのです。

「さて、次は只今こゝで実演を演じました絶世の美女が主演で撮映しました超特作映画『雌犬の飼ひ馴し方』全三巻を上映いたします。これは本日御来場の皆さまに捧げるべく準備しました最上のクリスマスプレゼントであります。その理由はこの映画をごらんになれば直ぐわかる事ではありますが、この娘の正体を知り得た時の皆様の御満足は計り知れないものがあるだろうと存じます。」

（ダメ／＼、私はもうダメになつてしまふ）

グン／＼闇の中へ沈んでゆくような目の前が真暗になつてゆく気が襲つてきます。

瀬田の独白がまだ続いて間に、他の二人の手で締めつけられていた残酷な棒や足枷、革具をぬがされ、マスクただ一つに黒のパンティという姿で、観念した奴隷の様に両膝を摺り合せて、ステージに屈み込んだ哀れな里枝は、両手で胸を掩つて頭を深く垂れていました。

こんな恰好で得られた僅かな肉体的な休息の間は身動きならず縛

しめられた時よりも更に一層羞恥心に拍車をかけられて、里枝の心を堪えられないものにするのでした。

目の前に浮かぶのは二日前の二十三日に手にした電報、それに上野駅頭でまごつく母と妹、巨大な撮映所の建物にタブつて所長の顔H先生、K監督、長身のMの姿、華やかなスクリーンに微笑む御川里枝のクローズ・アップ……。すべてが里枝の心の中で今更となつて激しい勢いでぐるぐると廻転してゆきます。そして、若し、二人の御川里枝が曝露されたとしたら。――絶望――

その時、滝尾の手でフィルム入りの円いマガジンがロープで二階から吊り降されてきました。ストープの赤く燃えさかっている色が里枝の心の中で最後の決断となつて迫つてきました。

(私は負けない！ 負けたくない！)

たつた今迄、只一条にすがりついてきた最後の望み、御川里枝が私であるという秘密が保たれるならば。――、それが今、悪魔の手によつてまさに微塵に打ちくだかれようとしているのです。

(母に一目逢いたい、そしてMに一言お詫びを言いたい)

そんなさゝやかな願いも今はかなえられそうにもないのです。悪魔の巧妙な罠に陥つてより今日まで、翻り続けられながらも、その飽くなき屈辱にたえてきた可憐な蝶々も、いよいよ最後の引導を渡される時が迫つてきたのです。

(もう仕方がない、どんな事をしてでも、あのフィルムを)

しかし、そんな決心を彼等に発見されるのを恐れるものゝように次第に床に近づいてくるフィルムの端を待ちながら、里枝は神妙に蹲っていました。

「もう一度縛つてしまった方が、やりよいじやない？」

及川がまるで里枝の心の中を見透したように言いました。琴糸のように張りつめていた里枝の最後の努力も忽ち水をかけられる思いでした。今一息、そのチャンスも、再び身体の自由を奪われてしまつては後の祭になつてしまいます。滝尾が及川の言葉に同意して再びこの白蝶に首枷を加えようと革の首輪を引寄せた時、

「さあ、どうしたんだい、余り見事なので驚いているのかい？」

瀬田が映写機を隣室から運び出してきて観客達に冗談を云いながら、ステージの里枝の側へ据えつけられました。一同の注意は一齊にその映写機に向けられました。

今だッ！

次の瞬間、信じられない速さで里枝の体が一跳躍していました。思えば、あらゆる人々に羨まれ、祝福された輝しい成功も、徒らに憎むべき毒蜘蛛共を喜ばし肥らせることにばかり役立ってしまったこの忌々しいフィルム。不幸な星の定めは、憧れの銀幕での栄光が却つて仇となつてしまったのです。今迄この身に受けた数かぎりない屈辱の記録を印したこのフィルム。

里枝の右手に握られたフィルムがはじけたバネの様に伸びたその先には、赤く燃えているストープがありました。ごとと、紅蓮の焰が、明り窓から夜空に映え、あわてふためいた好色漢共が出口へ殺倒した時、隣室で焼増中のフィルムが一度に火焰となつて爆発しました。

命がけの醜い争いも永くは続きませんでした。何人逃れ得たか、そんなことは里枝には解りませんでした。只隣室に最も近くにあった及川と、映写機の傍にいた瀬田と滝尾が、全身、フィルムの火焰の中に包まれているのをちらりと眼にしました。

Das Grausame Weib

△残虐なる女性達△

——1901年刊行の独文絵入単行本より——

森 本 愛 造・訳

祝福されるべきクリスマスの夜。

今こそ虐げられ尽した白蝶は天上に導かれて行つたのです。悪虐の限りをつくした毒蜘蛛達を地獄の劫火へ道連れにして——。

その頃。撮映所の豪華な応接室では

「何に、御心配無用、きつと今夜は帰つてこられますよ、スターともなると自分の体で自分の思うようにならんんですからね、とに

かく、今、素晴らしい人気なんですから」

内心の押えきれない不安をしいて押えつけながら、Mは努めて明るく里枝の母と妹を慰めていました。今日のMの案内で撮映所見学をすました母娘は、すっかり満足して、里枝の足音を今か今かと待つていました。粉雪も風もおさまつたクリスマスの夜の更けるのも知らぬげに。

——終——

奴隷所有者としての女性(続)

次に引用する報告は更に生々しいものである。

「鞭打たれて居る奴隷の叫び声をきいて平然としている白人の婦女達、或いはむしろ掩いきれない歓喜の情をあり／＼と示す女性達は吾々旅行者に奇異の念を与える。こゝに引例する婦人はその性行に於ても世評に於ても、善良と見做される人々の中の一人である。併し、残虐な行為や、光景を余り屢々見て了つた為に、彼女の心は大きな変化を来したのだと考えられる。或る朝、私は彼女に一寸した用件で会つたとき、一人の奴隷が、苛酷な鞭の下で、犯した些細な罪の為に、声を限りに喚かねばならなかつた。其の声をきいて私が驚いていると、彼女は不審な顔をして私を見守つた。私は暫らくして、彼女にとつて、

奴隷を打つ革鞭の音や、苦痛の余り叫ぶ声等が、一種の気晴らしになつて居るのを確めて更に驚きの念を深めたのであつた。

而も、その時の叫び声が、彼女の夫によつて鞭打たれて居る彼女自身の所有する奴隷の声である事を知つた時、彼女は全く明らかに声を立てゝ笑つた。「それがいいのよ!」あの男を少し元氣づけるのには鞭が一番効くのだわ、きつと酔もさめるでしょう。背中を皮を鞭でひつぱがしてしまえばきつともつと／＼温順しくなるでしょう。監督が一人残らず打据えてしまえば、此処の奴隷達には一番よい薬になりますのに!」私は、この婦人について人間的な感情を掬みとる事は出来なかつた。その間も、音の響は益々烈しく鳴り響いて、哀れな黒人は、大声で嘆願するのだつた。「御主人様。お許し下さい。神様、助け下さい。」と。けれども、鞭は鳴り続け、

かの善良なる婦人は一打毎に、「そう、そうそれがいいの、それが、一番お前に効くのを勿論、もつと、もつと、そうよ、それがいいの」と呟くのであつた。

筆者は同じような実例を豊富に挙げて、アフリカの植民地に於ける白人女性達の同様な心理や、実状を述べたいと思うが、今の処、其は割愛しておく事にしよう。奴隷制度の行われた地方では、女性は奴隷達に対する一切の同情を失つていた。彼女達の多くは、奴隷制度以外の部分では、常に優雅で隣人愛に富んで居たにも拘らず、他の人間達に加えられる残忍な行為に目を掩わないのみならず、反つて、喜びの色を秘そうとしなかつたのである。私はこゝに、一つの仮説的な主張として白人女性達のかゝる残虐性、加虐嗜好について其が唯、集团的（社会環境的）な場合のみを表れる現象である、という事を証明する為に幾つかの実例、充分且適当な事実を、蒐めてお目に掛けねばならないわけである。

に奴隷達は完全に無防備な状態に置かれて居たのであるから、彼女等の命令や、自ら握つた鞭は充分にその目的を達すべく奴隷達の上に浴せられたのであつた。

この事についての例証に私は、ルヴィヤ・ド・キユサツクの (ROUVELLAT DE Cussac); "Situation des esclaves dans les colonies fran caises"; Paris, 1845) 「植民地に於ける奴隷の地位」(一八四五年版)を引用しようと思う。

彼、ド・キユサツクは元、ガードルウブとマルティク (Guadeloupe, & Martinique) の王立裁判所の一員であつた。

彼は明瞭に白人女性達の味方であるし、又婦人達の善良な天性を支持するのであるが、その觀察の中で、奴隷達が、命令に対して勿論、拒否するのではなく、単に少し計り大きな声で返事する事が、女主人達に鞭を取り上げさせる充分な理由の一つである。と述べて居る。婦人達にとつてこうした懲戒は単に一つの仕事、一つの習慣、正しくひとつの必要であつた。キユサツクは単に婦人の加虐愛好癖を否定する為に種々の引例をしているが、その中の一つは次の様なものである。

常に善良で道徳的な一人の婦人についての

報告である。

一八四三年十一月私は隣から起る大声によつて仕事を妨げられた。S夫人が内庭で、一人の女奴隷に全裸になる事を命じ、その奴隷の姉である奴隷に鞭を持たせて打たせていた十四日の後、同じ奴隷は母によつて鞭を受けた。S夫人の奴隷の一人が、バナ、商人の荷物から腐つたバナ、を一つ盗んだ時、S夫人はバナ、商人の請を入れて僅かに六回の皮鞭を振つたにすぎなかつた!

キユサツクは更につゞけている。

私はS夫人について語つたのだが、その必要があればいつでも何人かの拷問や、鞭打を以つて、奴隷を教育する婦人達の例を示してもよろしい。その人数は知合の人々だけで二〇人を超えよう。と。

既に屢々引用された。クーバーの著作 (American Slavery as it is) の中で、ノースカロライナ (North Carolina) の農園で大工をして居たコールキンス (CAUL KINS) は次の様な記録を残している。

「農園にはベン (BEN) という奴隷の召使いが居た。或る日、彼は邸の中へ呼ばれて行つた(私達は庭の小屋に住んでいたのだ) まもなく、ベンは十七才の一人の女奴隷を連れて

出て来た。ペンの女主人である、当家の若い娘が、この女奴隷に、鞭を与える様に命令したのであつた。ペンは女を私の居室に連れ込んできた。そして女に云うのだつた。「わしが隣の部屋にいく間じつとしていろ、立つてゐるんだぞ。」ペンはすぐに戻つてきた。手には女主人によつて指定された牛追用の長い編革鞭が握られていた。そして、女の前に立つた。私は居たゝまれなくなつて急いで隣室へうつゝた。まもなく、娘の烈しい泣き声と鞭の音がきこえた。一打毎に女は「ペン！」「ペン！」と叫んだ。暫らくして、女が連れ出された後、ペンに、今の娘の罰をうけた理由をきいてみた。娘は何かつまらない些細な事で、女主人の気分をこわしたのだつた。其の場で若い女主人は烈しく平手打を与えたが、其の時、彼女の着物の留針で女主人の指が一寸傷ついた。そこで、娘は鞭打の刑に処されたのだつた。私は更に、娘は全裸で鞭打たれたのかときいてみた。ペンは御主人は全裸にしないと鞭の味が判らないと思つていらつしやるのでと答えるのだつた。曾つてペンが一人の女奴隷を鞭打つ様に命ぜられた時に知らずに着物をきたまゝで鞭打つた事があつた。女を女主人の許へ連れ戻した時、主人は

すぐに裸にして何故背中に傷がないのかと尋ねた。そして鞭打たなかつたのでないかと疑つた。女主人の疑問はペンが着物を脱がせなかつたという事で解決したが、女主人はその時、ペンに厳しく云いつけたのである。

「若し今後私が鞭打を命じた時、お前がその女を裸にしなかつたら、お前の背中に、私が革鞭の味をよく教えてやるからね。」

もう一人の証人リュウベン・G・マシイ (Reuben G. Macy) (前例と同一の書物より引用) の証言は次の通りである。

「私は一八一八年から一八一九年にかけてサ

ヴァンナ河 (Savannah) の河口の南カロライナ側の岸に住んでいた。其処には一人の女と彼女の娘とが多くの奴隷を所有して住んでいた。他に白人達が訪れる事は滅多になかつた。奴隷達の監督には専任の者が當つていた。彼は、週に一度報告をし、女主人達が必要と認めた刑を実施する役目であつた。多くの場合刑は裸の背中に二十五——三十回の鞭を当てる事であつた。其の刑に用いられる鞭は、

二呎の太い柄に四—五呎の革紐とで出来ており、二人乃至四人の奴隷がよく、私の目前や、少し離れた処で鞭打たれるのであつた。時々、勞働中の奴隷の背中を調べてみると、

背中には全ゆる方向に向つて走っている鞭痕が無数に見られた。それは固いミ、ズばれになつていた。

或る日、私が木綿屋で働いていた時、一帯が騒がしくなつたので、私は戸口の所まで走つて行つた。外では監督が、叫び立てる女を両手で吊し上げてつま先が地面とすれ／＼になるまでにし、ゆつくりと彼女を全裸にし、徐ろに鞭打を始めた。打数は女の喚声にも拘らず三十回に達した。この鞭打刑の理由は、女奴隷が、女主人に一寸冷たい声で返事をしたという事であつた。

この様に、多くの旅行記が、その多くの頁を割いて、奴隷達の全く些細な手落や、自分の気分の為に、情容赦なく鞭を振つた女主人達について語つて居るのである。

シュテッドマン船長の手記は更に詳しい。

(Captain J. G. Stedman; Narrative of a five year's expedition against the renolled negross of Surinam; London 発行、1796、第805頁)

(〇〇〇)

x x x

ドレイ・ボーイ

長谷川 洋

「今迄はお前の事も普通の人間様なみに取扱かつてきてやつたけど、これからそうはゆかないよ、もう二月も家で無駄飯を喰わしておけば、お前がどの位のツブシ値しかないつて事は私には、はつきり判るんだよ、その上何んだね、小遣いをやらないつたつて、店の金を盗もうなんて……」

僕は後で高手小手に結えられた細紐の儘でもう一時間もマダムに叱られているのです。

四カ月前に父に死なれてから、落目になつた僕の家のお蔭で僅かな縁を頼つて此の美容院に住込む事になつたのですが、仕事はかなり色々言いつけられるのに、御給金も休日とでもなかつたので、つい店の金に手が出かゝつたのです。

「警察へ突き出したら、こんな御説教位じゃ

すまないんだよ、泣いてばかりいないで、何とか言つたらどうだい、きれいな優しい顔をしていて、どこにそんな手をかくしてるんだらう？」

五六年前に主人に死別したとかいうマダムは、女手一つで沢山の助手を使つて美容院を経営しているだけあつて、十七八貫もある太つた身体をイラ／＼したように揺すつて叱りつけます。

「今日は只ですまないよ、これから少し性根を入れ替えてやるんだから」

マダムはそう云うと、いきなり後から僕の背中を足で蹴とばしました。後手に縛られているので僕は野球のスベリ込みのような恰好で顔を畳に打ちつけて平たくなりました。僕の背中に馬乗りになつたマダムは手早く両手

を廻してズボンのベルトを外すと、ズボンを下げようとします。僕はズボンを外されて、お尻等を見られるのは恥しいのと、これから何をされるかわからない恐怖で真青になつていました。

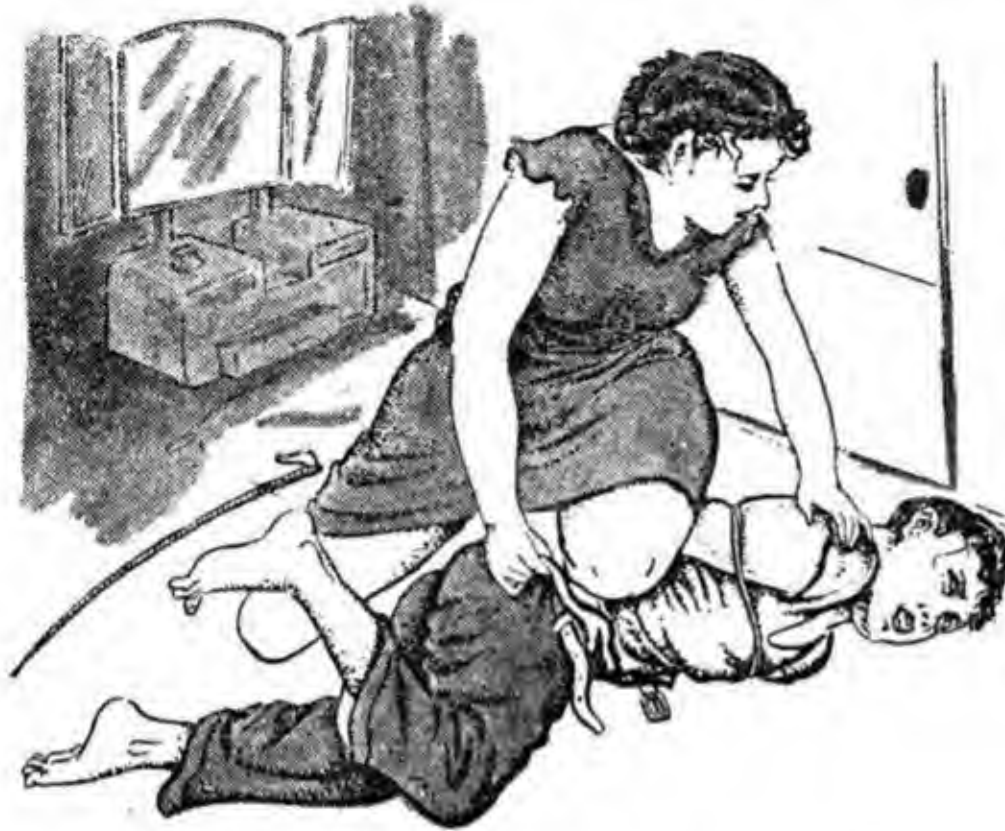
前にも書きましたように、僕はこの齡になつても下着としてはコンビネーションをつけているだけなので(六月の頃でした)ズボンを外されたら、それこそお尻やアキヌスが皆丸見えになつてしまうのです。そしてこんな姿勢も何年か前に初めて解剖という悪戯をされた時と余りにもよく似ていました。

「とてもいい恰好だよ、お前にはやつぱり猿股なんかよりコンビネーションがよく似合うよ、鞭で馴らすのにも都合がいゝし、これからはズボンも股の割れているのを穿かせてやるよ」

こんな悪口がとう／＼本当になつてしまつたんですから恐ろしいものです。「あッ」と僕は飛び上るように身をちぢめました。うつ伏せになつていたので見えなかつたのですがマダムが鞭の鋭い一撃を僕のむき出しのお尻に与えたのです。今迄にも学校時代には、必ず誰かのドレイとして征服され、屈従させら

れていた僕は随分リンチにも馴れていたのですが、この痛さばかりは堪えられないものでした。マダムの力が強いのか、鞭に何か仕掛けがあるのか、二打、三打と打たれる度に僕は全身をビリ／＼痙攣させて耐えました。俗によく尻を鞭で打つと云う事を申しますが、その痛さは本当に鞭打たれた者でなければ判るものではありません。想像していただくと痛さとは比べものになりません。こんな痛い目にあうのなら何んな事でも我慢できます。後手に縛られているので逃げようもありません。只なんとかして、この苦痛から逃れなければ……それはもう理屈でなく一つの本能です。

「マダム、許してごめんなさい。もうしない……何ん



でもしますから……」

何を云っているのか自分でも判りません。とも角、マダムに絶対服従する様な事を云い乍らも身体をよじらせて少しでも鞭をさけようとしています。この間いくつ鞭打たれたか判りません。鞭が止んだかと思うと構えたまま「フン、何でもしますからだつて？」

僕は一生懸命です。このまゝ鞭を続けて打たれたらいえ／＼そんな事は考えるだけでも恐ろしい。考えられない程恐ろしい痛さなのです。

「何んでもしますマダム、僕はもう今後はマダムのおつしやる通りどんな辛い事でも喜んでやりますから、鞭だけは許して下さい」

学校の頃、何度こりやつて同級生

の前に土下座してドレイになる事を、誓った事でしよう。

そんな訳でこの言葉だけはほんとにスラ／＼出ました。

「そりや面白いね、お前が本当にその気なら鞭は一時おあすけにしといてやるよ、そのかわり今日からお前は私に絶対服従なんだよ。お前を私のドレイにしてやるわ」

私は瞬間ハツとしました。ドレイ、絶対服従、ドレイ。その辛さも僕は今迄に何回となく体験しているからです。でも、そんな後の事を考えている暇はありません。鞭はまだマダムの片手に握られているのです。

「ドレイになります。マダムには絶対服従します。きつとです。」

僕はオウム返しに言つてしまいました。

「誓えて？」

マダムは足で僕をごろりと仰向けにひっくり返えすと、椅子に腰かけて、僕の顔の上に足をのせました。

「さあ、キツスおし、私の足の裏、ホラ、足の指の所だよ」

僕はそんな事は嫌でしたが、さつきの鞭の痛さはこんな不潔な仕事でも喜んでさせるだけの十分な力を持つていました。左右の足へ

キツス、いや単なるキツスではありません。ペロペロと一本一本左右の足を舐めさせられるのです。舌がいく加減、疲れてしまいました。マダムは黙って立ち上ると、穿いていたズボンを下しました。僕はまともに見ていては悪いと思つて顔を反しながら、横目でソツと見ました。

マダムの穿いている長ズロースはむつちり肥つた脚にピッタリついていますが、股のところは股割れになつていたので、僕のところからは、見まいとしてもすつかり見えてしまうのです。

「何の役にも立たないんだから、これから毎日こゝへ……………やる。」

暫くは彼女のお気に召すために、いろいろの恥しい芸を仕込まれました。やつとマダムが後手の結び目を解いてくれた時は、何の感覚もありませんでした。僕は疲れと恥しさの為にその場へくずれる様に坐っていました。

「ヒ、ロ、シ」

物干台へ出ていたマダムが僕を呼びます。こゝの物干台は二方が板壁になつていて一方は隣の塀になつていますので他から覗かれるような事はありません。晴れていて陽が照つていました。僕が物干台へ出るなり、マダム

は小さい声で「四つ這いになれ」と云います。僕が言う通り四つ這いになりますと、マダムは悠々と僕の背中へ跨つてズボンを脱がすのです。お尻に暖かい陽ざしが直接当たる様な気がします。

「痛いッ」僕はマダムに馬乗りになれたまゝ、で思わず前へのり出しました。不意にお尻へ鋭い鞭を当てられたのです。何とも云えないジンと全身にこたえる痛さです。肥つたマダムの文えているだけでも大変なのに、その上鞭ではたまつたものではありません。僕は堪え切れなくなつて、くた／＼とその場へ潰れてマダムの下敷になつてしまいました。怒つたマダムは僕に一番きかないとされている事を命じます。一番きかないものを口で舐めなければならぬドレイ、最初から、こういう最も恥しいキタナイ事をさせられてしまえば後は何んでもないでしょう。マダムや助手のズロースや月経帯を洗わせられてもなんでもないことになります。ドレイにされた以上、そんなきかない事をさせられたりするのには絶対服従の儀式みたいなものではないでしょう。か。若し、本当に恐れ入つていない場合には誰がそんなキタナイ事をしたりする事が出来るのでしょうか。

ドレイボーイにされた僕は、それから助手の若い女たちから「ヒロシ、ヒロシ」とさんざん弄りものにされるのですが、不思議なことに最初あれ種、苦痛を感じ怖れていた鞭がその後時の経つにつれて、なんとなく懐しくもう一度叩いてほしいような、又、僕にあれ程ヒドイ事をしたマダムが慕しくて仕方がないような気持が起つてくるのでした。

「ヒロシ、私のこのズロース洗つときな」とか「ヒロシ、私のバンドまだ洗つてないのかい？」とか「ヒロ、脱脂綿買つておいで」とか「ほら足の爪をお切り、バカ、そんなに深く切つたら痛いじゃないか」その外、肩を揉めの靴を磨けの、と一日中追い使われています。僕のいろいろの思い出の中で一番イヤだつた事について今日は書いてみました。又この次には色々変つたお仕置などを書いてみましょう。

長谷川洋氏へ、貴方からの身辺雑記？ 順を追うて拝見しています。最近、手錠雑考肛門接吻、の二稿を受取りました。中々面白いんですが、後者は一寸そのまゝ公表出来ないようなので残念です。

【編集部】